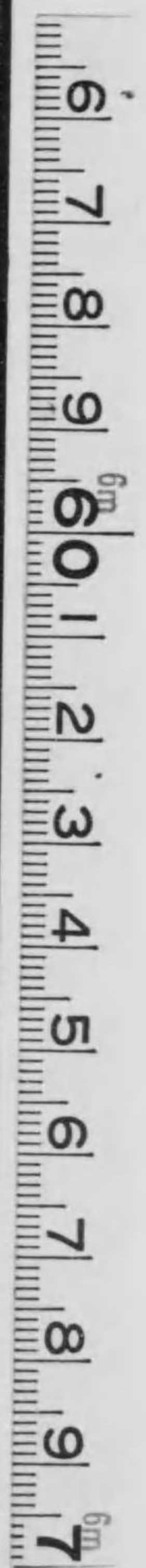


295

35



始



斗6044



醫學博士
文學博士

富士川游著

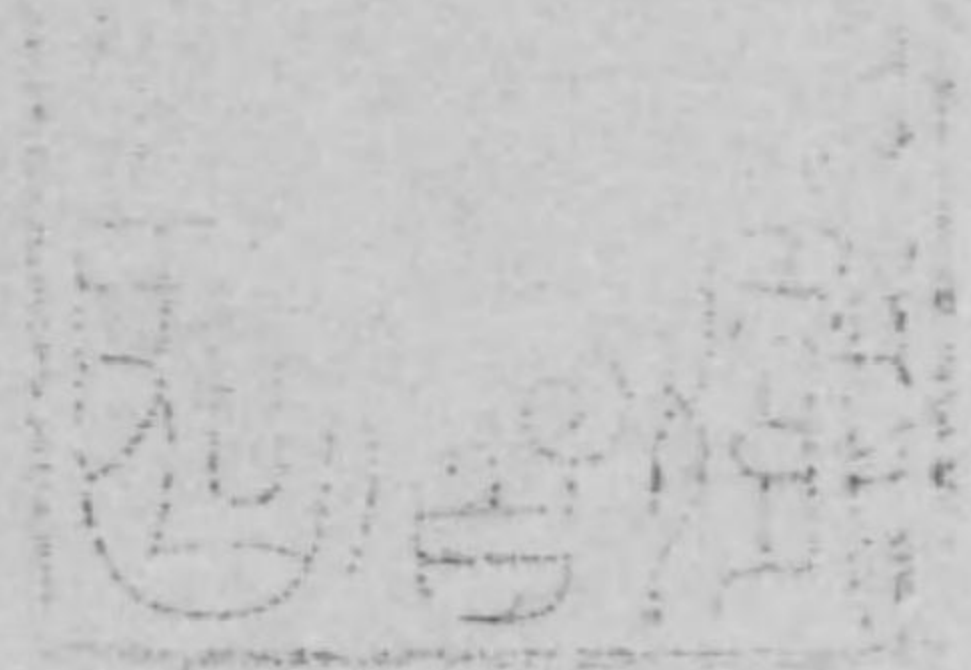
異常

兒童

全

東京太陽堂發行

大正
13.12.11
内交



294-35

異常兒童

緒言

大正十一年の夏、秋田縣男鹿夏期大學に教育病理學の大要を講述したのが、縁となり、異常兒童に関する通俗的小冊子を編纂し、廣くこれを世に行ふこそよけれど、書肆太陽堂主人の徳憑せるがままに、ここに秃筆を呵して遂にこの一篇を成したのである。固より通俗的のもので、大方君子の閲覽に供ふべきものではないが、しかしながら今日の實際にありて、異常兒童に関する知識が普及して居らぬのを目睹して居る私は、この一小篇のやうなものでも、これを公刊すれば幾分かの裨益はあること信じ、厚顔にもこれを書肆に托したのである。若しこの書を一讀せられたる人で、西洋諸家の著述によりて一層深き知識を得んことを求められるならば、私は左の著述を推薦する。

Heller, Grundriss der Heilpädagogik. 1904.

Heller, Pädagogische Therapie, 1911.

Scholz-Gregor, Anomale Kinder. 1922.

Stromeyer, Die Psychopathologie des Kindesalters. 1923.

Gregor, Leitfaden der Fürsorgeerziehung. 1924.

是等諸家の著述も、私のこの小篇と同じく共に皆通俗的のものである。しかしながらそれぐく自家の實驗も擧げてあり、又一々の場合に於て著者自身の考案も相違して居るところもあるから、参照に資すべき點が尠くないのである。

我邦にも榊保三郎博士の著書を始めとして、吳秀三、三宅鑛一兩博士と私の共著の教育病理學、笠原道夫博士の著述、三宅鑛一博士の著述、杉田直樹博士の著述等がある。それも固より参照せらるべきものである。

大正十三年十一月

鎌倉にて

富士川

游記す。

異常兒童目次

緒論

異常兒童とは何ぞや.....	一
兒童缺陷○教育病理學○異常兒童の學.....	三
ド、モリア氏の異常兒童の分類.....	四
シヨルツ氏の異常兒童の分類.....	六
異常兒童の種類.....	七
精神機能の尋常と異常.....	一〇
精神機能の定型.....	一一
人格の變異.....	一二
精神機能の均勢.....	一四
内部の原因と外部の原因.....	一六

先天性素質……………一七

遺傳素因……………一九

變質又は變性……………二〇

胚細胞の障礙……………二三

毒作用……………二四

胎内獲得の素質……………二六

外部の原因……………二七

素質と環境……………二九

身體徵候

變性徵候……………三一

身體的變性徵候……………三二

精神的變性徵候……………三六

異常兒童身體の異常……………三八

運動障礙……………四〇

遺尿、腺病、鼻咽腔腺殖生……………四二

感覺器官の障礙……………四四

言語の障礙……………四五

精神薄弱

總論

精神薄弱とは何ぞ……………四八

「クレチン」……………五〇

「モンゴリスムス」……………五二

精神薄弱の區別……………五五

生後一年に於ける精神薄弱の認識……………五六

運動の状態……………五八

握攏、固視、疼痛感覺減却……………六〇

吸乳の巧拙、泣き聲……………六二

注意力缺乏……………六四

(附錄)

智力検査法.....六七

各論 白癡

白癡の定義.....八一

覺官の異常.....八一

表情運動.....八四

共同運動.....八五

叫喚.....八五

「チック」.....八五

衝動行爲.....八六

感情の異常.....八七

運動能力の障礙.....八九

言語の異常.....八九

癡愚

癡愚の定義.....九一

精神的受働性.....九二

注意.....九三

言語.....九四

記憶.....九五

聯合作用.....九六

想像.....九七

意思.....九七

判斷.....九八

運動の状態.....九九

失調性障礙.....九九

遊戲的自發作業.....一〇〇

共齊機能.....一〇〇

チツタ性運動.....100

感情.....101

性格の變化.....101

氣分.....103

魯鈍

魯鈍の定義.....105

感覺.....105

注意.....105

聯合作用.....106

觀念不十分.....107

記憶.....107

意思.....108

精神的小兒狀態.....109

否定性.....111

超社會的.....113

彷徨癖.....114

性慾衝動.....114

性慾倒錯.....116

耽溺.....116

病的不機嫌.....117

學校竊盜.....118

衝動的傷害志向.....119

性格の變化.....119

智力缺陷の程度.....120

精神低格

總論

精神低格の定義.....123

精神作用調和障礙.....123

感情の異常……………一三四

所謂道德狂……………一三五

智力の一側の發達……………一三六

想像力異常……………一三七

妄想……………一三八

強迫觀念……………一三九

強迫行爲……………一四〇

性欲異常……………一四一

蒐集癖……………一四二

盜癖……………一四三

彷徨癖……………一四四

身體機能の障礙……………一四五

精神低格の種類……………一四六

各論
神經質

神經質の定義……………一三九

神經質の持續的徵候……………一四〇

自制の缺乏……………一四〇

精神作用の不調和……………一四一

觀念聯合容易……………一四二

思考輕快……………一四二

神經性作業恐怖……………一四四

注意作用……………一四六

轉向性……………一四七

感情の異常……………一四七

氣分の變常……………一四八

感動……………一四八

「ヒポコンドリー」性……………一五〇
意思の障礙……………一五一

「ヒステリー」性精神低格

想像の亢進……………一五三
自我を中心とする觀念……………一五五
感情亢進……………一五六
感情轉變……………一五六
感情倒錯……………一五七
精神機能易動性……………一五七
感 動……………一五八
感覺的喜劇……………一五八
悖德行爲……………一五九
精神の分離……………一五九
想像性虚言……………一六〇

放火……………一六一
我 儘……………一六一
「ヒステリー」性の感染……………一六二
彷徨癖……………一六三
竊 盜……………一六三
自殺企圖……………一六四
暗示性……………一六四
自家暗示……………一六五

癲癇性精神低格

癲癇病……………一六六
癲癇發作後の精神障礙……………一六七
癲癇性の性格……………一六八
小癲癇の發作……………一七〇
癲癇性朦朧狀態……………一七〇

氣分の變常.....一七一

變質性精神低格

變質性精神低格.....	一七四
發揚性の變質性精神低格.....	一六五
無感性の變質性精神低格.....	一七六
抑鬱性の變質性精神低格.....	一七六
精神衰弱.....	一七六
躁暴性の變質性精神低格.....	一七九
衝動性の變質性精神低格.....	一八〇
精神不安定者.....	一八五
偏執性變質性精神低格.....	一八五
強迫性の變質性精神低格.....	一八七
悖徳性.....	一八九
先天性犯罪者.....	一八九

性慾異常を現はす精神低格.....一九〇

療法 (教養、取扱)

總論

異常兒童の治療.....	一九三
家庭に於ける教養.....	一九六
特別治療教育院.....	一九八
教養者.....	一九八
醫學と教育學との共同作業.....	一九八

各論

(甲)精神薄弱者の教養

白癡

(一) 整規の常習○食事時間の整理○栄養の養護○清潔○遺尿.....	二〇〇
(二) 獨立自助○從順○慣習○衝動性運動の轉向○運動機能の調整○反射興奮性の抑制○安靜療法.....	二〇二

(三) 教養の方法 ○ 運動の練習 ○ 覺官の練習 ○ 區別の練習 二〇四

癡愚

- (一) 秩序を保つこと ○ 清潔 ○ 遺尿 ○ 便通 ○ 食慾缺如 ○ 疲勞感情 ○ 受働性 二〇七
- (二) 發揚性の癡愚 ○ 遲鈍性の癡愚 ○ 作業慾 ○ 不良習癖 ○ 交際慾 ○ 訓練 二〇九
- (三) 獨立自助 ○ 自信 ○ 教師の權威 ○ 賞罰 ○ 賞罰の意義 二一一
- (四) 練習 ○ 教授 ○ 運動の練習 ○ 區別の練習 ○ 混合練習 ○ 直觀教育 二一二
- (五) 教科 ○ 讀方 ○ 書方 ○ 算術 ○ 圖畫 ○ 實科教育 ○ 精神の自發作用 二二四

魯鈍

- (一) 魯鈍の精神の特性 ○ 記憶的の傾向 ○ 魯鈍のものを取扱ふ方針 ○ 反社會的傾向 二二七
- (二) 他の兒童との交際 ○ 不良のものとの親しくする ○ 家庭の狀況 ○ 母親の感作 ○ 利己的 二二九
- (三) 理解判斷及び決斷力の薄弱 ○ 不從順 ○ 教育的暗示 ○ 懲罰の作用 二三一
- (四) 獨立自助 ○ 自我感覺の高上 ○ 内部の規定 ○ 不満足及び不確實の感情 ○ 教育強制は不可 ○ 職業の選擇 二三三

(五) 魯鈍に對する教授 ○ この本旨 ○ 特別教授 ○ 補助學校 二三五

(乙) 精神低格者の教養

總論

精神低格者の教養	二三八
治療的教育の方法	二二九
精神療法	二二九
作業療法	二三〇
體操・散歩	二三一
身體缺陷の療法	二三一
衛生的方法	二三二
輕度筋肉障碍及び「チック」の療法	二三四
遺尿	二三四
覺官障碍	二三五
言語障碍	二三五

精神低格者・教育の本旨……………二三五

善良の教養者……………二三六

リーツ氏の學校……………二三六

習慣養成……………二三八

規律に慣れしむ……………二三九

衝動の制止……………二四〇

懲罰教育の非……………二四一

利他的感情の覺醒……………二四一

少年共和國……………二四二

意思を強くする法……………二四二

苦悶の處置……………二四三

強迫觀念に對する處置……………二四四

想像變性の處置……………二四四

性慾異常の處置……………二四五

各論

神經質

(一) 神經質○特殊の教育方法を要す○他制の方法○早熟の徵○大人との交際を避ける○幼稚園及び小學校の平凡化作用……………二四七

(二) 環境の變更○家庭教育の不都合○感情と思考との平衡を圖る○宗教的教育○美的教育……………二四九

(三) 讀物の内容○讀み方○演劇○活動寫真○節制と寡慾……………二五一

(四) 不快感情を治す○快活なる兒童と一處に居らしむ○懲罰は禁止すべし……………二五三

(五) 意思の教育○自制の力○意思素質の異常○強迫意思○意思薄弱……………二五五

(六) 従順に慣れしむ○善良の模範○體育の方法○方式的體操○遊戲○手工等……………二五六

(七) 二次的觀念の制止○作業著手の困難○精神的作業○揮散性及び不精確○手工教育○圖畫○體操○運動練習……………二五八

(八) 學科の衛生的改善○所謂教授衛生○精神の疲勞○精神作業能力相應の課程○身體上の注意……………二六〇

「ヒステリー」性性格

- (一)「ヒステリー」性性格○環境の變更○意識的等閑○奇襲法○虛假療法……………二六三
- (二)治療教育院○作業療法○遊戯○園藝○散步……………二六五
- (三)寄宿舎○「ヒステリー」性兒童教育の困難……………二六七

附 錄

異常兒童の社會的保護

- 異常兒童の鑑別……………二七〇
- 觀察所……………二七〇
- 外來診察所……………二七一
- 精神薄弱教育院……………二七一
- 治療教育院……………二七三
- 保護院……………二七四
- 少年「クリーニック」……………二七五
- 家庭養護の監督……………二七六
- 補助學校……………二七七

- 少年裁判所……………二七九
- 強制教育院……………二八〇
- 保護教育院……………二八〇



異常兒童

緒論



異常兒童とは何ぞや ○精神状態の異常 ○尋常の標準より以上のもの ○尋常の標準より以下のもの ○精神病 ○尋常以下の精神機能にして尙ほ被教化能力を有するもの

異常兒童とは精神の状態が尋常のものとは相違して居るところの兒童を指していふのである。單純に異常兒童の文字を見ることは、言語の障礙を存するもの、失明せるもの、聾啞のもの、及び身體の畸形を有するもの等、身體の状態が尋常でないものも皆これに屬すべきことはいふまでも無いが、

緒論

今ここに異常兒童といふのは此の如き身體の状態が異常であるものをば除きて、ただその精神の状態が尋常でないもののみを指すのである。しかしながら精神の状態が尋常に相違して居るものの中にも、種種の差異があり、一方には神経中樞の發育が佳良で、その精神機能が尋常の標準より以上のものがある。これは天才又は能才と名づけらるるもので、もとより異常兒童の中に算すべきものである。又一方にありては、これに反して、たとへば精神病の如く、精神機能が尋常の標準より以下で、著しく健康の状態から遠ざかつて居るものがある。これも異常兒童に算すべきものであるが、ここに異常兒童といふものの中には天才又は能才といふやうな精神機能の優越せるものをば除きて、尋常の標準より以下の精神機能を有するところのものを指して異常兒童といふのである。又精神機能が尋常の標準より以下であるがために普通の教育の方法では教育を施すことが困難であるが、しかも尙ほこれに對して相當の教育を施すことが出来る程度のものをして、ここに異常兒童と名づくるのである。それ故に精神機能は尋常の標準以下であつても精神病のものはこれを異常兒童の中には算せぬのである。

(II)

兒童缺陷○ストリウムベル氏の研究○教育病理學○シヨルツ氏の研究○兒童の性格缺陷○異常兒童の學

獨逸の言語に「キンデルフェーレン」(Kinderfehler)といふのがある。直譯すれば兒童缺陷であるが、その意味は兒童の精神の缺陷といふことで、精神の缺陷を有する兒童はすなはち、ここにいふところの異常兒童である。一千八百九十年獨逸ライプツヒ大學教授ストリウムベル氏はこの兒童缺陷をば科學的に研究せむがために新に一個の學科を興してこれに教育病理學 (Die pädagogische Pathologie) の稱呼を附したのである。これよりして後、教育病理學といふ稱呼は、世に行はるるやうになつたが、これは全く兒童缺陷の學科であるから、教育病理學といふものはここにいふところの異常兒童につきて研究するところのものである。

それから又、ドクトルシヨルツ氏は一千八百九十五年「兒童の性格缺陷」と題する書物を著して兒童の性格 (Charakter) の缺陷を心理學上及び醫學上より敘述したのであるが、性格の缺陷といふものは固よりその精神機能の異常に屬するもので、異常の徴候が主に感情及び意思の方面に現はれたる場合に、それが性格の缺陷となるものである。それ故に、性格の缺陷を呈するものはすなはち異常兒童に屬するもので、異常兒童のすべてが皆多少の性格缺陷を有することは著しい事實であるか

ら、性格缺陷を有する兒童といはるるものはすなはち、ここにいふところの異常兒童の中に算せらるべきものである。従つてストリウムベル氏が教育病理學と名づけたところの新學科もこの異常兒童につきて研究するところのものであるから、これを異常兒童學と稱すべきである。

(三)

ド、モリア氏の研究〇異常兒童の分類〇遅性兒童〇智力發達の十分ならざる兒童

一千九百一年、白耳義のド、モリア氏は『異常兒童』(Die anormalen Kinder)と題する一書を著はして、異常兒童とその家庭及び教育に於ける教育の方法につきて論述した。ド、モリア氏はブリュッセル大學の生理學教授でありながら、又ブリュッセル師範學校及び女子師範學校に教鞭をとり、生理及び異常兒童教育の講座を擔任し、一千八百九十七年白耳義國にて始めて特殊學校(遅性兒童のみを收容する)をブリュッセル市に設立せしときに、擧げられてその醫學的監督の任に當り、異常兒童の研究には、經歷のある學者であるが、異常兒童といふものの定義を下して、異常兒童とは、その神経系統に種種の異常があるために普通の教育を受けることが出来ぬところの多數の兒童を指すものである。それ故に異常兒童といふ名稱の中には尋常の學校に入ることの出来ぬ不幸のものゝ殆ど一切を包含するものであると論じて、異常兒童をば

一。言語障礙を有する兒童

二。聾啞

三。失明者

四。遅性兒童

(イ)教育上 受働性のもの

從順ならざるもの

第一度白癡

第二度白癡

第三度白癡

に類別して居る。しかしながら聾啞と失明者とに對しては既に久しき以前から醫家と教育家とが特別の注意を拂ふて居り、又それぞれ特殊の教育方法が講せられて居るから、ここに異常兒童として論すべきものは遅性兒童であると言つて居る。ド、モリア氏が遅性兒童といふのは精神の薄弱又は異常のために尋常の教育を受ることが出来ぬところの兒童を總稱するもので、これを要するに智力

(Intelligenz)の發育が十分でないところの兒童を指して異常兒童とするものである。智力の十分でないところのものが異常兒童に屬するといふことは無論であるが、しかしながら、異常兒童といふものは單に智力の薄弱なる兒童のみを指していふべきではない。

(四)

シヨルツ氏の異常兒童論○精神機能の中庸を離れたるもの○精神薄弱○神經及び精神の障礙○精神異常者

ド、モア氏の後、十年にして、獨逸ブレーマンの神經病専門科ドクトルシヨルツ氏は同じく『異常兒童』(Anomale Kinder)と題する著述を公にして異常兒童の本態とその教育方法につきて論述した。シヨルツ氏の説に據ると、精神の異常といふことは精神の機能がその平均を離れて居るのを指すのであるが、その平均を離れるには上の方へ離れるものと、下の方へ離れるものとの二たつの方向がある。それ故に、異常といふものはただ精神機能が劣等なるものばかりでなく、又これに反して精神の機能の優越せるものもある。しかしながら、ここに異常の兒童といふのは、その理性(智力)、性格(感情及び意思)が中等の平均より以下にあるものを指していふのである。その劇度のもものは

すなはち精神病であるから、これは疾病であつて、異常の中に屬すべきものではない。シヨルツ氏は此の如くに異常兒童の定義を下して、それを(イ)精神薄弱(ロ)神經質(ハ)「ヒステリー」(ニ)癲癩(ホ)舞蹈病(ヘ)精神異常者(Psychopathen)の數種に區別して居る。この中、精神薄弱といふのは理性が中等の平均よりして下位にあるもので、ド、モア氏が遅性兒童と名づくるものはすなはちそれである。神經質、「ヒステリー」、舞蹈病等の神經及び精神の障礙と、精神異常者と名づけられたる種類のもは遺傳性に神經の素質の異常のためにその人の性格(感情及び意思)の方面に種種の異常を呈するものである。それ故に、シヨルツ氏が論ずるところの異常兒童はド、モア氏がいふところの遅性兒童の外に、なほ性格缺陷を有するところの兒童の多數が含まれて居る。

(五)

コッホ ヘルレル等諸家の研究○異常兒童の種類○精神薄弱○智力の異常○精神低格○感情及び意思の異常○精神低能。

その他に、コッホ、ヘルレル、等諸家の敘述もありて、異常兒童の定義及びその範圍に就ては、彼此多少の相違があるが、大體に於て、シヨルツ氏が説けるが如くに、その精神機能にありて、理性

と性格とが、中等の平均より以下にあるものを異常兒童とすることに一致して居る。それ故に、余は異常兒童をば左の二種に大別することが最も合理的であると信ずる。

第一 精神薄弱 (Die geistige Schwachheit)

第二 精神低格 (Die geistige Minderwertigkeit)

精神薄弱といふのは精神機能の十分ならざる中に、殊に智力の發達が十分でないものを指すので、俗にいふところの馬鹿である。精神低格といふのは精神の價格が低いといふ意味で、智力の發達には左ほど著しき異常は無くして、その感情及び意思の作用が尋常でなく、從てその性格が著しく異常をあらはして居るものである。固より精神機能の中に、智力と感情と意思とは互に相區別して現はれて居るものではないから、智力のみが異常を呈して感情及び意思に何等の變化もないといふやうなことは絶対に無くして、若し智力に一定の異常がある場合には又それに伴ふて感情及び意思の異常があり、感情及び意思の變化をあらはすやうな場合には又それにも多少の異常があるといふことは勿論である。精神の機能をば、智力と、感情と、意思といふやうに區別するのは抽象的にこれを敘述するために必要なので、實際にありては精神の機能は、此の如く判然と區別さるべきものではない。しかしながら、異常兒童の中にありて、主に智力の異常をあらはすものと、又主に

感情及び意思の異常をあらはすものと、明かに二個の種類がありて、これを判別することは實際に於てこれをなすことが出来るのである。それ故に異常兒童を大別して(一)精神薄弱(二)精神低格の二個の種類とすることは合理的のことであると余は信ずる。又實際の點よりして見るも、異常兒童をば智力の如何によりて分類することはこれを取扱ふに方りて便益が多いことである。

精神低格といふ言葉は神保三郎、片山國嘉の兩博士が始めて用ひられたやうに記憶するが、今日では教育家の中に廣く行はれて居る。これは精神能力の低いといふことを示すもので、余がここにいふところの精神薄弱と同じやうなものであらう。すなはち智力の劣等なるものが主に精神低能であると思はれるのであらうと思はれる。しかしながら感情及び意思が尋常でないもの(即ち余がここにいふところの精神低格)も一方より見れば同じく精神能力が低いものであるから、余は精神低能といふ言葉を用ひずして、異常兒童をば精神薄弱と精神低格との二類に大別する方がよいと思ふ。

(六)

精神機能の尋常の標準○尋常と異常との境界○定型○尋常の定型より離れたるもの

異常兒童の定義をば、上記の如くに、精神の機能が尋常の標準より以下にあるものとすると、然らば尋常の標準といふものはどうして定めらるべきであるかといふ問題が提出せられるであらう。固より尋常(Normal)と異常(Abnormal)とは互に相違したる概念で、理論上にはこの二個の概念は明瞭に區別することが出来る。すなはち尋常に異なりたるものが異常であるといはれる。しかしながら尋常と異常とは本と全然獨立して別個に存在するもので無く、同じものの兩方の極端であるから、その兩方極端の場合には異常を尋常より區別することは容易であるが、その中間のものにありてはそれが尋常であるか、異常であるかを區別することは甚だ困難である。たとへていへば、人體の温度は大抵三十七度乃至三十七度五分を以て尋常とすると定めたところで、それならば三十六度九分若しくは三十七度六分は異常であるかどうかといふと、その解決は容易でない。尋常と異常との境界は固より自然的に存在するものでは無く、隨意的にこれを區別するのであるから、嚴密に尋常と異常とを區別することが殆ど不可能であるといふことは勿論である。しかしながら、多數の場合にありて、普遍的に現はれるものと、特殊的に現はれるものと、常住に現はれるものと、偶然に現はれるものがあるから、それ等のものに就て精しく検査を施すときは、ここに一個の定型(Typus)が得られる。これを尋常の標準(中等の平均)として、この定型(標準)に異なるものを異常とすること

は、實際上多數の場合にありて決して不可能なことでは無い。それ故に、尋常の定型(Normaltypus)を定むることが出来れば、その定型より離れたるものを異常として認むることは容易である。

(七)

精神機能の定型○客觀的計測の困難○主觀的判斷○客觀的の標準を確立することの不可能

しかしながら、精神機能の定型を定むるといふことは身體の定型を定むるやうに容易に出来るものではない。身體ならば直接にその寸尺を測り、又その重量を知ることが出来る。その比率プロポーションをも定むることも出来る。器官をも一々測定することも出来る。身體の温度も驗温器にてこれを測ることが出来る。血球の數も測量することが出来、又小便の比重もこれを知ることが出来る。その他、いづれの部分も多くは皆、直接にこれを檢測することが出来るのであるから、それ等の成績を概括して尋常の定型を定むることが出来る。身體の方面でも尋常と異常との判斷を區別することが困難であるといふことは前にも言つた通りであるが、精神の方面にありては、それが一層困難である。身體の方面ではこれを計測することが出来るから、それによりて概括的に定型を定むることは左ほど困難ではないが、精神の機能に至りては、身體の部分に於けるが如くにこれを計測することが容

易でない。今日の所ではただ僅に精神機能の根本をなすところの感覺につきて、客觀的に十分精確にこれを認知する方法があるのみで、その他の精神の機能は、觀念にしても、感情にしても、又衝動にしても、すべて空間的には展開せぬものであるから、これを客觀的に計測することの容易ならぬことはいふまでも無い。固よりそれが精神病者に於て見るが如くに著しき缺陷を呈して居る場合には特別の検査を施さなくとも、尋常の定型から離れて居るといふことは明瞭にこれを認むることも出来るが、しかしながら、感情が少しく變化して居る、抑鬱して居る、發揚して居る、刺戟性である、若しくは衝動的に興奮して居るといふやうな場合に、何を標準としてそれが定型を離れて居るか否かを定むべきであらうか。意思が薄弱である、想像が病的であるといふやうな場合でも、その判断は主觀的のもので、それは全く我々の感情によるのであるから、客觀的の標準を確定することは出来ない。極端に著しく現はれた場合にはこれを判断することは容易であり、又これを誤るやうなことは無いが、その中間に位する場合を判別することは常に困難であり、又殆ど不可能であると言つてよろしい。

(八)

實驗心理學の方法○智力の方面○感情及び意思の方面○一個人としての精神機能の検査○人格の變異

近時、實驗心理學の方法が大に進歩したるによりて、一部は諸種の複雑なる装置の力を借りて觀念聯合の状態、注意、記憶の範圍、思考の諸種の定型などにつきて實驗的研究が行はれ、我々は我々の精神機能に就て、多數の新しき知識を得たのである。しかしながら、それは主に智力の方面に關する事項のみで、感情と意思との方面につきては研究せられたる點が極めて少ない。智力の方面につきても單一の精神現象が個々に検査せられたので、それを纏めたる一個人としての精神状態の検査が遂げられたのではない。それに一個の人として、その核心を成すものは性格(Character)であり、性格の基本を成すものは感情と意思とであるが、それは前にも言ふ通りによりに十分に検査せられて居ない。それ故に、今日の状態で、一個の人の精神状態を見て、それが尋常であるか、將た又異常であるかを區別するには健康のもの、疑もなく精神病に悩めるもの、とを比較するより外は無い。既に精神病と名づけらるべき状態にありては、その精神の状态が尋常の定型を去ることが甚しきことはいふまでもないが、精神病と名づくべきほどに至らざる異常の場合にありてもその變化はそれと同一の基本を存するものであるから、精神病のものにつきての研究は直ちにこれを異常のすべての場合に移して考ふる事が出来る。實際的の見地よりすれば異常の精神のものは健康と病

者との中間にありて、半精神病者と見ても差支ないものである。この意味よりして言へば、異常兒童と名づくるものは、その人格 (Personlichkeit) が變異を示せるもので、異常の精神生活にありては、その精神機能は調和して、その高さよ深さが平衡を保つものであるが、異常のものにありてはこの調和が保たれずして、精神機能の平衡性が缺けて居るのである。

(九)

精神機能の調和○調和障礙○各種精神機能の均勢○腦髓の健全

しかしながら精神の機能が調和して居るといふことも、調和を失ふて居るといふことも、全く隨意的のもので、今日の我々の知識では、理性と感情と意思との關係を數字的に表示することは不可能のことである。これを實際上の見地よりして、たとへば理性及び性格の圓滿なることはこれを精神機能の調和せるものとし、衝動及び意思生活の不羈束なることなどは調和障礙のものとすも、此の如き、調和の異常はこれを細かに見れば何れの人にも存在するものである。それ故に、精神の機能の調和が缺けて居ると言つても、それが程度の問題であつて、その間に劃然たる標準を立つことは出来ぬのである。此の如くに論じ來たれば、精神の異常と尋常とを區別することは容易でないこと

は明かであるが、しかしながら、實際的に言へば、精神機能の健全なる場合には、その各種の機能の間に一定の均勢があるもので、その均勢が缺けて居るとその人の精神の狀態が尋常の定型より甚しく離れるものである。更に他の方面よりして精神の健康と疾病とを區別するには精神作用が腦髓と結合して居るといふことに著目すべきである。そこですべての器官はその目的に適應するときに尋常の機能をあらはすものであるが、腦髓の機能は身體をして外界に適應せしむるにあるから、人が世界にありて孤獨にあらざる限り、人と世界とは相接して、或るものはこれを攝取し、或るものはこれを排除するのが眞正の人生の任務である。それ故に此の如き働きをなし得るものは腦髓が尋常であるものとすべきである。これに反して此の如き能力のなきものはこれを腦髓の疾病であると言ふことが出来る。ここに論述するところの異常兒童はこの意味に於て、腦髓の尋常ならざるものを指すのである。

原因

(一)

内部の原因○外部の原因○内部の原因○外部の原因○何れが重きか○精神の形式は素質に基づき、その内容は外界の影響に由りて成る

異常兒童が発生するところの原因には、他の身體の疾病に於けると同じく、二様がある。その一は内部の原因で、その一は外部の原因である。この内部の原因と、外部の原因と、その何れが重大であるかといふことは個個の場合にありて評價することは困難であるが、しかしながら概して言ふに、内部の原因の方が重要なものである。内部の原因が素地となりて、その地面に不良の種子が生長するのである。内部の原因といふのは先天性の素質であるが、この先天性の素質は遺傳によりて両親又は祖先より傳はるものと、胎内にあるときに獲得するものである。全體、人といふものは先天

性の素質と、その上に作用するところの影響との産物で、その精神の内容は外界の影響によりて成立するものであり、その形式は素質そのものに基づくものである。そうしてこの素質は、身體にありても、又精神にありても、各人に於て同等でないから、外界の事情は同一であつてもその人格は互に同一でない。同一の両親から生れ出たところの多數の兒童によりて見らるるが如くに、同一の外界にありて同一の教育を受けながらも、なほこの個性にはそれぞれ差異がある。他の兄弟と同一の家庭にありて、外界より受るところの影響は同一であつても、多數の兄弟の中の一人にのみ限りて精神の異常のものを認むることが常である。

(二)

先天性の素質○素質は外界の影響よりも重大○遺傳○胎内獲得

先天性の素質といふものの本態は如何なるものであるか、いまだこれを明かにすることが出来ぬ。しかしながら解剖學的に、身體の構造に何等かの異常があるといふことと、又生理學的及び心理學的に、刺激に對する反應の種類に異常があるためであるといふこととは疑がない。初生兒の精神にはいまだ内容が無いが、その形式は既に定まつて居る。外界よりの影響は既に定まつて居ること

ろの構成の上はその作用を及ぼすものである。それ故に先天性の素質といふものは外界の影響よりも重要なものであるが、それは遺傳によるものには限らずして、胎内にありて獲得するものもある。先天性といふのはこの世に生れ出たときに持つて居つたといふ意味であるから、祖先殊に両親の性質を遺傳したのみを指して言ふのではない。しかしながら、先天性の素質といへば大部分、遺傳性のものをいふので、遺傳といふのは男性の胚細胞(精蟲細胞)と女性の胚細胞(卵細胞)との合體によりてあらはれるもので、受胎の直後に遺傳性の素質は成立するものである。そうしてこの遺傳につきは父は母と同様の責務を有するもので、決して父母の一方が重要な關係を有するものではない。これに反して胚細胞には何等の障礙なくして受胎したる後、それが子宮内にて發育する間に何等かの障礙を受けて、産れたるときに異常を呈するとき、これを先天性といふのであるが、これは固より遺傳ではない。例を擧げて言へば、父母が酒を飲みたるがためにその胚細胞(精蟲、卵)が侵されたる時受胎すればそれがために眞性の遺傳をあらはすものであるが、これに反して受胎したる後に、その母が酒を飲みてその毒にありたる時、胎内の兒もその害を受けてこの世に産れる。それを先天性の障礙といふのである。遺傳と同じく、障礙を有してこの世に産れ出るのであるが、しかしながらそれは決して両親又は祖先の性質を遺傳したものであるのではない。受胎して新しい個性が

來てから後に、外界の影響を受けたるによりて起つた障礙である。

(III)

遺傳性の障礙○素因○勢力の遺傳○障礙其物を直接に遺傳するにあらず

たごへば色盲とか、血友病(些細の創傷から劇甚の出血を起す傾向ある疾病)とか、又は遺傳性の畸形とかといふやうな遺傳性の障礙は娩産の直後に既に現はれるか、若しくは幼若の時にその症状を呈するものであるが、それが潜伏して外面に顯はれず、後に至りて何等かの機會によりて障礙を現はすに至るものを素因(Disposition)と名づける。これはつまりその形式を遺傳するのではなくして、勢力を遺傳するものである。たごへば父母が精神病に罹りて死亡したとしてもその兒が必ず父母と同一の精神病に罹るものではないが、父母が精神病に罹りたる兒は健康の父母を有する兒に比較して數倍ほど精神異常を起し易いものである(チーム氏は凡そ八倍ほど多いと言つて居る)。これ父母の精神病に罹りたるものはその兒に對して精神異常を起すべき素因を與ふるためである。定期性精神病や早發癡病などのやうに同一の形式のものを父母よりその兒に遺傳するものもあるが、多數の場合にありてはその勢力を遺傳するものである。すなはち障礙そのものを遺傳するのではなくて、そ

の障礙に罹り易き素因を遺傳するものである。病的性格の如きは兩親よりしてその兒に遺傳せられることが多いが、しかしながらそれが精神障礙に罹り易き素因としてあらはれることもある。飲酒家の兒はしばしば精神薄弱、癲癇、又は精神低格を呈するものであるが、精神低格のものにありては外界の事情によりて容易に飲酒の惡癖に陥るものである。これも酒癖そのものを直接に親より兒に遺傳するものではなく、酒癖に陥り易い素因をその兒に遺傳するものである。これと同様に親が犯罪者であつてもその兒に犯罪其物が遺傳するのではなく、ただ精神劣等 (Inferiority) の素因をその兒に遺傳し、倫理的感覺が缺乏するがために動もすれば犯罪的行爲をなすに至るのである。

(四)

變質又は變性○精神の定型が尋常を離れる○變質性精神病

素因に併びて變質又は變性 (Degeneration) といふものがある。されば身體及び精神の定型の尋常より離れたるものが遺傳によりて現はれるものを指すもので、早く言へば、性質が悪變したものである。固より疾病とすべきものではなく、せいせい罹病性の増加したるまでのものである。これは尋常のものに比して容易に内外の刺戟に反應し、その身體及び精神の機能が動もすれば病的の傾向に

陥り易いのである。言葉を換て言へば、身體的にも、又精神的にも、價値の尠ないのである。その根本はといへば、個性の遺傳の素因に外ならぬものであるが、兩親に何等かの障礙がありても、その兒には始め障礙を現はさず、後に至りて障礙があらはれるときには既に前にも言つた通り、これを素因の遺傳と名づける。すなはち潜伏的の遺傳と稱すべきものである。これに反して、兩親に何等かの障礙がありたるとき、この兒が始より尋常でなく、身體的及び精神的に低格なるものを變質又は變性といふのである。それ故に、異常兒童の大多數のものはこの變質の部類に屬するものであると言つて差支ない。變質といふものは此の如くに身體及び精神の機能が尋常の定型から離れたものであるから、それには精神病の一定のものも屬する。精神の發育の制止によりて起るころの先天性精神薄弱(すなはち白癡、癡愚、魯鈍)の如きも、精確に言へばこの變質性精神病に屬するものであるが、普通に變質性精神病と稱せらるるものは躁鬱病(定期的及び周期的精神病)、偏執病、早發癡病等の諸症である。變質性精神病と名づけらるるものは外的原因(中毒、感染又は腦髓の破壊等)によりて起るものでなく、個性の内的の精神的素因に基づきてあらはれるころの精神異常であるから、ここに變質又は變性と名づけらるるところのもの程度の劇甚なるものとして見るべきである。

(五)

胚細胞の障碍○胚細胞を侵す毒物○「アルコール」○ホッヂ、コムブムル、ライイチチン、デムメ、ベル
トレット、ブンゲ等諸氏の所説○酒癖ミ精神異常性

異常兒童の原因として重要なものは此の如く遺傳性の素質であるが、その本能は現今の所にては固より我々の知識の及ぶところではない。しかしながらそれが胚細胞の障碍に基づくものであるといふことは疑を容れぬところである。そうして目下のところ、確實に胚細胞を侵すところの毒物として明かなるものは第一に「アルコール」である。これに關しては實驗的の證明が多數に存在する。その二三のものを擧ぐれば次の通りである。

(一)ホッヂ、コムブムル、及びライイチチン諸氏が動物につき研究したるところに據れば、人爲的に「アルコール」を與へたる動物の兒には多數の畸形のもの又は生活力微弱のものを生ずる(水頭、佝僂病、死産等)

(二)近時ライイチチン氏が六百乃至七百頭の動物に就て研究せる所に據れば、動物の體重一「キログラム」に對して毎日〇・一立方仙迷の割合にて「アルコール」を與ふるときは(この量は大人に

ありて凡そ半盃の葡萄酒に一致する)血液の血球溶崩作用を減じ、傳染病に對する抵抗力を弱くし又その兒の發育と生活力を妨ぐるものである。

(三)ベルンのデムメ氏は小兒の多數を有する家族の十個につきて検査せるが、それは飲酒家にて小兒の數は五十七名を算した。その中十二名は生活力薄弱のために産後直ちに死亡し、残のものの中に八名は白癡、十三名は癲癇及び癩癩、二名は豊啞、五名は舞蹈病又は癩癩と酒癖とを兼ね、三名は身體の畸形、五名は侏儒で、精神及び身體の尋常なりしものは僅に九名であつた。これに反して飲酒せざる家庭の十個にて六十一名の小兒を産生せしに、その内産後直ちに死亡したるは生活力薄弱一名、胃腸加答兒二名で總計三名であつた。その残りのもの内で、二名は舞蹈病、二名は身體畸形を有し、二名は精神薄弱であつた(白癡ではなかつた)が、その他の五十名は皆健全であつた。

(四)ベルトレット氏は一千九百九年、三十九名の飲酒家の屍を解き視て、辜丸の實質が萎縮せることを認めた。辜丸の萎縮が起る前に精蟲細胞が病的となる(肪脂變性等)ことは無論である。近時ベルトレット氏は飲酒婦人の卵巢及び卵細胞が萎縮に陥ることを認めた。このことはウイーンのワイクセルバウム氏も同様に證明した。

(五) パーゼルのブンゲ氏は女子の搾乳能力が漸次に減却するはその両親又は祖先の飲酒の影響であるといふことを統計的に證明した。

(六) 解剖の結果、「アルコホール」が身體組織に對して變性的作用を致すことが認められる。又臨牀上經驗によりて「アルコホール」の變性的作用は明かに證明せられる。

その他、ブルヌウイル、シュワイグホーフ、チーグレル、フニーチル、マハイム等諸氏の實驗的報告がありて、「アルコホール」が胚細胞を侵すによりて、遺傳性の素質を起すものであるといふことは十分に證明せられた。しかしながら、酒癖に陥りたるものは、既に精神異常性のものであるといふことを忘却してはならぬ。精神異常性のものであるがために容易に酒癖に陥り易いのが常であるから、飲酒家の兒に異常のものがあるとき、それが「アルコホール」のためであるといふよりも精神異常のためであるとする方が正しい場合もある。それ故に、「アルコホール」の問題につきましてはこのことを常に考慮の中に置かねばならぬ。

(六)

微毒○淋疾○軟性下疳○「モルヒチ」中毒○鉛中毒○結核○貧血○糖尿病○痛風○神經病

「アルコホール」に並びて擧ぐべきものは微毒、淋疾及び軟性下疳（これを花柳病又は性病と總稱する）である。以前先天性微毒が精神薄弱の原因を成すといふことにつきて推察して居つたが、近時に至りてワッセルマン氏血清反應の發明があつたために、外部に現はれざる微毒をも確實に（固より絶對的のものではないが）診定することが出来たのでこの法を精神薄弱、精神異常及び神經性の兒童の多數のものに試みて、そのものに先天性の微毒が存することの稀有でないといふことが證明せられた。しかしながら微毒の毒素が直接に胚細胞を侵すものであるか否かといふことにつきては諸家の意見がまだ一致して居ない。微毒の毒素が直接に胚細胞を侵すことはなく、却て胎兒が母の血液によりて微毒を感染する場合もあるやうに思はれる。實際にありて微毒に罹りたる夫は、その微毒を妻に傳染し、妻はこれをその兒に傳染するものである。規則として新に微毒に罹りたるもの結婚にありては先づ流産又は死産を起し、それより毒作用の漸次に減却するによりて生活力を有して、しかも變性したる兒を産生するものである。淋疾及び軟性下疳も亦微毒と同様の關係を有するものである。「アルコホール」及び微毒の他に、「モルヒチ」、鉛等の中毒も同じく胚細胞を侵すものである。その他、結核、貧血、糖尿病、痛風、神經病等にありても胚細胞が病的に變化して居つて、それから新しき個性が造られるのであるから、異常兒童の原因がこれ等の障礙に基づくことが

あるのも當然である。

(七)

胎内獲得の素質○妊娠中の障碍○胎兒の發育の障碍○分娩時の障碍

胎兒が子宮内にあるときに獲得するところの素質は固より遺傳に屬すべきものではない。遺傳の要素をなすところの胚細胞には異常なくして、健全に受胎して、それが子宮内によりて發育する間に、種種の障碍を受けるによりてその素質に變化を呈する。前にも言つた通り、胚細胞には何等の異常が無くても、受胎したる後に母が酒を飲みてその毒に中りたるときは胎兒はこの影響によりてその素質が不良のものとなる。これは獨り飲酒のみではなく、妊娠中に於ける母の榮養、過劇の勞働、諸種の不攝生、精神の感動等種種の事項によりて胎兒の發育は障碍を受くるもので、發育の障碍が素質の變化となりて現はるるものである。母の胎内にあるときに、外來の激動によりて胎兒の頭蓋が打撃を受けて、それがためにその中にあるところの腦髓が障碍を蒙るであらうとは多くの人人の想像するところであるが、實際にありて胎兒は母の子宮内にありて、よく保護せられて居るものであるから、少しばかりの外來の激動によりてその腦髓が障碍を受るほどの傷害はないものであ

る。兒の頭蓋が侵されるのは多數の場合、それが産道を通過するときで、たとへば産道の狭いとき、又はその頭の位置の尋常でないときに嵌子を用ひて人爲的に分娩せしめねばならぬによりて、器械のために頭蓋が侵されるのである。さうでなくとも産道を通ほる時間が長いとか、若しくはその間に壓迫を受るとかといふやうな原因に基づくのである。それ故に、精密にいへば此の如き原因は外部のもので、これを内部の原因に屬せしむべきものではない。

(八)

外部の原因○環境の作用○父母が生れたる場所○父母の年齢○父母の職業○父母の犯罪性○父母の酒癖

○家庭の狀況○私生兒○孤兒○榮養の狀況○教育

外部の原因といふのは、男女の胚細胞が結合して、受胎したる後に、外部から受るところの諸種の影響を指していふのである。すなはち環境 (Milieu) の作用を綜括してこれを外部の原因とするのであるから、胎兒が子宮にありて受るところの影響の中にも同じく外部の原因の中に屬すべきものが多し。環境といふ言葉も漠然と用ひられる場合があるが、ここでは先天性の素質 (内部の原因) によらずして、外方から人體の上に入り來たるところのすべての感作 (影響) を指して環境といふのである。

その重要なものを挙げれば次の通りである。

- (一) 父母が生れたる場所——父母が流浪することはその兒の身體及び精神の上に不良の影響を致すことが多い。
- (二) 兒が生れたるときの父母の年齢——これも兒の身體及び精神の上に關係することが多い。
- (三) 父母が私生兒であるか否か。
- (四) 父母の職業。
- (五) 父母の犯罪性。
- (六) 父母の酒癖——酒の中毒のために胚細胞が侵されたるときには素質を不良にすること、又受胎した後の好の飲酒が同じく先天性に、素質を不良にすることは既に上章に説いた通りであるが、兒が産まれたる後に始まりたる父母の酒癖も兒の上に不良の影響を及ぼすものである。
- (七) 家庭の貧富。社會的地位の上下。
- (八) 家庭の兒の数の多少。
- (九) 私生兒。
- (一〇) 孤兒。

(一一) 榮養の不良。發育の障礙。出産後に起りたる疾病。

(一二) 教育の不相當。

(一三) 監督の不行届。

内部の原因を有するものがこれ等、外部の原因に遇ふときは、ここに精神の異常をあらはすに至るものである。世の中にはただこの外部の原因のみに重きを置いて、環境の如何をのみ彼此論議するものもあるが、内部の原因(素因)が無い場合に、そのものは容易に異常の精神状態をあらはすことは無い。

(九)

素質の輕重○環境作用の不同○グルーレ氏の研究○遺傳が重いか、環境が重いか

此の如くに異常兒童の原因には内部のもの、外部のものとの二類あつて、内部のものは素質、外部のものは環境である。そうして素質の多數は遺傳によるもので、それには固より輕重の差異がある。環境の作用にもまた劇易の不同がある。素質が重くして、そうしてこれに影響するところの環境が劇しい場合には精神の障礙は著しく現はれる。これに反して素質が軽く、環境の作用もまた劇しくないときには精神の障礙も亦軽く現はれるものである。いづれにしても素質と環境とは相待ちて

異常兒童をあらはすもので、單獨に素質にのみよることはなく、又單獨に環境にのみよることも尠ない。グルーレ氏は少年犯罪者の原因を論ずるに方りて「所謂不良少年の原因が素因に存するか、環境に存するかといふことを判定するには、各個の場合につき、精細に該少年の性格とこの環境とを調査せねばならぬ。しかるに従來の調査はこの點につき、事實の認定と、この原因的評價との區別が判然として居ない。たとへていへば、百人中五十人の割合にて父親が飲酒家であつたから、父親の飲酒は五〇%に於て、この兒の不良の原因としたといふやうなことは大なる誤である」と言つて居るが、いかにもグルーレ氏がいふやうに、父が飲酒家であつたといふ事實は確實であつても、その兒が出生したる後間もなく死亡したりせば、父親の飲酒の環境的作用は消えたるものである。又父親が飲酒し始めたのがこの兒が既に生長したる後のことでありとすれば、父親の飲酒が遺傳的作用をあらはすことのないといふことも明なることであるから、單に父親が飲酒したといふ記録的調査によりてその飲酒が遺傳的又は環境的作用をその兒に及ぼしたといふことは出来ない。又所謂不良少年の原因を説く人の中には遺傳が重いか、環境が重いかといふことを八釜敷論する人もあるが、前既に述べたところによりて考ふるときは、この一方に偏して輕卒にこれを断定すべきものでないといふことは疑を容れぬところである。

身體徵候

(一)

胚細胞の變性による變常○變性徵候○胚細胞の發育制止とは關係なき變常

異常兒童の身體を檢查するときは、その胚細胞の素質の不良なるがためにあらはれるところの發育の障礙と直接に關係があるところの變常が認められる。これは遺傳したる胚細胞の變性によりて解剖學的の變常をあらはしたるもので、變性徵候(Degenerationszeichen)と名づけられるものである。しかしながら、この變性徵候といふものは異常兒童を診斷するに方りて或論者がいふが如くに極めて重要なものではない。たとひ二三の變性徵候が身體にあればとてその精神が必ず變性して居るといはれない。しかしながら又、或論者がいふやうに變性徵候に何等の意義がないとは言はれない。眞理は必ず兩極端の中間に存するものである。それ故に、身體に變性徵候の多數が認められたる場合に、

はこの精神にも必ず變性があるを推定することが出来る。變性徴候とは異なりて胚細胞の發育の制止とは直接の關係を有することなく、偶然にあらはれるこの身體の徴候も亦尠なくない。たゞへば腺病、佝僂病、眼炎、中耳加答兒等の如きものがそれである。しかしながらこれ等の變化は、有害作用の侵し來たことに都合よきものであるから、異常兒童の發生には間接の關係がある。それ故に異常兒童の身體には此の如き偶然的の變性が認められることが尠なく無いが、それを以てこの異常兒童が不良なる社會的狀態のためにはあらはれたるものと簡單に説明することは出来ぬ。

(二)

身體的の變性徴候○一定の器官の形態が常型を離れたるもの○一定の筋肉の機能が異常を呈せるもの○諸種の器官の障礙をあらはすもの

變性徴候と名づけられるところの身體の變常には身體的のものど、精神的のものとの二類がある。この身體的の變性徴候にも亦、一定の器官の形態が常型を離れたるものど、一定の筋肉の機能が異常を呈せるものど、諸種の器官の機能の障礙を起せるものとの三種が區別せられる。この三種の身體的變性徴候に屬するものを挙げれば大略次の通である。

第一種的身體的變性徴候に屬するもの。

頭部。大顛。小顛。鞍狀長頭(前頭骨及び顛頂骨の骨質聯接が早きに過るために頭蓋上部が横に低下せるもの)。塔頭。尖頭。歪頭。後頭骨部扁平。兩側頭蓋不平等。前額突出。顔面。顔面左右不平等。上眼窩突起發育著甚。下顎突出。口蓋穹窿高上。狼咽。兔唇。懸雍垂分裂。顔面部が頭蓋部に比して著しく大なること。



「ツエルコビテクス」型耳



「マカクス」型耳

眼。虹彩色異常。色素缺如。虹彩縫裂。瞳孔卵圓形。瞳孔位置異常。色素性網膜炎。齒牙。齒列不整。齒列間隙。乳齒の永存。犬齒或は第二門齒の缺如。贅齒。露齒。耳。小耳。大耳。耳廓の離立(耳柄)。耳輪缺如。耳垂缺如。「マカクス」型耳。「マカクス」猿の耳に似て廣く平なる耳。「セルコビテクス」型耳。「セルコビテクス」猿の耳に似て耳輪の上邊が尖れる耳。モーレル氏型耳(耳廓の發育異常で、疊目なく、滑



歐洲人の耳にして
ダルクワイ
ン氏結節
を有せざ
るもの



歐洲人の耳にして
ダルクワイ
ン氏結節
を有するもの



ウイデル
ルムト
氏型耳

又は内方に向ひて突出するもの、即ちダルクワイン氏棘。
鼻。歪斜。低凹。鼻根の陥没。
胸。漏斗狀胸。第十肋骨遊離。

で高く盛り上がり。縁が薄い耳。ウイデル
ルト氏型耳（對耳輪が突起して、耳朶が附生せ
るもの）。ダルクワイン氏型耳（耳輪が横輪から下
行輪に移る部に於て、その縁に、小棘が後外方

脊椎。椎骨の数の異常。生來彎曲。脊椎破裂。

手及び足。二指趾過剰。小指彎曲。蹠膜形成。扁平足。鉤足。

皮膚。母斑。兩側眉毛連接。男子にして鬚髯なきもの。女子にして鬚髯あるもの。早期禿頭。頭

旋毛多數。早期白髮。毛髮贅生。乳房過剰。

生殖器。男子にありて陰莖小。辜丸潛伏。尿道上破裂又は下破裂。龜頭過大。女子にありて小兒

性子宮。重複子宮。重複腔。鎖腔及び半陰陽。

内臓。心臟の位置異常。先天性瓣膜障礙。卵圓孔閉鎖不全。肺臟。肝臟。腎臟の異常。血管の位

置の異常等。

全身。巨人。侏儒。男子にして女子の體格を有するもの。女子にして男子の體格を有するもの。

身體比率不正。

第二種の身體的變性徵候に屬するものは顔面筋の機能の左右不均等。左利。斜視。吶吃。詢語。膝

蓋腱反射の缺乏等である。

第三種の身體的變性徵候に屬するものの心悸の傾向。皮膚潮紅及び發汗し易きこと。偏頭痛。眩暈
を起し易きこと。重劇の感動によりて又は發熱によりて痙攣又は譫妄を起すこと。遺尿。近視。遠

視。性慾の發呈の遅れること。性慾の倒錯、外部の抵抗に對する力の弱きこと。

此の如き身體的變性徵候が、同一の人に多數に存在したる場合には、その人は精神的にも亦變性して居るといふことを推察することが出来る。

(III)

精神的の變性徵候○個々の精神機能の平衡障礙○觀念聯合作用異常○想像亢進○怔忡狀態○性慾異常○

痛覺過敏○感情異常○意思薄弱○精神不安定者

精神の變性徵候といふのは腦髓の作用が異常であるといふことを直接に表示するもので、それが甚しくなればすなはち精神病に移り行くものである。そうして、これは兒童期に早く既にあらはれて、その將來を豫測することの出来るものであるから、精神的變性徵候は身體的變性徵候よりも重要なものであるといはねばならぬ。ここにいふところの異常兒童は畢竟するに、精神の變性に基づくものであるから、この徵候とすべきものは、まことに千差萬別で、簡單にこれを擧ぐることは困難であるが、これを要するに、精神的變性徵候として第一に擧ぐべきものは精神機能の個々の發育が平衡を缺いて居るといふことである。觀念の聯合作用が常規を逸して居るために思考することを嫌

ひ、何事かを考へやうとしてもそれが出来ぬことが多い。同年輩のものが普通に有すべき興味をすこしもあらはさないことがある。想像は過度にあらはれて所謂想像的虚構 (Pseudologia phantastica) をなすまでに至り、怔忡狀態に併せて異常に多く夢みることがあり、甚しきは夜驚 (Pavor nocturnus) を起すに至る。性慾は甚だ早くあらはれて幼年よりして手淫の惡癖に陥り、後には色荒 (性交過度) 又は性慾の倒錯、又は性慾消失に至ることがある。感情の發現は常規を逸することが甚しく、時としては何等の動機なくして苦悶し又は憤怒することがある。大體に痛覺過敏にして些少の負傷をも生命に有害を及ぼすべき大事件の如くに感じ。又何事が快感を起すべきことあるときは全く冷靜なることが出来ず、苦痛と快感とに對して仰山なるを常とする。そうしてその感情の發現する状態は幼兒に於けるが如く、その不快の感情は主として單一の事情に關係するもので、そのあらはれ方は衝動的で、その性質は感覺的である。そうして動機の形成が異常を呈して居るために複合的の意思の作用が甚しく變常を呈し、感情の極端から極端に動搖するに伴ふて、動機も種種に轉變して、前の瞬間には非常に願望したことも、次の瞬間にはこれを嫌忌するやうになる。意思は著しく薄弱にして、性格も十分には發達することがなく、クレペリン氏が説くやうに精神不安定者 (Hallosen) の稱呼を與へねばならぬのが常である。又しばしば強迫觀念をもあらはすことがある。

(四)

胎内にて起る身體の異常○生後獲得の身體的變化○身體全部にあらはる異常○頭蓋○小頭○大頭○水頭
○頭蓋の形状

異常兒童の身體的徴候としては此の如く變性に基づきてあらはれるものの外に、遺傳にあらすして、胎兒が子宮内に居る間に受ける影響のために身體に異常をあらはすものと、生れてから後に獲得するところの身體的變化とがある。それ故に、ここに、その變性的のものであると、獲得性のものであるとを問はず、異常兒童の身體的徴候とも認めらるるものを列擧する。

身體全部につきて見るに精神薄弱のもの、身體は尋常のもの、身體に比して小さく且つ薄弱である。シヨルツ、グレゴル兩氏の説に據ると、生後第一年にありては尋常兒童と、精神薄弱兒童との身長には格別の相違はないが、後になると兩者の間に差異があらはれる。これは畢竟精神薄弱者の發育力が尠ないといふことを證明するものである。既に成長したる後に至ると、精神薄弱者の身長は尋常者に比して左ほど劣りては居らぬ。これは身長の發達のよくない精神薄弱者は早く死亡して、發達のよいものが後に残るためである。精神薄弱者にありては發育力が弱ひのみでなく、生活力も

尋常者に比して著しく弱く、歩行し始むることも、談話し始むることも、齒牙の發生することも、生殖器の成熟することもすべて尋常者に後れ、いつまでも身體は兒童の形式を保ち、これに反して老衰の現象があらはれることは尋常者よりも早い。フォーグト氏の説に據ると、白癡のもの、内臓の重量は尋常のものに比して遙かに軽いといふことである。

頭蓋の内には腦髓があり、腦髓が精神作用の器官であるといふ點から、異常兒童の頭蓋につきては諸家の調査がある。しかしながら頭蓋の大きさは直ちにこの内にある腦髓の大きさを示すものではない。周圍を測りて同じ大きさでありてもこの内にある腦髓の大きさには百「グラム」位の相違を見ることは常である。ただ身長に比例して著しく小さい頭蓋は腦髓の發育の障碍(小頭 Mikrocephalie)に基づくものである。頭蓋が發育せざるために腦髓が發育せざるのではなく、腦髓が發育せざるために頭蓋が發達せざるのである。それ故に頭蓋の周圍が四十八仙迷以下の小頭のものには精神薄弱である。これに反して過大の頭蓋(大頭 Makrocephalie)は佝僂病のために起るか、又は腦水腫に罹りたる結果としてあらはれるものである(水頭 Hydrocephalie)。腦水腫がありてもそれによりて腦髓の實質が損害せられざる場合にはそのものの智力には異常をあらはすことがない。メンツェル、ヘルムホルツ等の大家の頭蓋はこの水頭であつた。しかしながら水腫が甚しくしてそれがために腦髓の實質が侵さ

れたるときには著しく精神の發達を害するものである。頭蓋の形狀につきては變性徴候の項下に記載せる如くに、種種のものが異常兒童の頭蓋に認められる。

(五)

運動障礙○痙攣○搐搦○麻痺○「チック」○共同運動○舞蹈病

運動障礙は精神薄弱者にありて多く見らるるところのものである。精神薄弱者にありて見らるる運動障礙は痙攣、搐搦及び麻痺であるが、これは一部は解剖的障礙により、一部は腦髓及び脊髓の異常により、一部は精神作用による。精神低格のものにありても神経質及び「ヒステリー」、等の場合には運動障礙を起すことが多い。

兒童が目的のない運動を衝動的に發呈することがある。これを「チック」(Tics)と名づける。この運動は常に自動的に且つ律動的にあらはれるもので、たゞへば兒童がその身體を轉じ、股關節を曲げ、點頭し、手を拍ち、顔を歪め、鼻を動かして嗅ぎ、目を瞬き、肩を聳かし、から咳をなし、爪を噛むなど、何等目的のない運動を衝動的にする。この「チック」いふものは固より元來が疾病ではない。通常の兒童にありても學齡期以前のもの殊に生後第一年のものにはしばしばこれを見るものである。健康の兒童でもせかせかする、頭を振る、空談をするやう

なことは常であるが、それが精神の發達につれて漸次に制止せられて、此の如き自動作用は漸次に止むに至るのである。しかるに精神薄弱の兒童にありては精神の發達が十分でないために、その自動作用が長くあらはれて居るのである。後には又、他の方法によりて「チック」があらはれることがある、たゞへば眼に塵片が這入るまきに目を瞬くまき、その塵片が無くなつても矢張り目を瞬く。或は又、たゞへば上衣の具合が悪るいまきに肩を揺かす、最早上衣の具合はよくなりても矢張肩を揺かすことは止まぬ。同じ運動を繰返すまきにそれが習慣となりて不随意にそれが起り易くなるものである。

「チック」が永く續きて存するまきは反射の性質を帶び、意思によらず、又本人はこれを知らずして容易に現はれる。

生後第一年の後に、この「チック」が尙ほ現はれるまきは不良の習癖である。固より疾病に屬するものではないが、これから疾病の「チック」に移行するものがある。

共同運動 (Mitbewegungen) も亦「チック」に類似せるもので、同じく目的のない運動が不随意的にあらはれるものである。これも亦固より疾病に屬するものではない。たゞへば劇しい力を要するまき顔面を歪め、活潑に談話をするまきに手眞似をするが如きは共同運動である。若し四肢を制御する力が弱きまきはこの共同運動はますます強くあらはれる。それ故にこの共同運動は精神薄弱のものに著しくあらはれる。白癡のものにありては讀方書方及び談話をするまきに殆ど全身を動かすを見るのは常である。啞吃のものが興奮したまきに共同運動をなす

この多いのは誰しも注目するところであらう。
舞蹈病と名づけられるものは運動障礙をあらはすところの疾病で、不隨意的の筋肉運動があらはれるものである。若し短時の間持續して、秩序の無い運動があらはれて、意思の力にてはこれを制止することが出来ない場合、殊に遊戯の折にも尙ほこの運動が止むことの無い場合にはこれを舞蹈病の初期と疑ふべきである。

(六)

遺尿○遺尿の原因○腺病○佝僂病○腺病○鼻咽腔腺發生

生後第八月又は第九月の兒童は晝間は不隨意的に尿を洩すことなく、一年半の兒童にありては夜間にありても不隨意的に尿を洩すことは無いのが常である。しかるに生後第二年の終り、又は齒牙の發生を了りたる後にも尙ほ不隨意的尿を洩すものはこれを遺尿と名づける。その原因は腦髓の中樞にありて膀胱の收縮を自動的に主宰するところの機能が一時的に遏止するためである。若し遺尿が膀胱の機能の神經性衰弱によるものであるとすれば晝間でも夜間と同様に遺尿を起すべきであるのに遺尿は大抵夜間で、殊に深夜熟睡したときに多いのが事實である。勿論、膀胱の疾病、尿の異

常、晩景に多量の飲料を攝取すること、溫度の變化、臥位等も遺尿の起ることに關係があるに相違ないが、しかしながらそれは重要な原因と認むべきものではない。苦悶、疼痛、快樂等の精神感作が尿の分泌の上に影響を及ぼすことはいふまでもなく、感情が夢の中に盛にあらはれてそれがために遺尿を起すこともある。

神經性、「ヒステリー」性及び薄弱性の兒童にありては遺尿を起すことが多い。癲癇のものにありても遺尿がその最初の徴候となりてあらはれることがある。精神薄弱のもの及び神經薄弱のものにありて、膀胱收閉筋の自動的機能を強くするための意思の教育が缺けて居ることが遺尿の原因をなすことが多い。

腺病及び佝僂病は異常兒童に多く現はるるものであるが、佝僂病にありては脊椎彎曲、大頭、方形頭、關節肥厚、肋骨肥厚、鳩胸、彎脚、鉤足、扁平足、身體矮小、發育遲徐等の徴候が認められる。しかしながら佝僂病が幾分まで身體の發育を制止したか、又幾分までが先天性の變性に基づくものであるかと判別することは決して容易でない。又佝僂病に罹りてもそれが早期に治癒したるときにはそれによりて起りたる障礙は速かに除去せられて僅かにその痕跡を認むべきことがある。腺病は結核に近いもので、淋巴腺腫脹、厚唇、眼の炎症、慢性の鼻感冒、皮膚潰瘍等をあらはして

居るので誰人にもわかる。

鼻咽腔に於ける淋巴腺様組織の増殖(腺殖生と名づける)があるときには精神の發達が障碍せられることが著しい。時としてはこの障碍あるものの顔貌が智力不足の状を示して居るので外面からこの精神薄弱であるといふことを知ることが出来る。鼻咽腔の腺殖生があると、鼻皺襞は無くなり、口は半ば開きて、容貌空虚の状をなし、睡眠中鼾聲を發し、前額頭痛を訴へる。

(七)

感覺器官の障碍○眼の異常○視力の缺乏○虹彩異常○網膜變化○角膜及び硝子體異常○斜視○眼球震戦
○色盲○耳の疾病○聴力缺乏

感覺器官の障碍が異常兒童に現はるることの多きは言ふまでもないことである。ゲルブケ氏の調査に據ると、精神薄弱のもので、健康の眼を有するものは僅に二七・五%である。勿論これは左ほど著明でないところの變化をも精密に検査した結果である。ベスト氏の調査に據れば、精神薄弱のもの約半數が健康の眼を有して居る割合である。殊に多きは視力の缺乏で、その中、近視眼よりも遠視眼の方が多い、これは精神薄弱者の眼が小兒期の状態を存して居ると見てよらしい(健康の新生

兒の眼は遠視眼である)。それから虹彩の異常、網膜の變化、角膜の異常(これがために亂視を起すに至る)、硝子體濁濁、斜視、眼球震戦等をあらはすことが多い。色盲も亦精神低格のものにあらはれることがある、しかしながら精神薄弱のものにありては健康のものに於けるよりも色盲のあらはれることが尠ない。

耳の疾病も亦眼の異常と同じく、先天性のことがあり、又腦の異常の結果としてあらはれることがある。又生れてから後に猩紅熱、實布埤里等の傳染病のためにこれを獲得することがある。六歳乃至七歳以前に聴力が無くなる場合には言語の發達が妨げられる。聴力がどの位減却して居るかといふことを精神薄弱のものに就て検査することは容易でない、それは精神薄弱のものにありては注意の作用が十分でなく、理解の力が足らず、意思のはたきも善くないから、十分に検査の方法を實行することが出来ないためである。しかしながら精神薄弱のものにありて聴力が尋常の兒童に比して概して劣つて居るといふことは確實である。

(八)

言語の障碍○言語の缺如○言語發育不十分○發音不明症○呐吃

言語は精神の内容を外方に顯出するためのもので、その機能は人體の中で最も複雑なるものの一つである。精神薄弱のものにありて先天性に言語の障礙を存する場合は甚だ多い。もとより言語の障礙は重聽に基づきて起ることがあり、又は發語器官の疾病若しくは畸形に因する場合もありて口蓋、齒牙の異常、鼻咽腔殖生等には言語の障礙があらはれるが、これは固より精神の異常と直接の關係のないものである。幼若の兒童が正しき言語を發することの出来ないのは器官聯合作用の十分でないため、智力の如何には關係せぬものである。

言語理解中樞及び言語形成中樞が侵されるときには言語は全部又は一部の缺如を致すものである。精神薄弱の甚しいものにありては全く言語を發することが出来ぬが、それは一部分は言語の能力が無いためであり、一部分は觀念及び概念の缺乏せるがために言語することを知らぬためである。精神薄弱の程度の稍々軽いものにありては言語の發育が十分でなく、小さい兒童の如くに、話すことが不明瞭で、律動的に無意味の單調の言葉を發し、又は聞いたことを器械的に話すことが多い。

精神薄弱の程度の軽いもの及び精神低格のものにありて、最も多くあらはれるのは發音不明症と啞吃とである。發音不明症といふのは發音の異常で、言葉を續けて話さうとすると、その中のある子音が出来ないで、他の容易に出来る子音を代用するのである。啞吃にありてはこれに反して發音

には異常が無いが、發聲筋の作用に障礙があるので、恐くはそれに痙攣が起るのであらう。たとへば發音不明症にありては「コップ」を「トッブ」といふのであるが、啞吃にありては「コココップ」といふのである。重劇の場合にありては顔面の筋肉に共同運動が起り、甚しきは全身に舞踏病様の痙攣運動があらはれる。啞吃が感情運動に關係することは著しいもので、恥づるとき、苦しむとき及び狼狽するときなどには啞吃は更に劇しく現はれるものである。

精神薄弱

總論

(一)

精神薄弱○先天性精神薄弱○獲得性精神薄弱○癡呆

精神薄弱とは精神の異常状態で、殊に精神作用の中にて智力の缺陷の著明なるものを指していふのである。而してここに智力 (Intelligenz) といふのは多數の精神作用を集めたるものに名づくるもので、すなはち注意、記憶、概念形成、再生作用、判断、聯合作用等の精神作用を集めてこれを智力と稱するのである。精神薄弱はこの智力の缺陷を呈せるものにして先天性に現はれることもあり、又獲得性に現はれることもある。先天性の精神薄弱は胎内にありて受るところの原因によりてあらはれ

たる精神薄弱である。實際上の點よりして生後間もなき時期にあらはれるところの精神薄弱をも先天性の精神薄弱の部類に算入する。これは言葉の上にては奇妙に聞えるが、しかしながら學術的にいふときは相當の根據がある、第一に生後間もなくあらはれるところの精神薄弱の原因となるべき腦髓の病的變化は胎内にありて起るところのものと略ぼ同一である。生後一ヶ月間に精神薄弱の症をあらはすときはその轉歸は胎内にあらはれたるものと全く同一である。それが娩産以前の腦疾患に由るにしても、娩産の時に受けたる障礙にしても、又生後間もなき時期に起りたる障礙にしてもその結果は同一である。

獲得性の精神薄弱は精神障礙が治癒せずして久時持續せる場合にその最後の期としてあらはれるものである。又所謂若年精神病、早發癡病、酒癖、癩癩、老人等にありてあらはれるものである。醫學上にはこれを癡呆 (Dementia) と名づけて先天性の精神薄弱と區別する。その他、感覺器官の異常(殊に聽力、視力の異常)及び鼻咽腔殖生等の病的障礙によりて精神薄弱を呈することがある。

嚴格の意味にていふときは精神薄弱は疾病では無くして、ただ一個の症狀である。たとへば咳嗽とか、熱とか、或は頭痛とかいふやうなもので、その根本に存するところの腦髓の病機即ち腦髓の發育の制止又は炎症、又はその他の病變が固有の疾病である。しかしながら精神薄弱をあらはすべき腦髓

の障碍の各種につき、いまだ十分にこれを明にすることが出来ぬから、單にこれを概括して先天性の精神薄弱とせねばならぬのである。それ故に、これを區別するに方りても、その外面的の現症（たとへば頭蓋の形狀等）によるか、又は精神薄弱の程度によるのが常である。

(11)

「クレチン」〇畸形性の精神薄弱〇甲状腺の變性〇「クレチン」の症狀〇粘液浮腫性精神薄弱〇「クレチン」の療法

古い時代にては精神薄弱のものをすべて「クレチン」(Krelin)と名づけて居つた。今日では「クレチン」といふ概念を限定して、畸形性の精神薄弱のみを指すことになつた。「クレチン」は甲状腺の變性に基づくもので、その内分泌が障碍を受けるによりて起るのである。

甲状腺は副腎、腦下垂體、松葉腺、胸腺と同じく、一定の物質(ホルモン)を分泌してこれを血液の中に送り込み(これを内分泌と名づける)、身體の物質代謝のために常に體中に形成せらるるミミこの毒素を無害とするの作用をなすものである。しかるにこの甲状腺の内分泌の作用が侵さるるときはすなはちその結果として「クレチン」を起すのである。

「クレチン」は稀有のものであるが、何れの國にありても所々に認められる。時としては「クレチン」が地方病性に一地方を限りて多數にあらはれることがある。これはその土地の關係によりて飲料水が甲状腺の變性を起すこと多きに基づくものであると説明せられて居る。我邦でも臺灣の一地方に「クレチン」が地方的にあらはれて居るところがある。しかしながら内地にても「クレチン」は稀に實驗せられた報告がある。

「クレチン」の症狀は生後二三ヶ月にして既にあらはれるのが常である。この標徴には三個の主要なるものがあるが、それは(一)侏儒、(二)皮膚腫脹、(三)精神薄弱である。「クレチン」のものは身體が矮小で圓味を帯び、不格好で、骨格は短くして肥厚し、身長は著しく小である。皮膚は肥厚して乾燥し、冷却して帶褐色を呈する。斯様の變化を呈せるものを粘液浮腫(Myxödem)と稱する。指と趾と、手と足とは無骨で、下腹は膨隆し、舌は口よりはみ出で、顔貌は老人のやうに見える。運動することは甚だ拙劣にして歩行は引きづるやうである。汗腺の異常のために發汗することは甚だ僅かである。生殖器の發育は遅れる。精神の發達は著しく後れて、話すことも聞くことも著しく尋常のものに遅れ、甚しきは劇甚の白癡となるものである。

此の如き「クレチン」は固より先天性のものであるが、甲状腺の變性は先天性に起るに限りたるもの

でなく、何れの年齢期にもあらはれるものである。しかしながらそれが身體發育が終りたる後の年齢に起りたるときはただ特殊の皮膚の變化と、精神作用の減退とをあらはすのみである。普通に粘液浮腫(Myxödem)といふのはこの種類のもので、詳しくいへば粘液浮腫性精神薄弱と稱すべきものである。

「クレチン」の原因は此の如く甲状腺の機能の缺乏に由るものであるといふことが明瞭となつたから、これに甲状腺製劑を與へて甲状腺機能を補充するときはその症狀は著しく佳良になり、好佳の場合には全然尋常の身體及び精神の狀態に恢復することがある。

(III)

「モンゴリスムス」○蒙古型精神薄弱○身體的の異常○「クレチン」の區別○精神作用の缺陷○「モンゴリスムス」の發呈○療法

精神薄弱の一種に「モンゴリスムス」(Mongolismus)と稱せらるるものがある。これはその顔貌が蒙古人種に類似するといふ點から名づけられたるもので、翻譯していへば蒙古型精神薄弱と名づくべきものである。しかしながらこの精神薄弱にありてはその顔貌が特殊であるといふよりもその身體

的の異常が重要である。この種精神薄弱のものにありては眼が斜で、眼瞼の裂け目が細く、眼の内角の所に半月状の皮膚皺襞を見ることが頻回ある(内眥贅皮)、しばしば又、眼瞼縁に炎症を呈し、睫毛が稀薄である。その他、頭は圓く、鼻根は廣く、額骨は突出し、舌は厚く、皮膚は少しく腫脹する。しかしながら「クレチン」に於けるが如く蒼白にして寒冷ならず、却て稍々潮紅し、溫暖にして柔軟なるを常とする。「モンゴリスムス」のもの身體は矮小にして、肥滿したるものは少なく、軀幹が比較的大で、四肢はこれに反して小さく、指も爪も短かく、關節が異常に屈曲することが眼につく。此の如くにして、「モンゴリスムス」はその身體に現はるところの標徴によりて、「クレチン」とは已に出生の當時に區別することが出来る。すなはち「モンゴリスムス」にありては身體が矮小で、脂肪が少なく、眼が細く、關節が弛みて何れの方向にも運動する。それに加ふるに「クレチン」にありては舌が厚くして不恰好であるものに反して、「モンゴリスムス」にありてはその舌が長く、薄く、乳頭が著しくあらはれ、皺襞が認められるから、これを「クレチン」と區別することは容易である。「モンゴリスムス」に於ける精神作用の缺陷は種種で、最も輕度のもの辛うじて尋常の學校の科程を履むことが出来るが、多數のものにありては言語も不能、教育も不能である、言葉もただ單純のものを發し得るのみで、又その發育も十分でない。しかしながら「モンゴリスムス」のものは氣分が

爽快で、「クレチン」のやうに遲鈍でなく、よく周囲のものを観察して、それを模倣する、依て反響言語(Echolalie)が多く現はれる。又律動性の運動(無蹈、跳躍)をなすことが多くある。

「モンゴリスムス」にありては精神の發達が極めて緩徐で、幼稚の時代にありて無感覺の状態が傍人の眼につくのであるが、無智の母親は却てその靜肅なるを喜び、その「モンゴリスムス」のものであるといふことに氣がつかぬことが多い。

「モンゴリスムス」が精神病の家系及び白癡のもの存する家庭に出づることが多いのは事實である。結核の家庭に「モンゴリスムス」があらはれるといふことも報告せられた。母親の年齢が四十以上で生れたもの、及び夫婦の年齢が著しく懸隔したるもの間に生れたるものに「モンゴリスムス」の多いといふことも認められた。

「モンゴリスムス」に對しても「クレチン」に於けると同じく、甲状腺製剤が試用せられたが、特殊の効果は認められなかつた。胸腺製剤も亦用ひられたが同じく効果はなかつた。「モンゴリスムス」は身體臓器の形成の抑制に基づくものであるから、これに對する療法は困難である。

(四)

精神薄弱の區別○程度の差異○白癡の癡愚○魯鈍○教化能力による分類

ここに擧げたる「クレチン」と「モンゴリスムス」とは、精神薄弱の劇度のもので、しかも解剖學的にその特殊の變化が認められたものであり。又その他にありても特殊の標徴が存するものである。さうしてこれを尋常の教育院に收容して普通の教育を施すことは不可能のものである。それ故に、「クレチン」と「モンゴリスムス」とは教育家及び醫家に取りては興味を喚び起すものであるが、實際の問題としては、この二種のものを除きたる他の精神薄弱の方が重要である。さうして「クレチン」と「モンゴリスムス」とを除きたる他の精神薄弱はその程度の差異によりて、これを三種に區別する。その精神薄弱の程度の最も重きものを白癡(Utotic)と名づける。精神薄弱の程度の最も輕きものを魯鈍(Debilität)と名づける。さうして白癡と魯鈍との中間に位するところの精神薄弱を名づけて癡愚(Imbecillität)とする。固よりこの三種の區別は精神能力(主に概念の多少と判断力の程度)によりて隨意に區別したものであるから、三者の間に判然たる區劃が存在する譯ではない。しかしながら大人にありては三者の區別は常識的にこれをなすことが出来る。すなはち成熟の年齢に達したるもので、その精神作用の程度が七歳の兒童に同じきものは白癡である。又成熟したる年齢のものにありてその精神作用の程度が十八歳又は二十一歳のものを超えて居らぬときはこれを癡愚とするの

である。

教化能力の如何によりて精神薄弱を區別することはよろしくない。すべての精神薄弱のものはそれに對して適當の方法を施すときは教化をなし得るものであるが、それを單に理解の能力如何のみによりて判斷するときは、精神薄弱の程度を區別する上に誤謬を致すものである。それに教化能力と言つても實際的のもの、理論的のものとの間には著しい相違がある。たとへば癡愚のものにして、家庭、農園及び工場にありて指導の下にあるときはかなりよく仕事をするものでも、自己の姓名をも書くことの出来ない場合がある、しかもこれは教化能力を有するものと認めねばならぬのであるから、單に教化能力によりて精神薄弱を區別するといふことは實際上不都合である。

(五)

生後一年に於ける精神薄弱の認識○兒童精神の研究○精神發達は一定せず○身體及び機能の検査

精神生活はただ間接にこれを觀察することを得るものである。すなはち我々はその人の表情と行爲と及び殊に言語によりて、その精神生活の内容を類推するのである。たとへば人が怒り、又は怖れるときに現はれたる表情と運動と言語とが、自己が怒り又は怖れたるときと同様であるときに、その

人が怒り又は怖れたることを類推してその精神生活の内容を知るのである。ところが生後一年のものにありてはこの點に於て最も重要なところの言語が缺如して居るから、この場合その運動と行爲とによりて判斷するの外はない。それがために兒童が幼稚なれば、幼稚なるほど、これを判斷することが容易でない。

近年に至りて兒童心理學が著しく進歩し、殊に生後一年に於ける兒童の心理が明にせられてより、その精神の状態を判斷することは容易になつた。中にも獨逸のフライエル氏の「兒童の精神」(Die Seele des Kindes)と題する著述はこの點に關して貢獻するところが大であつた。しかしながら、精神の状態が尋常でないものを鑑定することは容易でない。

精神薄弱の兒童には頭蓋の異常を始めとして變性徴候が存在して居るといふことは已に上章に敘述した通りであるが、しかも身體に異常の徴候があるもので精神の尋常であるものがある。又精神薄弱のものにありてもその身體には何等の異常を呈して居らぬこともある。それ故に單に身體の状態のみによりて精神薄弱のものであるか否かといふことを鑑別することは出来ぬ。更に進みてその精神状態につき見て見るに、すべての兒童はその始めは皆、自動的及び反射的にはたらく器械のやうなもので、それが意識的の意思によりてはたらきをあらはすに至るのは漸次に精神機能が發達し

てから後のことである。さうしてその發達の狀況は尋常の兒童にありても各個の場合にありて一様でない。それ故に、大體に於て精神薄弱のものにありては精神作用の發達が後れるばかりでなく、それが異常の狀態を呈するものであるといふことは明かであつても、個々の兒童に就て、その精神の狀態が尋常であるか否かを判別することは常に困難である。歩行及び言語の如きは複雑のもので、相當の熟練を要するものであるから、精神の發達が十分でない場合には歩行及び言語も亦十分に發達しないのは勿論であるが、それもその發達の狀態が如何にあるかといふことはこれを明かにすることは容易でも、何時それが發現するかといふことについては一定の標準を擧げることが出來ぬから、それによりて尙ほ幼若なる兒童の精神狀態を判定するの役には立たぬことが多い、ましてこれを生後一年のものの精神薄弱を認識する場合に適用することが出來ぬといふことは勿論である。

(六)

自發的運動○反射的運動○衝動的運動○欲求○本能的運動○意思の最下級

生後一年のものが精神薄弱であるか否かを判定することは此の如く困難であるから、實際に於て、

これを尋常の精神の發達に比較して見て、それが異常であるといふことを知るの外は無い。

乳兒は身體を伸ばしたり、屈めたり、手や足を動かしたり、笑ひ顔をしたり、暖氣を發したり、又は口の中にグヅ／＼と音を出すのが常であるが、この場合意思は無いので、ただ緊張力が發露して此の如くにはたらくに過ぎないのである。決して故意にかやうにするのではなくして内部の刺戟に對して器械的に筋肉の反應を起すのであるから、これを自發的運動と名づける。これに併せて外部の刺戟によりて一定の運動があらはれるが、これも不隨意的の運動である。たとへば、口の中に乳が這入ると嚙下の運動が起り、苦い味のことを嘗めるときに顔をしかめるが如きものである。これを反射的運動と名づける。この反射的運動は精神作用の發達すると共に意識的の意思によりて漸次に抑制せらるるものである。しかしながら、幾多の反射的運動はその儘に残りて永久に不隨意的の運動をなすものである。

別に衝動的運動 (Die Triebbewegung) と名づけられるものがある。この運動は愉快又は不快の感情著しくは尙ほ初期には不明瞭の觀念に伴なふて起るところの自發的の運動である。さうしてこの衝動的運動は精神の發達すると共に漸次に不明瞭の性質を失ひて、欲求 (Begehren) となる。たとへば乳兒が饑餓の感情を覺えたるとき、それが哺乳によりて鎮靖せしめられるといふことを知りたる

後には、衝動的の運動は變じて哺乳の欲求となるのである、しかもこれは已に稍々進歩したる精神作用に屬するものである。

新に生れたる兒童の口に母親の乳房を含ましめるときは、固より不熟練ではあるが、口を乳頭に吸ひつけて乳をのむ。これを本能的運動と名づける。この本能的運動は反射的運動に類似せるもので、内部より起るところの不明瞭の衝動と外部の刺激とによりてあらはれるもので、決して故意に起さるるものでなく、又隨意的にあらはれるものでもない。しかしながらこの本能的運動は反射的運動に比して甚だ複雑のもので、しかもその運動をなすものには意識せられざるところの一定の目的を有するものである。ただし、この衝動的運動とは本能的運動とは意思のない單一の器械的運動よりは大分進みたるもので、これを最下級の意思と見るべきである。

(七)

下級の運動機能○握攏運動○固視○空虚の凝視○疼痛感覺の減却

兒童が生れてから六箇月位までは意思のない運動と、衝動及び本能的の運動によりてあらはれるところの最下級の意思行爲を示すものであるが、六箇月を過ぐる頃になりて始めて意識的の意思に

基づく行爲があらはれる。それから精神の發達するに伴ふて智力があらはれて不規律の衝動生活を整へ、練習によりて漸次に習ひたる運動の形成を整へる。已に第四年又は第五年に至ればすべての精神機能、即ち知覺、觀念、記憶、判斷、感情及び意識的の意思はあらはれ、言語を發することも出来るのである。しかるに此の如き下級の運動機能は重劇の精神薄弱にありても缺如することはない。却て精神薄弱のものにありては健康の兒童に於けるが如くにそれが意識的の意思に抑制せらるることが無いために長くあらはれて、後に至りても共同運動、「チック」等不用の筋肉反應となりて遺るものである。既に生後一箇月を経るに至れば精神薄弱のものと、尋常の兒童との間にはその運動の發現に於て差異が現はれる。

精神薄弱のものにあつて殊に目に著くことは握攏運動の缺如することと、固視が出来ざることである。握攏運動が意識的にあらはれるは生後約十九週に始まるもので、ブライエル氏の兒童は生後十九週目に肉叉にて肉の一片を取りてこれをその口に入れた、又二十三週目には兩者の手にて物體を凝視しつつこれを握つたといふことである。握攏運動をなすには注意の力を一定程度まではたからすことが必要であるが、又握攏によりて注意の力も發達し、それによりて意思も發達するものである。固視のはたらきは握攏運動に比すれば單一のもので、この場合にも物體の上に於ける注意の作

用が伴なふものである。ブライエル氏の兒童にありて、固視のはたらきが始めて認められたるは生後第二十三日目であつた。(重劇の白癡にありて空虚の凝視をなすことがあつてこれを固視と誤まることがあるからそれに注意せねばならぬ)。

乳兒が非常に不安で、たとへば入浴の際に噪ぐやうに場合に、直ちにそれを異常とするはよろしくない。これに反して精神薄弱のものにありて疼痛感の減却して居ることは事實である、全體乳兒にありては疼痛感覺は鋭敏でないのが常であるが、しかしながら全身の皮膚に引續きて針を刺して刺戟しても別段に不快の表情をあらはさぬときにはこれを白癡と推定すべきである。

(八)

嫌惡の感覺○吸乳の巧拙○號泣○嘔泣○泣き聲○顔貌○不安

尋常の兒童にありては生後十四日目位にありて、鹹味若しくは苦味のを舌の上に置くとき、嫌惡の感覺をあらはすものである。又生後二三日の後に、母親の乳房を含ましむるときはよく乳を吸ふものである。それ故に乳を吸ふことの巧拙によりて、それが精神薄弱であるか否かといふことを判斷することが出来る。

精神薄弱の兒童は時として何等著しき原因が無くして號泣して已まぬことがある。又夜となく、晝となく、常に呼號することがある。時としては號泣することがなく、せいせい嘔泣をする位のものがある。又母親はその乳兒の泣き聲の模様によりて、それが何を欲するか、空腹を訴ふるのであるか、不愉快を感じるのであるか、大小便の排泄を訴ふるのであるか、腹が立つのであるか、又は恐怖をいだくのであるかを判斷することが出来るのであるが、精神薄弱の兒童にありては、その泣き聲に此の如き階級を區別することが出来ぬ。殊に目につくことは精神薄弱のものが泣くときにその眼から涙が出ないことである。健康の兒童にありては生後第五週又は第六週にありて既に悲泣することが多い。精神薄弱のものにありては顔貌が空虚で生命がないやうに見える。笑ふことがあつてもそれが愉快の感情とは關係することなく、別に感情の表現もなく、ただ器械的にあらはれるのである。喜悅もなければ悲哀もない。尋常の兒童にして、まだ悲泣することが出来ぬものにありては不快の感情を示すために額に皺を寄せ、口角を牽き下すのであるが、精神薄弱のものであつては此の如きことはない。自分が好めるところものが眼の前にもありても平氣ですまして居る。眼の前に何か物を置きて注意を喚び起すときは頭部を廻轉するも、これは反射的のもので、視線をその物體の方に向けることはない。健康の兒童に於ける注意の顔貌は眼を大きく開きて、珍しさうに物體を眺め、

口をば半ば開くものであるが、精神薄弱のものにありては此の如き顔貌を呈することはない。精神薄弱の兒童にありては意識的の欲求なく、又排斥するものもない。精神薄弱の兒童は靜かに横はるか、又多くは目的のない運動をなし、手をば振子の如くに搖かし、又は身體を展伸したり、屈曲したり、又は軀幹を側方に傾け、又は頭を搖る、しかもそれを律動的に數時間の久しきに涉りて尙ほ止めぬことが多い。

(九)

注意力の缺乏○印象不十分○觀念形成不十分○智力検査法の應用

精神生活は元來、感覺によりて意識に引き入れられるものであるが、精神薄弱のものにありては、感覺の器官が十分の機能を營まぬものではなく、その腦髓が十分に發達して居らぬために、外界よりの印象はこれを受けながら、これを意識の内容に引き入れぬのである。固より我々人類の意識には限界がありて、我々は同一の時間には外界から送らるるところの刺戟の一小部分を受くるのみである。殊に刺戟の強きもの、又はそれが反復せらるる場合にのみそれを受感する。この場合多數のものの中から、何物かを選び取るのは全く注意の力によるので、この注意の力によりて眼に見える

ものを熟視し、耳に聽えるものを傾聽するのである。若し注意の作用を伴はざるものは見れども見えず、聽けども聽えず、感覺は何の作用をもなさぬことになる。それ故に注意の力は精神の發達の上重要な意義を有するものであるが、精神薄弱のものにありてはこの注意の作用が十分でない。それがためには精神薄弱のものにありては著明の印象を得ることがなく、従て明瞭の觀念があらはれることが無い。重劇の精神薄弱にありては刺戟が強劇で且つ反復するときでも、その印象が十分でない、従て感覺するところのものが何物であるかといふことを理解することない、觀念の形成せらるることが十分でなく、その精神の内容には貯蓄といふものがない、何時でも新しく學ぶといふ有様である。周圍の人々の誰なるかを知らず、自己の衣服や靴具等をも知らず、音聲を聞き分けることも出來ず、何でも蚊でも口の中に押し入れるといふ有様である。自己の身體と外界との區別が判然でないために自己の身體を掻き、噛み、又は打ちて創傷をつくることがある、これには又精神薄弱のものには痛覺の減却があるといふことも手傳ふて居る。可愛がられても、懲罰せられても平氣であり、恐るといふことも、喜ぶといふことも、又恥しがることもない。但し食物を見て、それを欲求するがためには甚しく躁くことがある。此の如き精神の状態は尋常の兒童と、精神薄弱の兒童との間に於ける區別の著しいものである。

ここに敘述せるものは生後一年間に於ける兒童が精神薄弱であるか否かを判別するに就ての標徴を擧げたのみである。已に成長したる兒童の精神薄弱を判断するには所謂智力検査法を應用すべきである。

附 録

智力検査法

智力(Intelligenz)とは注意、記憶、概念形成、再生作用、判断、聯合作用等數多の精神作用を集めて總稱するのである。精神薄弱のものにありては智力の缺陷が著しいのであるから、これを取扱ふには先づ智力検査法を施してその智力の缺陷を證明することが必要である。

これまで普通に、兒童の智力を検査するに、單に知識(Wissen)の如何を検し、學校生徒にありては學校に於ける試験の成績の如何によつてその智力を検定するを常とした。しかしながらこれによつては、智力の要素の一成分たる記憶の力の如何を知ることが出来るのみであるからその結果は不満

足である。智力検査法としてはどうしても智力の要素としての精神作用のすべてを試験せねばならぬことは言ふまでもない。

ここに、その各個に就ての試験の方法につきてその大略を擧げる。

注。意。の。檢。査。

(一)室内にあるところのすべての物品を観察せしめ、次でその眼を閉ちて、その注目したるものを列擧せしめる。

(二)週、月、數、「アルファベット」等を逆に言はしめる。但しこの場合には豫めそれを正當にいひ得るか否かを試み置くことが必要である(チャーヘン氏法)

(三)被檢者に對して意義のない文章(フランス語かラテン語の)中で a 又は n の文字のすべてを消さしめる(或はその文字の下方に短線を引かしめる)(ブルドン氏法)

(四)一定の數の中から連続的に一定の數を減せしめ又はこれを加へしめる。たとへば二〇〇の中より連続的に反復一一を減せしめ、又は一二の數へ連続反復して七を加へしめる。

(五)各種の色を有せる種子、たとへば豌豆、蠶豆、大豆等を混交したるものよりなるべく速かにそ

の一を選別せしめる(ライヒ氏選別法)

記。憶。の。檢。査。

(一)生活知識 (Lebenswissen) すなはち日常の生活の經驗によつて得たる知識を検査する。日常所用の物品(たとへば時計、小刀、鉛筆等)を示してその名を言はしめ、又その用途を答へしめる。

(二)日常の生活の經驗につきての記憶を検査する。たとへば
年齢はいくつか。何處で生れたか。何時生れたか。何處に住むで居るか。汝が住むで居るところの土地には凡そ幾何の人口があるか。その土地には山があるか。川があるか。そこから汽車に乗つてここに来たか。汽車には幾何の等級があるか。木の葉が枯れて落つるのは何時頃か。氷が出来るのは何時か。週日の名は。一年中の月の名は。一ヶ月には何日あるか。一ケ年には何日あるか。百匁とどの位か。一升とどの位か。貨幣には幾種あるか。米一升はいまどの位の價がするか。衆議院とは何か。刑法とは何か。

(三)最新記憶の検査。

今日は何月何日であるか。汝は何時頃ここへ来たか。昨日は何處に居つたか。この前の日曜日に

は何をしたか。

(四) 一定の数字を読み上げて聞かしたる後、即時にそれを言はしめる。

たとへば 4 7 8 3 9 6

8 5 9 3 7 2

(五) チーヘン氏計算法

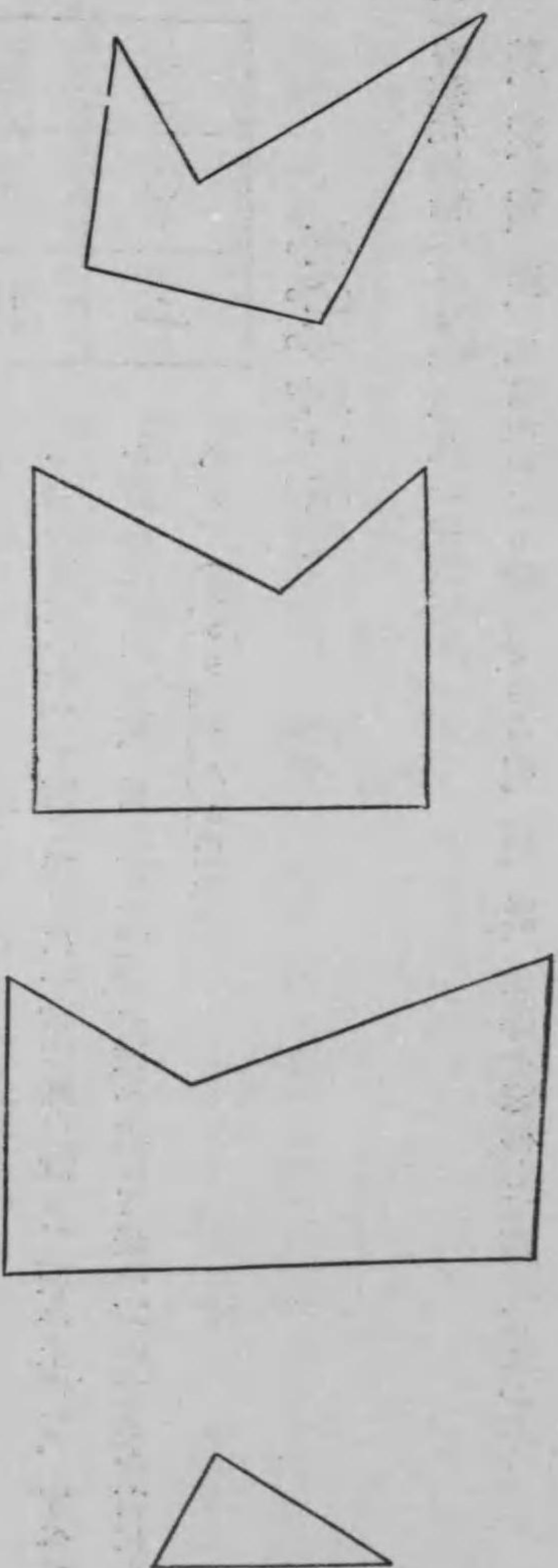
48 : 6 = ?

7 x 15 = ?

29 + 57 = ?

(六) 一〇又は一五乃至二〇個の言葉(連繋せざる)を読み上げ、或は連続して一〇又は一五乃至二〇個の物品を示し、後直ちに記憶して居るだけの言葉又は物品を言はしめる(ツールヌ氏法)

(七) 次に掲ぐるが如き単一の圖を示し、後ちその圖を匿してこれを寫して畫がかしめる。(チーヘン氏模様法)



(八) 短かき話を聴かして、それを言はしめる。

(九) 繪畫を示して、後にその繪畫につきて見たるところを言はしめる。

(一〇) 片方の手の指の各個に數字、又は人の名又は一定の言葉を附けて聴かしたる後に、その數字、人名、言葉を言はしめる(リーデル氏法)

(一一) 次の圖に示すやうな圖を畫きたる錐形を示し、それを新にして圖畫の無い錐形の上へ元の位

○	◇	□	/
♀	∧	>	=
÷		×	

概念形成の検査

(一) 普遍化機能 (Generalisation) の検査。

鶏、鷺、鷺、燕、鳩は如何なる動物であるか。鶏、鷺、鷺、燕等を總稱して何と言ふか。

(二) 特殊化機能 (Spezifikation) の検査。

置のやうに圖書を入れしめる。(ビチー氏法)

(二二) 一對に並べたる言葉の十五個を読み上げる。たとへば

- 庭園——大
- 貧乏——無作法
- 害——鼠
- 銳——引札
- 線——金貨
- 犬——海
- 睡眠——夜
- 戰爭——糖
- 頭——流
- 七——愛
- 衣服——白
- 家——市街
- 紫——論理
- 原因——作用
- 門——札

一對の言葉の中にて前と後とは一秒の間を置きて読み上げて、すべてを読み上げた後、前の方の言葉を読み上げて後の方の言葉をはしめる。(ランシュブルグ氏法)

家具の中にて汝が知れるところのものを列挙せよ。鳥の中にて汝が知れるところのものは何か。

(三) 隔離化機能 (Isolation) の検査。

砂糖は如何なる性質を有するか。市街は何から出来て居るか。

(四) 綜合化機能 (Komplexion) の検査。

暴風雨を記述せよ。市街を記述せよ。雷が鳴り、電光が閃き且つ黒雲よりして雨が降るときはそれを何と稱するか。家の中に多數の室があり、その室の中に多數の兒童が居り、教員が居つてその兒童に教へて居るところを指して何といふか。

(五) 概念問題を用ひての検査(普遍化機能検査と隔離化機能検査との合併)。

胡蝶とは何か。鳥とは何か。鳥といふのは何物か。感謝といふはどういふことか。

(六) 關係觀念の検査。

「何によりて」「何が故に」と質問してそれに答へしめる。「如何となれば」「然りといへども」「それ故に」等の言葉を用ひて副文章を作らしめる。

(七) 差別問題を用ひての検査。

手と足の差異は如何。牛と馬との差異は如何。水と氷、机と腰掛、河と海、誤謬と虚構との

差別は如何等。

(八) 抽象的概念の理解の検査(倫理的概念)

感謝、同情、義務、忠實等につきて實例を示せ。勇敢の反對は何か。

再生作用の検査

(一) 觀念聯合法。

刺戟語として檢者より言葉を出し、被檢者をして即刻にそれに關聯して言葉を出さしめる。

刺戟語として用ひられるものは、たとへば

野。町。毒。赤。魚。家。父。疾病。小。甘。死等

判斷及び聯合作用の検査

(一) 指南力の検査

汝は今何處にあるか。東は何れか。私は何人であるか。

(二) 知り得たる聯合序列を逆にせしむる。たとへば

週日、月次、姓名の文字等を逆順に言はしめる。

(三) 方程式法

$$2 + 5 = 12$$

$$2 \times 8 = 56$$

(四) エッピングハウス氏補填法。

一個の文章の中において、所々に文字を除去してあるものを見せて、これを補はしめる。

(五) マッセロン氏法。(課字作文法)

三個の文字を與へて一個の文章を綴らしめる。たとへば

鳥——巢——木 獵師——兎——野 水——山——谷 王——兵士——祖國

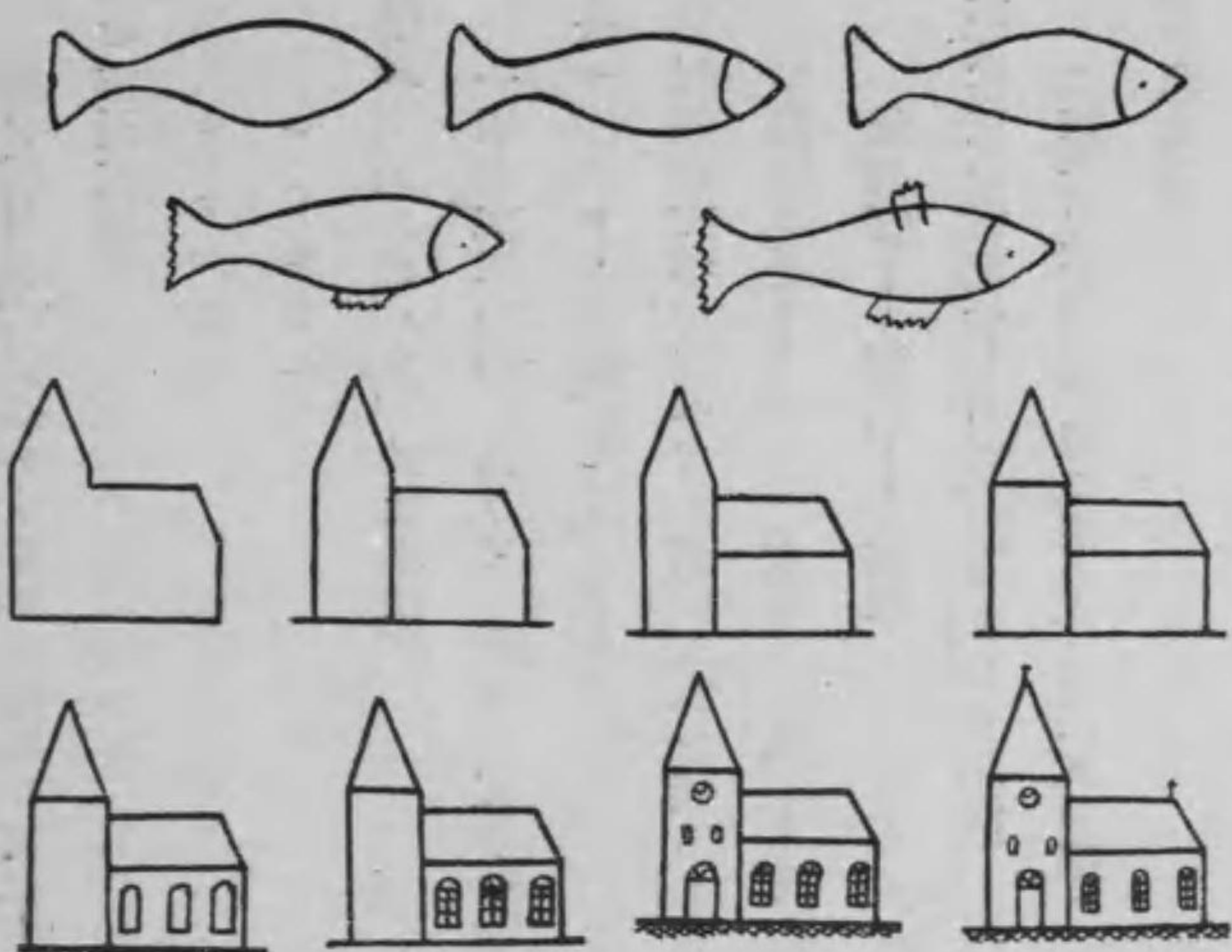
裁判官——竊盜——監獄

(六) 俗諺を説明せしめる。(フイック氏法)。たとへば

「空腹は最良の料理」朝起きは三文の徳

(七) 組立法

三個又はそれ以上の言葉を與へて、それを本として談話をなさしめる(マッセロン氏法の如く)



に一個の文章を作らせるのではない)

(八) 秩序なく排列したる言葉を適當位置に置き換て一個の文章となさしめる。

(九) 略畫試驗法。

不明瞭の略畫を示して、これから何が現はれるかを言はしめる。

(一〇) 輪廓補填法。

ただ輪廓のみを畫いたるものをして、それを補填して完全の繪畫とせしめる。ハイルブロンネル氏法も亦これに類似したるもので、輪廓のみで畫きたるものを、順序に完全に近きものにして、それが何であるかを考へしめる。

(一一) 繪畫を示してそれを説明せしめる。(ヘン

(一二) 短き物語を説明せしめる。

大略、以上に記載したるだけの検査を施して、その成績の如何によりて、智力の缺陷と否とが明瞭になり、從て精神薄弱であるか否かといふことが判断せられる。

近時世に喧傳せられるものは、ビチー、ジモン兩氏の智力検査法である。ビチー、ジモン兩氏はこの目的に向ひて努力したる後、兒童の年齢に對して各個の「テスト」(試験問題)を定め、その年齢に相當する「テスト」を解き得るものを尋常の智力とし、然らざる場合には、すべてを解き得る「テスト」の年齢を定め、それより進みたる年齢の「テスト」を試み、全く解き得ざるまでに至り、解き得たる問題の五個を一年齡として計算する。たとへば年齢九歳の兒童にして、すべてを解き得るは六歳の「テスト」である、これに次年齢の問題を與へて七歳の「テスト」の三個と、八歳の「テスト」の二個を解き得たりとすれば、その兒童は尋常の兒童の七歳のものに相當する智力を有するものである。

ビ子一、ジモン兩氏智力検査「テスト」 (一千九百十一年ビ子一氏創定)

一千九百十一年ポーベルダハ氏報告に據る

三歳

- 1、鼻、口及び眼はどれか、指示させる、2、六音から成れる文章を真似させる、3、一位の数の二個を真似させる、4、自分の姓名を言はせる、5、繪を示してその中の單一なる現象を言はせる。

四歳

- 1、自分が男か女かを言はせる、2、日用品の品を見せてその名を言はせる、3、一位の数の三個を真似させる、4、長さの違つた二本の線を比較させる。

五歳

- 1、數個の箱に重さの違つたものを入れて外見上同一にしたるものを、手に載せてどちらが重いかを言はせる、2、四角形を示してそれを描寫せしめる、3、十音より成れる文章を真似させる、4、四個の貨幣を勘定せしめる、5、三角に載りたる厚紙二個を與へ、これにて長四角形又は三角形を造らしめる。

六歳

- 1、朝か晩かを言はしめる、2、日用品の定義を下さしめる、3、斜形を畫かしめる、4、醜と美を比較せしめる、5、十三個の貨幣を勘定せしめる。

七歳

- 1、左か右かを言はしめる、2、單一の現象を畫きたるものを説明せしめる、3、三個の命令を同時に行はしめる、4、三個の五錢銀貨と三個の十錢銀貨を示してそれが幾何になるかを勘定せしめる、5、主色(赤、黄、綠、青)の名稱を言はしめる。

八歳

- 1、記憶によりて二個の物を比較せしめる、2、二十より零までを逆に勘定せしめる、3、繪像を示してその足りないところを指摘させる、4、今日は何日かを言はしめる、5、單位の数の五個を言はしめる。

九歳

- 1、貨幣を示して一圓で二十錢の買物をすれば幾何程残るかと言はしむ、2、概念につきて説明せしめる(匙は何物で、何から出來て居るか等)、3、九個の貨幣を列べてこれを説明せしめる、4、月を數へしむ、5、容易なる智力問題に答へしむ(若し友達が誤まりて打ちたるときはさうするか等)。

十歳

智力検査法

- 1、重量の順によりて五個の箱を並べしめる
- 2、記憶によりて畫をかしめる
- 3、誤まりたる文章を訂正せしめる
- 4、六ヶ敷智力問題の説明(若し學校に行くこゝが遅れたるに氣が附いたときはさうするか等)
- 5、三個の言葉を與へて二個の文章を綴らしめる。

十二歳

- 1、異なる三並列して同等なる線の判断
- 2、三個の言葉を入れて一個の文章を綴らしめる
- 3、三分時間に六十個以上の言葉を挙げしめる
- 4、抽象的概念の説明(慈惠、同情、誠意等)
- 5、不秩序に散亂して置きたる文句を適當に次列して文章させしめる。

十五歳

- 1、單位の数の七個を真似させる
- 2、示されたる言葉の中にて三個の韻字を發見せしめる
- 3、二十六音より成れる文章を真似させる
- 4、單一の現象を書きたるものを説明せしめる
- 5、心理學的問題を解決せしめる(例、隣の家に醫者が來て、次に警官が來て、しばらくするに僧侶が來た、さうしたらう)。

近時カンチギーセル氏及びワルブルグ氏は兒童の色神を檢査して、これによりて智力の如何を知ることを得べしと唱へた。兩氏の説に據れば色神の缺乏せるものには智力も亦缺陷を呈するものであると言つて差支ない。

各論

白癡

(一)

白癡の定義○最重症のもの○軽度のもの○覺官の異常○視覺○聽覺○嗅覺○味覺

白癡(Idiotie)といふのは高度の精神薄弱で、娩産以前又は生後一年の間に成立するものである(クレペリン氏)。その最重症の場合にありては精神機能は不全で、外界よりの刺戟に對して反應することなく、初歩的の衝動も抑止せられて居るために哺乳することも出來ず、嚙下することもならず、誤まつて氣道に入りたる食物を喀出することも出來ず。これに痙攣等の腦症狀が加はりて、その多

數のものは生後速かに死亡する。

白癡の軽度のものにありては本能運動はよく發達して居るから、生れてから間もない裡には健康のものごと白癡とを區別することは困難である。しかしながら既に一箇月を経るときは白癡の乳兒は尋常のものに異なりて多數の筋肉を中樞的にはたらかしてするところの運動が出來ぬから、尋常のものとは區別せられる、殊に重要な握攣運動と固視とが白癡のものに缺けて居ることである（上章總論の部（七）項を参照せよ）。

白癡にありては覺官の領域に缺陷がある。第一に視覺のはたらきが十分でなく、物を見るときいふも唯淺表的に物があるといふことを認むるのみでその性質を明にすることはない。視覺に伴なふ著しき感情の作用が現はれて、たとへば光輝のある物體又は眩ゆき色の物體を喜ぶことはあるが、見るところの物體を適當に認識することが無い。

聽覺に關しては觀察者の所見が區々である。通常新生兒にありては聽覺は缺けて居るが一箇月を経れば聽覺は既に著しく發達する。しかるに多數の白癡にありては聽覺の發達が十分でなく、生後一箇月ではその聳が著しく目に著くほどで、從て言語の發達も著しく遅れる。場合によりてはこれに反して、生後第一週に於て、強き音がするとその度毎に搖蕩を起し、遂に運動不安を呈して叫泣す

ることがある。又場合によりては音樂のために鎮靜に歸するところの白癡がある。

嗅覺は白癡のものにあつて一定度まで發育して居ることが稀でない。近傍にあるものを臭氣によりてこれを認識し、又これを區別することが多い。白癡にありて、食物の臭氣によりて俄に發揚して嘔くものがある。

味覺も嗅覺と共に一定度まで發達して居るが、白癡にありては嗅覺と共に倒錯を起し、大便や小便の味や臭を快く感じてこれを飲んだり食つたりすることがある。

(II)

觸覺○反射運動○溫覺及び冷覺○痛覺○表情運動○共同運動

觸覺は白癡にありて、尋常の兒童に比して著しく相違して居る。尋常の兒童にあつてはそれに觸るときは反射運動を起すことが著しい、殊に顔面及び口にありて甚しいものであるが、生後第二年頃よりはこの反射運動は漸次に減却する。しかるに白癡のものにありては第二年の後にも尙ほこの反射運動は著しく現はれる。六歳位のものでも、それが白癡であるときは指にて唇に觸れるか舌の尖に觸れる位にて直ちに吸吮運動が起る、若し顔面に觸れるときには頭、眼瞼の搖蕩が起り、若し

長くこれを持続するときは遂に叫喚するに至る。時としてはそれに觸るるも何等の反應を呈せざるものがある。

身體内部の觸覺もこれと同様で、膀胱の筋肉や、腸管の筋肉なども、反射運動を起すことが劇しくして、刺戟が加はると直ちに排泄運動を起すことが多い。固よりこの場合には意思の缺陷があつてそれに反射運動の制止が不可能であるために動もすれば遺尿又は不隨意に大便を漏すのである。

溫覺及び冷覺の状態は一様でない。多數の白癡は過度に熱い飲料をば平氣で飲むが、時によるとそれに對して敏感を有することがある。殊に寒冷のものに對して鋭敏に感じて、身體を洗ふときに劇しく號泣することがある。

痛覺が減却して居ることは多數の白癡のものに認められる。白癡は負傷しても疼痛を感せぬのが常である。時としては痛覺の倒錯もありて、自分で自分の身體を打つたり、かきむしつたり、傷けた

りすることがある。これは普通の兒童では疼痛を感ずる場合に於て爽快を覺ゆるがためである。表情運動は白癡にあつて、原始的で且つ乏小である。これによつてそれが白癡であるといふことが傍人にわかるのであるが、しかしながら、始にはそれが精神薄弱であるか、又は感覺の缺陷であるかを區別することが困難である。

共同運動が白癡のものに現はれることは頻回である、殊に顔面の筋肉にこれを起すことが多い。身體の位置を變更するときにも、又手足を動かすときにも顔貌が變化し、殊に不愉快の表情をあらはすことが多く、主に口角の低下を起すを例とする。

(三)

叫喚○「チック」○衝動行爲○意思○榮養衝動○模倣衝動○遊戯衝動

幼若なる兒童の叫喚は不快の感情を表現するものであるが、それに並びて自發的運動として起るものがある。白癡のものにありては、疼痛に對しての反應が鈍いから、その叫喚は多くは自發的に起るものとすべきである。すなはち堆積せられたる運動刺戟が解放せられるために起るところの運動として見るべきものである。但し饑餓の感情が起りたるときに叫喚するのは此とは別にして衝動性にあらはれるものである。白癡にありては内部及び外部の刺戟によりて起りたる運動が、反復したる結果、それが習慣となりて、自動的運動となる場合が尠くない。白癡の叫喚には自發的のもの、自動的のものが多くして、數時間の長きに涉り、晝も夜も續けて叫喚するものがある。「チック」(Tic)があらはれることも亦同様である。「チック」は目的も無く、動機もなくして現は

れる癡癡様の運動で、自發的にあらはれ、又自動的にあらはれる。これがために自分で自分の身體を虐待するやうなことがある。

衝動行爲は意思の最初歩であるが、欲求を満足することに向つて強い感情が伴ふものである。それが進むと衝動行爲にも目的の觀念が不明瞭ながらあらはれて来る。衝動行爲よりして選擇行爲或は隨意行爲があらはれる。それは行爲の動機が多くなりて、それを選択するによりて起るのである。白癡にあつては意思行爲が常に原始的の形態にてあらはれる。第一に榮養衝動がそれで、白癡の精神機械は、單に榮養衝動のみによりて運動を起すものであると言つても差支ない。これに微弱ながら記憶の作用があらはれると、食事の記憶が食器によりて聯想的にあらはれるから、白癡のものは皿の音を聽いて、連續的の叫喚をなして飲食を要求することがある。此の如くにして榮養衝動は期待の状態と關聯し、又それによりて注意の力を高むるものであるからそれを利用して小伎を教へることが出来る。

模倣衝動は白癡の重きものには缺如する。尋常の兒童にありては模倣運動はその精神の發達の上に重要な意義を有するもので、周圍の模範に激勵せられ又教化せられるのである。これには注意の能力が必要であるが、白癡のものにはこれが缺如する。これに反して白癡にして模倣衝動をあらはすものがある。殊にそれが變質して強迫的に周圍のものを模倣するに至ることがある(反響行爲 Echo-kinese)。又人の言語をも理解することなくしてこれを模倣することがある(反響言語 Echosprache)。尋常の兒童にありては、覺官は一定の刺激を受けてそれに反應するところの受働的能力を有すると共に、同時に、覺官それぞれに相當する刺激の要求を有する。それが遊戯衝動となりて現はれ、又それが模倣衝動によりていよ／＼活動するのである。しかるに白癡にありてはこの兩個の要件が缺如して居るから遊戯衝動はあらはれることがない。従て白癡のものには自分を教育して行くといふ作用がない。

(四)

感情○恐怖○苦悶○憤怒○運動能力の障礙

感情は直接にこれを認むることが出来ず、表情運動によりて間接にこれを知るの外はないが、白癡にありては表情運動が十分にあらはれぬが故に感情の如何を知ることが容易でない。笑顔をしたかと言つて強ち嬉しいのではない。泣いたかと言つて苦痛があるのではない。快と不快との状態を白癡につきて明にすることは困難である。しかしながら、感情が一定の劇度を加へ、それが一定

の方法によりて運動領域に現はるるに至るときはそれを觀察することが出来る。その中で著しいものは恐怖と苦悶とである。白癡の中には常に視線を地面に向け、顔をかくして人と對するを嫌ひ、大きい音がすると驚いて身體を縮め、それに觸るときは痙攣又は震戦を起すものがある。かういふ場合には、そのものが從來虐待せられたか、又は劇しく驚いた經驗があるのであらうと思はれるのであるが、事實は決してさうでなくして、病的の感情によるものである、全く内部の原因に基づくものである。時としては白癡が憤怒的發揚を呈して突如として狂躁發作をなすことがある。この場合には平生爲し得ざることをもする。勿論此の如き感情發揚劇度の状態が觀念の根據を有して居らぬといふことは明かである。

すべて感情生活は最も單一なる表現をもなさず、喜悅や苦悶や悲哀や鬱憂の感情を順序正しくあらはすことも出来ず、泣くことも無く、希望もなく、恐怖もなく、驚愕もなく、氣分は全然中性なるか、或は遲鈍性なるか、或は爽快性なるかを常とする。憤怒を起すときには周圍に對して盲目的に亂暴のことをなし、或は自己の身體を傷づくることも稀有でない。

(五)

運動能力の障礙○言語の異常○感動的の言語○智力的の言語○發音不明症

白癡のものには、その外に、運動能力の障礙がある。麻痺又は拘攣を病みて居らぬ白癡にありて、受動的に手足を動かすことにも困難を覺える。又中樞に於ける運動主宰の機能も十分でない。それ故に白癡のものの運動の能力は至て不十分である。さうして此の如き運動能力の障礙は認識衝動の不完全又は缺乏と關係して居る。

運動能力の状態によりて白癡を發揚性ものと遲鈍性のものに區別するを常とするが、これは適當の分類ではない。多數の白癡の中にはこの何れにも屬せないやうな中間性のあるばかりでなく、一人の白癡にして發揚性であり、又時としては遲鈍性であるといふやうなものも尠なくないから、嚴然とこれを區別することは困難である。

白癡の多數にありて、言語發達の主觀的の方面たる音の產生には缺陷がない、しかしながら言語を理解すべき智力が十分でないために周圍の人人の言語を理解してこれを模倣することが出来ない。これに加ふるに運動機能の缺陷のために音聲としてこれを發表するの能力に缺けて居るのが常である。この場合、原始的の言語理解能力は存在するのであるから一定の音聲の性質たこへば母親の聲であるか否かを知ることが出来る。それが少しく發達して行爲と物體との上に、その要求を充

たすために用ひらるる言語として、所謂感動的の言語が出来る。それより進みて智力的の言語を作り、言語の一々に概念的意義を有せしむるやうになることは白癡のものに望むべからざることである。此の如く白癡にありて言語の障礙があらはれるのは統覺の作用が十分でないために言語を十分に理解することが出来ず、言語の聲音を正確に形成し又再生することが出来ず、又言語に要する運動機能の不十分のために言語を十分にあらはすことが出来ぬといふことに基づくものである。運動機能の不能のためには高度の發音不明症を呈するものである。

唇、舌、齒、顎骨、口蓋、鼻咽腔、喉頭等言語形成の機關にも缺陷の存することが多くして、それがために發音不明症を發するは無論であるが、此の如き器質的變化が無く、單に精神の機能即ち統覺の缺陷によりてもそれが起ることがある。

白癡の兒童に於ける固有の言語として報告せられたるものも多いが、それは周圍の人人の言語を誤まりて再生したるものに外ならぬものである。白癡にありて言語障礙の特殊のと見るべきものは無く、又言語にありて特殊の構成を有するものと認むべきものも無い。

癡 愚

(一)

癡愚の定義○注意の能力○無關心○精神的中性○精神的受働性

癡愚 (Imbecillität) とは精神薄弱の中等度のもので、精神機能の發達が十分でないのみでなく、その精神作用の統一作用が缺乏して居るのを特徴とする。さうしてここに注目すべき精神作用は第一に注意である。注意の原始的の形式は幼若の兒童にありて固視及び頭部の廻轉としてあらはれる。癡愚の兒童にありても規則として早期に既に注意の作用があらはれる。しかしながらこの原始的統覺的態度は癡愚にありては尋常の兒童に於けるよりも久時持續する。

受働的注意を能働的注意に變轉することは癡愚にありては殊に困難である。随意に視線を向けること、随意に頭部を廻轉することは生後第二年の後半にありてもまだ出来ない。この時にありて癡

愚のものが外界に對して無關心であるといふことが著しく傍人の目につくのである。癡愚のものは自發的の興味に缺けて居るばかりでなく、生後第一年にありては注意の能力は早くからはたらくて、その周圍に應ずることが困難である。尋常の兒童にありては注意の能力は早くからはたらくて、その周圍のものを認識し、又その模倣衝動を激勵する。これによりて兒童はますますその周圍の所見、風儀及び習慣に習熟することを得るのである。しかるに癡愚の兒童は精神的中性の状態を保ち、ただ一時的に劇甚の印象によりて動かさるるのみである、しかもそれが個々に孤立して互に因果的關係を有することが無い。

此の如き精神的受働性(Passivität)は遲鈍性のものには著しく現はれる。これに反して發揚性の癡愚にありては衝動的運動が多數にあらはれて能働的と誤まることがある。しかもこの運動は尋常の兒童に於けるが如くに作業衝動の運動性表現ではなく、白癡に於けると同様に反射制止作用の十分でないためである。この場合にありて、凡ての刺戟は一も制止せらるることなくして運動としてあらはれる、しかも直接には固より、又間接にも目的を有することなく、生理上より見るも、心理學上より見るも共に無用の運動である。たとへば尋常の兒童が玩具を破壊することがある、これはその物をすべての側より知らむことを欲し、又一定の關係を發見せむがため、概して言へば知識を擴

充せむがためであるが、發揚性の癡愚が玩具を破壊するのは此の如き實驗衝動に基づくものでなく、何等の注目するところもなくして、ただ盲目的に破壊するに過ぎぬのである。

(II)

受働的注意○注視○認識○能働的注意○言語

尋常の兒童にありては受働的注意は周圍に於ける一定の現象を精神的に同化するものである。それ故に初めは一時的の固視であつたものが、速かに注視となる、周圍の人人の顔貌が記憶に残り、この記憶によりて既に生後第一年には認識が出来る。さうして第一年の終には數日間見なかつたものを再び見たるときに前の認識を想ひ起すことが出来る。又見知れる人と然らざるものとを區別することが出来る。此の如くにして尋常の兒童にありては一定の觀念の上に注意の集中をなすによりて事物の皮相の知識を得るには満足せず、その同じきものと同じからざるものとを比較し區別するやうになりて遂には概念的の抽象をなすやうになる。しかるに癡愚の兒童にありてはその衝動力の作用によりて自發的に自家教養をなすことが出来ず、能働的注意をなすためには強劇の刺戟を要する。癡愚の能働的注意は尋常の兒童に於けるものに比して著しい差異がある。癡愚にありては先天

性に存するところの認識衝動が缺けて居るが、尋常の兒童にありては周圍の事物を根本的に視察せむとするの衝動が強制的にあらはれる。癡愚のものにありてはせいせい事物の二三の標徴のみを認識して、ただ漠然と、それを他と區別するだけのことを知るにて満足し、注意が揮散性であるがために若し類似のものがある場合にも確實に區別の標徴となるべきものを見出すことが出来ぬ。此の如くにして癡愚のものゝの觀念は甚だ貧弱にして、言語がそれに相當して發達すればそれが著しく貧弱のものであるといふことも無論である。

尋常の兒童にありては認識衝動は、漸次に概念的に抽象してこれを言語として發表する。それ故に言語衝動と認識衝動とは根本に於て同一のもので、言語衝動は認識衝動が變形したるものに過ぎぬ。しかるに癡愚にありては認識衝動が十分でないために言語衝動も十分でなく、それに癡愚にありては能動的注意が甚だ弱く、模倣衝動が著しからず、又言語調節器官の作用が十分でないがために、癡愚のものに於ける言語は著しく後れてあらはれ、生後第四年及び第五年に至りて初めて言語があらはれるといふことも驚くには足らぬ。癡愚のものは言語の形式に概念的内容を充實せしむることが不十分で、又言語其物のために刺戟せらるることが極めて尠ない。癡愚のものゝの言語は文章にはあらずして、ただ單語を併列したるに過ぎない。

時として癡愚のものにありて、その精神の内容よりも、言語の發表の方が著しく多いことがある。言語と理解とは關係がなく、癡愚のものは思考するよりも多く談話する。この場合にありて癡愚のものが言語の模倣をなすは特殊の記憶作用によるのである。

(III)

記憶○器械的記憶○智力的記憶○部分的記憶○聯合作用○統覺聯合

記憶は癡愚の多數にありてはその發達が十分でない。元來記憶をば區別して器械的記憶と智力的記憶との二類とするが、その器械的記憶は覺官中樞をば反復して同様に刺戟することによりあらはれるものである。これに反して智力的記憶は能動的注意の作用によるもので、意識の論理的機能があらはれるといふことを必要とし、この場合には意思の努力を主とするものである。さうして器械的記憶には部分的記憶の數種があつて、その中にも主要なるは視覺と聽覺とに關する視覺的記憶及び聽覺的記憶と、特殊の仲介によりてあらはるる人の記憶、場所の記憶、色の記憶、言語の記憶、數の記憶、旋律の記憶等とである。癡愚のものにありては時としてこの部分的記憶が著しく發達して居ることがある。殊に言語、數等の部分的記憶の力が強いことが多い。それ故にこの種の癡愚にあ

りては加算又は乗算をさして、確實にそれを成し遂げ得るものである。しかしながら癡愚のものが此の如き強大なる記憶の力を有することは破格で、多數の場合にありては記憶の力は弱いのが常である(ロブシン、ランシュブルグ、ゴールドスタイン等諸氏)。

聯合作用は個個の意識内容の要素を聯合して精神機能の統一をなすもので、これは意識の受働的狀態にてあらはるるものである。これに反してそれが能働的狀態にてあらはるるものを統覺聯合(ヴント氏)と名づけるのであるが、この聯合作用は器械的記憶の要素を成し、統覺聯合は智力的記憶の要素を成すものである。さうして聯合作用は兒童の精神の發達に與かりて大に力があるもので、注意と意思とはこの聯合作用によりて現はれたる觀念に關係する。統覺も聯合作用と交互に關涉して想像及び理解の要素を成すものである。しかるに癡愚のものにありてはこれ等の作用が共に十分に發達して居らぬ。従て癡愚のものゝの觀念は交互の關係を有して居らぬ、意識の内容をなすところの觀念が個個に於て十分に發達して居らぬは事物の個個に就て標徴のみを認むるに過ぎないために互に混淆することが多い。たとへば癡愚のものは大なる動物を見ればすべてを馬と呼び、小さい動物をば悉く猫とするやうなことが多い。

尋常の兒童にありては序列聯合作用は生後第二年の終には既に十分に發達して、玩具などを序列正

しく並べるものであるが、癡愚のものにありてはこの作用があらはれない。又類似につきての單一の聯合作用もあらはれぬことが多くして實物と圖畫との區別が明瞭でない。

(四)

統覺聯合○比較と區別○想像作用○意思作用○遊戯○判斷作用

統覺聯合は注意力の共同作用の下に成立し、概念をつくるがために聯合作用をなすところの觀念に關係するものであるが、癡愚のものにありてはこの條件が缺けて居るために統覺聯合をなすことが困難である。従て癡愚のものにありては比較と區別とを十分に判斷することが容易でない。事物の性質につきての初歩的の概念も出來ない。論理的に考へることは無論困難である。統覺聯合によりてあらはれたる概念よりして更に新なる内容を生じてここに想像と名づけらるるところの精神作用があらはれるのが常であるが、癡愚にありてはこの作用が甚だ弱い。

此の如き精神作用の薄弱は意思の作用にも影響するものである。意思の行爲にありては衝動行爲に異なりて多數の動機を有するもので、その多數の動機の中から主要なるものが選ばれて目的觀念となるのである。衝動行爲にありては唯一の動機がありてそれが感情の方向を決定するのであるが、意

思行爲にありては然らず、多數の動機が互に競争してその中の主要なるものが選ばれて目的觀念となり、それによつて意思的行爲があらはれるのである。さうしてそれを潤色するには想像の力がはたらくのである。しかるに癡愚のものにありては想像の作用が甚だ弱いために意思の作用が強くあらはれることが出来ぬのである。

癡愚のものにあつて想像の作用が乏弱であるがために遊戯も亦甚しく低級に止まるものである。尋常の兒童にありて最も重要とするところの想像的遊戯をば自分からして發見することが出来ず、又それに參加することも出来ない。他の尋常の兒童の遊戯仲間からして邪魔者として排斥せらるるのが常である。

原始的の判斷作用が缺乏して居り、従て統覺が十分でないために癡愚のものにありては補充し、又結合するといふ能力が十分にはあらはれぬ。それ故に癡愚のものにあつては物品を順序正しく並べることや、又これを分類することが困難である。たとへば數個の木片を配りてこれを一定の位置に排列して、模範を示しそれを模倣せしめ、後その模範を除きて、その記憶によつて元の如くにこれを排列せしむるときは結合能力が十分でないために、上と下とを誤まり又は左と右とを誤まるのが常である。

(五)

運動の状態○失調性障礙○歩行○足の障礙○手の使用

癡愚のものの運動の状態は尋常の兒童に於けるものとは種種の方向に於て相違して居る。大體に於て運動の不熟練が認められる。すべての運動が不器用で且つ秩序が正しくない。時としては失調性障礙(共齊運動の障礙)があり、しかも麻痺や拘攣等の症狀は無い場合がある。

運動の障礙にて第一に目につくは歩行である。痴愚の兒童は歩行を始むることが遅い、これは一部は注意力の弱いためで、一部は周圍の事物を知らうとする傾向がないためである。豫め滑走を試むるといふこともない。癡愚のものにありて歩行を試むることは久時に涉り、生後第三年の終に至るも尙は自由に歩行することを得ざるものが多い、これは癡愚のものにありて歩行を試むるといふことが不快の行爲に屬するからである。又癡愚のものにありては始め容易に直立することが出来ず、直立することが出来るやうになつても、倒れたるときに自からその位置を變ずることが容易でない。癡愚のものに於ける足の障礙は尋常のものに比して遙かに多い(扁平足、尖足、拘攣病性變化)。これによりて運動をすることに不快の感情が伴ひ、又歩行に種種の障礙があらはれる。

運動の作用を主宰する中樞の機能が不十分であるがために飛び、跳り、障礙物を飛び越える等の運動が出来ない。又自制の作用が缺けて居るために多數の癡愚のものは蹠蹠として歩行し、又歩行に際して身體が甚しく動搖する。さうして、すべてこれ等の運動性異常につきて意識することがないから單純に訓戒を加へたのみでは決してこれを矯正することは出来ない。

此の如く癡愚のものにありて運動作用の不十分なるがために、その手を相當に使用することが出来ぬものがある。癡愚の兒童にありて握握反射は始めより存在するがしかも意識的の握握は後れてあらはれるか又は甚しく困難である。殊に困難なるは動きつつあるところのものを握むことである。手に物を握るときにもその物が手より脱がれ落ち、又は強くこれを握り締めて壓迫することが多い。これは觸覺と内部の運動感覺との關係がないためである。

(六)

遊戯的自發作業○共齊機能○「チック」性運動○運動性記憶

癡愚の兒童にあつては注意力の弱さと、作業衝動の發達の不十分なることによりて遊戯的の自發作業があらはれることがない。尋常の兒童にありてはその手を道具として種種の實驗的遊戯をなし、そ

れが實用となるものであるが、癡愚のものにありてはこのことが無いから手が不器用で、筋肉が弛緩し、指の運動が軽度である。種種の目的行爲によりてあらはれるところの位置及び運動感覺は癡愚のもの意識には缺如するものである。さうして癡愚のものにありては各個の運動手技は新しき共齊機能を要する。決して尋常の兒童に於けるが如くに本能的に正しき共齊機能があらはれることがない。

癡愚のものにあらはれるところの「チック」性運動は手にあらはれることが多い。時としては「チック」性運動が反復して起るために筋肉の一侧的發育をなし、又指の畸形的變化を呈するに至ることがある。

癡愚のもの運動の不熟練は手のみに限らずして、腕の運動も同様に不熟練である。癡愚のものに杖を持たしめて直接に一個の點を觸れしむるにその運動は甚だ困難である。兩方の肩をば同時に、又は交代に昂上せしむるにその運動は容易でない。尋常の兒童にありては既に生後第二年の初にありて腋下に手を觸るときは痙攣を起すものであるが、癡愚のものにありてはこの單一の運動もあらはれることがない。

此の如き運動機能の障礙は固より器質的原因に基づくものでなく、全く心理學的にこれを説明す

べきものである。この場合にありて注意と興味とがないために運動性記憶が起ることがない。従て運動の共働機能も起らず、聯合作用によりてあらはれるところの運動叢のはたつきも起らず、同様の行爲に際して運動を補助する本能的作用もあらはれることがない。

(七)

感情○自我感情○性格の變化○氣分○意思薄弱

癡愚のものの感情は尋常の兒童に比して著しく相違して居る。さうしてその相違の點は智力的情調の習得が十分でないといふことにある。又感覺が強度の情調から伴はれて居るときにはその記憶像に轉移することに失敗するために、感情生活が概して貧弱であり、又恩恵と懲罰とにつきての記憶が早く消失する。無情にこれをなぐるも別に感情の上に印象を遺すことなく冷淡にそれに對して居ることが多い。たとひ聲高く泣くやうなことがあつても、それによりてその懲罰が後に佳良の作用を呈するものであるとは言はれない。事を成したる後に後悔するといふことなく、尋常の兒童のやうに倫理的の感情が発達せず、善惡の原理に従ひて行動するやうなことはない。これに反して自我感情は強くあらはれて、自己の身體に關する幸福を喜び、苦痛を避け、又自分勝手の希望を満

たさむことを期する。両親に對しても從屬することなく、両親の愛をも感せず、父母の死亡も何等の印象を遺すことが無いのが常である。同情、羞恥、名譽、自負等の感情も癡愚のものには十分にあらはれない。富裕なる家庭に生れたる癡愚にありては高慢及び自惚が多く認められる。又主人と僕婢との區別も出来る。時としては癡愚のものにありて同情、從順、誠心等の美德を有するものもあるが、これは固より破格である。規則として癡愚のものにありては智力の薄弱と共に、倫理的感情の集和より成れる性格にも薄弱なるところが認められる。

氣分は時として中性又は癡鈍性のことがある。感動を起すことなく朦朧の状態に近い狀況を呈することもあるが、周圍より受るところの感動性刺激に對しては過度に反應することがある。時としては特殊の發揚性を呈し、動もすれば憤怒の情を起すことがある。又時としては苦悶性及び抑壓性の畏怖があらはれて社會的生活をなすことが出来ず、これに對して施すところの教育の結果が常に無効に了るのを例とする。

癡愚のものにありては意思が薄弱である。元來意思は注意の集中と、判断の力と、倫理的の動機とによりて強固となるものであるが、癡愚のものにありてはすべて是等が缺如するが故に意思が薄弱となり、これに反して批判なしに他を模倣し又他の意思に動かされ易くなる。癡愚のものにありて

時として定期的に發揚状態を呈し甚しく刺戟性となりて憤怒し易くなることもある。又時として癡愚のものに緊張病性の變化を併發することがある。

魯鈍

(一)

魯鈍の定義○感覺○注意力の薄弱○注意不能症○注意過大症○注意轉向

魯鈍 (Debilis) とはすべての軽度の精神薄弱を總稱するもので、智力的及び倫理的の判断の能力が減却せるを以てその特徴とする。魯鈍よりして尋常の精神状態に移る間に劃然たる限界の存在せざることとは無論である。生後間もなき時代にありては魯鈍はそれを認知するに足るべき徴候を呈せず、時として言語の發達が少しく後れることがある。又魯鈍の初期の徴候が兒童神經質の初期の徴候と同じやうなことがある。場合によりては魯鈍のもの精神の發達が久時の間、尋常の兒童と同一の步調にて進み、意思の努力と結合せる精神的作業をなすときに至りて初めて魯鈍たることに氣のつくこともある。時としてはその聯合作用の模様によりて早くより魯鈍たることが認められるこ

ともあるが、これを要するに、魯鈍と尋常の精神状態との限界は常に明瞭なるものではない。感覺は、それに偶發的の併發症がない限り、その種類の性質に於て著明の變常をあらはすことがない。時として魯鈍のものにありて觸覺が減退し、又その視力に種類の異常を呈することもあるが、これは直接の疲勞症状と見るべきものである。場合によりては魯鈍のもの皮膚が疼痛及び觸接に對して著しく過敏なることがある。魯鈍のものに聴力の異常をあらはすことは頻回これを認める。魯鈍にありて主要なる徴候の一として擧ぐべきは注意力の薄弱である。魯鈍の多數のものにありては注意不能症(Aprosexia)が存在して居る。從て外界の印象に對して遲鈍である。多くの末梢性の刺激はその作用をあらはすことが無い。物を見るにも視線をその方に固定することなく、二個の文章に向つて注意を集中することが出來ず、散歩をしても何を見たか話すことが出來ない。これに反して注意の病的過度(注意過大症 Hyperprosexia)を呈するものがある。この場合にありても注意を一個の焦點に集中することが出來ない。或物を認識するとき方にまだそれが十分明瞭に領解せられないのに早く既に他の認識に移り、何事も皮相を見るのみにてその根本には徹底しない。覺官的印象は注意と選擇とによりて領受せらるることなく、ただ揮散的に又表面的に認められて、從て後に残るところの記憶像は鋭敏でなく又十分でなく、それがために速かに消散し、或は誤まりたる觀察の根據となる。此の如くにして魯鈍のものにありては眞實と眞實でないものを區別することが困難である。又魯鈍のものにありて故らに注意を他に向けることがある(注意轉向)。

(11)

器械的聯合作用○觀念の不十分○記憶○統覺不十分○意思の作用○自己中心的

魯鈍のものの注意は甚だ限られたる場合に於てのみ觀念自己及びその概念的內容に向ふものである。さうしてその殆ど全部は器械的聯合作用によるもので、全く記憶的に收められたる意識の内容の再生をなすに過ぎない。すなはち尋常の兒童にありては統覺の補助によりて成すところの作用をば魯鈍のものにありてはただ聯想的にこれをなすのである。たとへば計算をなすに方りても數の概念及び觀念なしに、器械的に數辭を聯合するのである。しかしながら應用問題でも、それが輕易のものであるときは聯合作用によりてよくこれを解決することを得るものである。

魯鈍のものにありて觀念の不十分なることは著しく目につくほどではない。その缺陷が認めらるるのはたとへば善、惡、感謝、義務、羨望などのやうな抽象的觀念に於て初めてその觀念の缺陷が知られるのである。すなはち魯鈍のものにありては、ただその言葉を知るのみでその内容と概念とは

一向にこれを知らぬのである。
 多數の魯鈍のものにありて器械的の記憶又は單純の形式的記憶は佳良で、詩歌などを暗誦して永くこれを記憶することが出来る。それ故に若し器械的記憶のみを主とするときは魯鈍のものは學校教育を受けるには十分で兩親も教師もその魯鈍たることを知らずに了ることが多い。しかしながら論理的の記憶には缺くるところがあるから、これを試験すれば固よりその魯鈍を看過することはない。記憶によりて收めたる事項を一定の外観によりて序列することの能力は多數の魯鈍にありて十分に發達して居る。魯鈍のものにありては此の如く統覺の機能が十分でないながら思考に際しては聯合作用によりて代償をするものであるが、この聯合作用の強度に働くことのために魯鈍のものにありて、聯合作用によるどころの記憶が常度を超えて強劇となれるを認むる。それがために魯鈍に於ける精神作用の缺陷は隠蔽せられてあらはれず、それが判断を下すことを要し、決定をなすことを要するときに至りて統覺的の認識を必要とし、しかも聯合作用によりて代償することの出来ない場合に及びて、その精神作用の缺陷は忽ちにしてあらはれ来るものである。
 魯鈍のものにありて統覺の薄弱なることは意思の領域にありて殊によく認められる。全體意思の作用の發達に就て見るに、すべて、兒童は始め周圍のものを行爲を模倣してそれをその行爲の常規とする。

魯鈍 (シュレーンゲル氏に據る)



- 1 (1) 中等度魯鈍。感動劇甚。著明の長頭。
- 2 (2) 中等度魯鈍。前者と兄弟。智力及び倫理的感情發達。著明の長頭。
- 3 (3) 輕度智力障礙。短頭。後頭穹窿部缺如。
- 4 (4) 強度の魯鈍。神經質。智力發達遲徐。倫理的感情發達。歪頭。
- 5 (5) 最強度の魯鈍。精神の發達休止に近し。小頭。

する。而して尋常の兒童にありては統覺作用の發達すると共に動機につきて考慮するやうになる。ところが魯鈍のものにありてはそれが出來ず、いつまでも原始的の狀態に止まり、永く模倣をこれ事として周圍の模範に従ふものである。しかもそれが聯合作用に基づくものであるから行爲は大體に於て同一の形態をなし、魯鈍自身の經驗と見解とによりてこれを取捨するのである。従つて魯鈍のものは高等の性質を有する行爲に對してこれを理解することなく、ただ

魯鈍 (シエレーンゲル氏に據る)



兄弟、血族結婚の間に生る。重
劇の先天性股關節脱臼を有す。
兄は劇度の魯鈍、弟は中等度の
魯鈍。第三の兄弟は尋常

自己が同化し得るもの、すなはち自己に利害を及ぼすものだけに就てのみ取捨する。それがために魯鈍のものの意思行爲は特殊の自己中心的のものである。

(三)

精神的小兒狀態○偶然反應○享樂的生活の欲求○所謂道德狂○動物虐待

魯鈍のものはすべて利己主義者である。純粹の人格的動機によりて他人より意思の作用が動かさるることは殆どない。その意思は全く小兒の狀態にして未熟である。これを精神的小兒狀態 (Psychische Infantilisimus) と名づける。論理的思考の缺陷は聯合作用の一定の發達のために隠蔽せらるることがあるが、その意思の方面に於ける缺陷は常に著しくあらはれるものである。若し周圍の模範が直接にも亦間接にも影響せざる場合には、魯鈍のものの行爲は偶然反應が系統なく序列的にあらはれるに過ぎない。行爲に對して方向を與ふべきものが缺けて居るのであるから性格の發達は覺束ない。若しこれに衝動の力が強くあらはれるときはその狀態は極めて不良である。すなはち魯鈍のものは早くよりして覺官的愉快を得ることをつとめ、すべての要求は本能的にこれを排斥するのである。これがために魯鈍のものは早くよりして享樂的生活を欲し、それをして作業に従事せしめ又は義務を履行することに習熟せしめむとすることに對して頑固に抵抗することが多い。而して此の如き覺官的愉快に對する衝動的の要求に對してこれを制止するの作用はあらはれないから、この場合に方りてそれに對して教育的矯正を施すか又は強制的にこれを制止するときは猛烈なる反應が起ることが多い。總じて魯鈍のものの行爲は反社會的の性質を帶び、遂には所謂道德

狂 (Moral insanity) の状態をあらはすに至るものである。しばしば又倒錯の感情によりてこの状態をあらはすことがある、すなはち感覺及び觀念に伴ふて起るところの愉快と不愉快との感情が倒錯して、尋常のものが不愉快を感ずるところの行爲に對して却て愉快を感ずるのである。それがために魯鈍のものは多く殘忍の傾向を有して居る。動物を虐待することもこの類に屬する。尋常の兒童にありては生後二十七箇月目には既にあらはれる (ブライエル氏) ところの同情の心はあらはれずして、却て他人の苦痛を喜ぶの心があらはれる。倫理的の變性を呈せるものにおいて他人に苦痛を與ふることによりて却て愉快の情を起すものがある。若し周圍のものが威嚇することが甚しきか、又は關涉することが強ければ、ますますその反社會的行爲は瘴惡となるのが常である。遂にはその衝動行爲のために周圍の人々を苦しめるやうになる。殊に意思薄弱の甚しいものにおいて暗示を受け、それがために猛惡の行爲を敢てすることが多いから、社會に對して極めて危険のものである。

(四)

否定性○拒絶○反抗の態度○冷淡性魯鈍○超社會的○彷徨癖○學校嫌忌○浮浪者

魯鈍のものにおいて、反社會的活動が衝動的に發達することを抑制すべき感作のすべてのものが

排斥せられるがために、幼若の頃よりして、否定性 (Negativismus) となることが多い。すなはち魯鈍のものはすべての機會に際して何物をも排斥し、たとひそれが間接には自己のために便益となるものをも拒みて、従順でないものが多い。周圍の人人から要求せられ又は希望せらるるところのものは何等の判断をなすことなしにすべてこれを拒絶し、自己主義的の衝動のために支配せられるのが常である。この場合にありて反抗の態度を取ることは判で押したやうに、周圍の人人が何か希望するか若しくは命令するとき、それが何時でも否定的の表現又は行爲となりてあらはれるのである。しかるに魯鈍のものの中には、此の如く周圍のものに抵抗するものに反して、周圍のものに抵抗するため必要な精神勢力の無いものが澤山にある。これを冷淡性魯鈍と名づける。この種の魯鈍にありては一面にありては病的の怠惰をあらはし、一面にありては周圍の教育的事項をば成るべく回避しようとする。それ故に周圍のものが努力してこれを教導しやうとしても本人は一向に冷淡である。衝動的に周圍のものとの隔離せむとする要求が強く、周圍の事物を取り込むには相當の精神の作用の努力を要するのにならぬ出来なために、この種の魯鈍のものは超社會的 (無社會的) の態度に出づるのである。これを前段に擧げたる魯鈍のものが反社會的の行爲をなすとは全然反對して居る。

冷淡性魯鈍のものにありては秩序及び清潔の觀念に缺ける所があるから、若しそのものに對して自から洗ふことを勧め、口及び齒を掃除することを示し、又は「シャツ」、襦袢の類を交換することを教へざるときは全く墮落の状態を呈するに至るものである。又この種の魯鈍の中には彷徨癖をあらはすものが多く何等の意味もなくして家を出でて遊行するものを見る。學校に往くことを嫌忌するものの中にもこの種の魯鈍のものが澤山に居る。ただしこの場合には強制的に秩序的の仕事をなさねばならぬといふことに就て、まだ仕事をせぬ前からそれを嫌忌して、家を出て遊びあるくといふことも著しい原因である。此の種類の魯鈍のものはしばしば後に至りて浮浪者となるものである。

(五)

性慾衝動○性慾の觀念○性慾の早期發現○性交○婦女凌辱○性慾的の見物○性慾發動容易○性慾倒錯

魯鈍の衝動性活動の中で、最も重要なものの一は性慾衝動である。精神薄弱のものにありては性慾の衝動が早くあらはれて、哺乳の年齢にして既に手淫をなすものが尠なくない。しかしながら白癡及び癡愚のものにありて性慾が早期に發呈することはその後の精神の上に於ける意味は尠ない。これは性慾の刺戟とその結果とが孤立して意識の中に存し、記憶によりて永くこれを留むることが

出來ぬからであるが、魚鈍のものにありては性慾の早期の發呈がそれに引き續きて發達を始め、愉快の感が記憶に留まり、それによつて性慾的の發揚を新にすることを意識的に要求するから、この衝動の早くあらはれることは重大視すべきである。後には性慾が常に強くあらはれてそれを制止することが出來ぬやうになる。それがためにしばしば手淫をなすばかりでなく、この意識の内容が性慾の觀念に充たされて、それがために早くより性交に耽り又は婦女を凌辱することがしばしばある。又しばしば性慾的の見物を好み、女湯や雪隠を覗くやうなことがある。

尋常の場合にありては性慾が發呈したるときは教育的にこれを制止することが出來る、たとへば羞恥の如き矯正的の精神活動を強く起さしめることによりて性慾の衝動を抑制することは可能であるが、魯鈍のものにありては衝動の力が強いために教育的の制止は何の効果もない。これに加ふるに、尋常の兒童にありては何等性慾の觀念を起すことのないもの、たとへば周圍のものゝ婀娜なる振舞によつて魯鈍のものは容易に性慾の發動をなすものである。又聯合作用によりて異性のものゝ身體に接觸せるもの又はそれに附屬するもの、たとへば女の褌、袴、「リボン」、「ハンカチーフ」等に觸れてそれによりて性慾の満足を得ることもある、(物品淫亂症 Fetschismus)。時として性慾の觀念を隨意的に再生する外に強迫的に性慾の觀念があらはれて猥褻の行動をなすことがある。夢の内容

も性慾的のものが多し。

性慾の倒錯も亦魯鈍のものにあつて多く現はれる。前に挙げたる物品淫亂症(「フェチシズム」Fetichismus)もその一であるが、この外に虐待淫亂症(「サヂズム」Sadismus)とて對手を虐待したり又は残酷なる行爲をなすことによりて性慾の満足を得るものがある。又被虐待淫亂症(「マソヒズム」Masochismus)とて自己の身體が虐待せらるることによりて性慾の満足を得る、その中でも多きは身體殊に臀部を毆打することによりて性慾の快感を得るものであるから、此種のものにありては鞭撻せられるところに却て愉快の情を起すといふ奇現象を呈する。

(六)

耽溺(飲酒、喫煙等)○神經能力の消耗○病的な機嫌○懲罰に不快感情

魯鈍のものにありて性慾の過度發動に併せて、他の種類の耽溺があらはれる。たとへば飲酒の癖が早くあらはれる、又喫煙の悪癖が早く且つ著しくあらはれる等である。もとより是等の耽溺は衝動的にあらはれるものであるが、一旦それがあらはれると段々それに習熟して、遂に劇しい程度に達するものである。

此の如き種類の快感の發動は神經勢力をして速かに消耗せしむるもので、それがために疲勞の感情があらはれ、不快の意識を覺ゆるに至るものである。それがために、盲目的の衝動が起りて外部に對して排斥的の反應を起し、病的に不機嫌となり、それによりて周圍をながむるがために周圍の人は何れも悪意ある迫害者であるかのやうに思はれる。

魯鈍にありて衝動生活が異常を呈すること尠なく、それに對して教育を施すことも敢て特別の困難を感せないものでも、時として精神の作用の平衡性が動搖して、不快の感情を伴ふところの精神の發作のために一時性の倫理的背反及び反社會的の行動をなすことがある。しかもその原因との關係が明瞭でない場合が多い。時としては此の如く外部よりの刺戟によりて氣分が變化せしめらるるのみでなく、内部にありて不快の感情を伴へる氣分が起りて同じく反社會的の行爲をなさしめることがある。而して此の如き氣分の異常は思春期にありてあらはれること多く、それがためにこの年頃になつて、倫理的に墮落するものが極めて多い。しかるに若しこれに對して不相當なる懲罰が加へられると、それによりて更に新なる不快感情が起りて、ますますこの倫理的墮落を強くするものである。魯鈍のものにありては智力的の判斷と、倫理的の判斷とが共に缺乏して居るから、倫理的の法則によりて爾後の生活を佳良の方面に進めて行かうといふやうな考が起らず、不相當なる懲

罰のために、却て原始的の感動が起り來りて周圍に對して反應するに至るものである。若しこの場合に起るところの感動(怨恨、嫌忌、憎惡)が懲罰によりてあらはれる感動(恐怖、不安)によりて強迫的に制止せられたときにも破壊的に精神の上にはたらくところの感情が永く残つて居る。それ故にこの感情が遅かれ早かれ發現し來りて、しかもそれが衝動的で、しばしば周圍の人々を苦しめるものである、これによりて魯鈍のもの犯罪に對して形罰を課するも尙ほ再びこれを犯すものが多く、刑罰の目的が達せられぬといふ事實が明かに説明せられるであらう。

(七)

學校窃盜○衝動的傷害志向○思春期に於ける性格の變化○倫理的の墮落○情調の缺乏

魯鈍のものが外部の感作によつて反社會的の活動をなすことの多いといふことは學校窃盜によりてこれを例示することが出来る。それは學校に入るまで又學校に入つてから後も訓練の上に何等特別の困難を感じることはない魯鈍のものであるが、精神作用の尋常なる兒童と競争する間に、それ及び難いといふ苦しい感じが起る、それに教師の譴責と同級生の輕蔑と家庭の懲罰(學校成績の不良なるに對して)とが加はるために反社會的の行爲をなさねばならぬやうな感動が起りて、周圍のも

のに對して何等か傷害を加へてこれに酬ひやうとの心が起る、しかも相手の方が強いからそれを恐れて、直接でないところの排斥反應をあらはし、著しき目的觀念なしにこの衝動的傷害志向があらはれて遂に同級生の所有物を侵害して、これを以て盲目的に報復の手段とするのである。これが所謂學校窃盜と名づけられるもので、魯鈍のものに多く見られるものである。さうしてこの窃盜にありて特殊とするところは窃取したる物品が特別の希望に基づくものでなく、又殆ど全く何等價值もないものである、又窃取したるものも速かにこれを放棄し若しくはこれを他人に與ふるを常とする。

思春期に至りて魯鈍のものが性格の變化を起すことはしばしば認められることであるが、この場合にありて智力の作用の方には著しい變化が無くして、倫理的の墮落が著しく認められ、社會的に關係を有するところの倫理的性質が従前に比して著しく變化を致し、周圍のものに對して粗暴となり、自己の義務を果すことをせず、それまでは相當に効果をあらはして居つたところの教育の方法に對して冷淡となり、或はそれに對して却て反抗するやうになる。時としては是等の變化をあらはす前に氣分が病的の變化をあらはして不機嫌となることも稀有でない。

これを要するに、魯鈍にありては智力が侵されて居ることは比較的輕度で、言葉の上にはあらはる

ところの抽象的觀念もまづ普通であるのに對してそれに屬するところの情調が缺乏して居る。それ故に既に上章にも言つた通り、魯鈍のものにありては感情の變化が著しくあらはれて、自己主義、虚偽、意地の悪いこと、不決斷、淺表性なることを標徴とする。

(八)

智力の缺陷の程度○教育上より見たる區別○心理學上より見たる差異○魯鈍の最軽度のものは尋常のものゝ大差なし

魯鈍にありて智力の缺陷を主とすることは固より言ふまでもないが、その智力の缺陷をば教育の效果の上より見れば、最も重度のものゝ、中等度のものゝ、最も軽度のものゝの種別がある。最も重度のものゝ、中等度のものゝとは魯鈍の中にも多數を占むるもので、精神作用の發達の狀況に就ては固より兩者の間に劃然たる區別はない。この種の魯鈍にありては算術の成績が不良で、これに反して讀方の成績の不良なるものは尠ない。書方にては正しく書くといふことは困難であるが、美しく書くといふことにつきては成績が宜しい。唱歌も亦、その成績の著しいものが多い。手工につきては魯鈍のものの中にも特別の技能を禀けて居るものがある。心理學上より見れば、魯鈍のもの

智力の缺陷は既に上章にも説いた通り、主に觀念を結合して新なる觀念を造ること、判斷を下すことにつきての缺陷が目につく。感覺及び認識の性質と劇度とは尋常のものに比して大差はない。魯鈍のものにありても見たり、聴いたり、感じたりしたことはその觀念の内容に入りてそこに留まるものであるが、義務、感謝、名譽、從順等の倫理的觀念に至りてただその言葉を理解するのみで意識が理解せられず、却てそれに代りたる觀念があらはれることがある。

魯鈍にありて判斷力に缺陷のあることはその特徴とすべきものである。これは觀念聯合作用が遅徐となるがため、若し觀念の聯合が複雑であればます／＼聯合作用の遅徐の弊害があらはれて、判斷の力に缺陷を呈するものである。觀念の範圍に於ける缺陷は左ほど著しくないので、判斷の不確と當惑とは常に著しく魯鈍に認められる。

魯鈍の最軽度のものにありてはその精神の作用は尋常のものゝ略ぼ同様で、倫理的の態度も亦尋常のものに比して格別の相違が認められぬものが多い。

精神低格

總論

(一)

精神低格の定義○チーヘン氏の「精神病性體質」○精神低格共通の異常○精神作用發達不均等○精神作用調和障礙

精神低格といふのは獨逸のコッホ氏が「精神病的低格」(Die psychopathischen Minderwertigkeiten)と名づけたるに基づきて精神の價值が低いといふ意味をあらはしたのである。チーヘン及びストローマイエル兩氏はこれに對して「精神病的體質」(Die psychopathischen Konstitutionen)の稱を用ひて居る。その他にも種種の名目がこれに附せられて居るが、固より精神病に屬するものではなく、精

神薄弱とは區別せられ、又神經症とも相違せるもので、しかも尋常の精神状態とは著しく異なりて、正に精神の健康と疾病との中間に位するものである。殊にその異常が著しく目につくのは想像、感情及び意思の方面にあらはれるものである。嚴密に言ふときは癲癇も「ヒステリー」も、又神經質の多數のものも皆この精神低格の中に屬するものであるが、普通に精神低格といふ場合には癲癇、「ヒステリー」及び神經質のやうに疾病として論すべきものを除き、精神の疾病にあらずして而かも異常を離れたるものを概括して、これを精神低格とするのである。

それ故に、精神低格には幾多の各別なる種類を含みて、概括してこれを論述することは困難であるが、何れの種類にありても、精神低格に共通の異常として擧ぐべきは精神作用の發達が不均等なることである。従て精神低格を指して一に精神作用調和障礙と名づける。殊に精神作用の不調和は感情及び感動の方面にあらはれて、喜悅、悲哀、憤怒、心痛等はその強度に於ても、又その持續に於ても、共に尋常を超え、しかもそれが不意に交代することが多い。たとへば何か希望のことが達せられない時に隅の方に引込みて、澁面をつくり、又は憂慮の状をなして暗い所に隠れ、食物を拒絶するやうなことがある。又はこれに反して憤怒して罵詈の聲を放ち周圍の人人や器物に對して當り散らすやうなことがある。多くは又、激怒の情を自己の身體に向けて、自から坐上に轉倒し、或は

その髪をむしり、自己の手拳にてその身體を擲つやうなこともある。

(11)

不安○妄想觀念○錯覺○鬱憂○不機嫌○感傷的○「ヒポコンドリー」性○倫理情調缺乏○所謂道德狂

精神低格にありて、人及び動物に對して不安の念に堪えぬやうになるものがある。この場合不安に兼て臆病となることが多い。時としては病的の不安の發作が思ひがけなく現はれて來ることがある。さうしてこの不安の發作にありて各種の妄想觀念（たとへば死なねばならぬ、病氣になるであらう）があらはれる。又一時性の錯覺を起すことがある。悲哀の經驗、恐ろしき出來事、身體的の疼痛、病氣のために褥中にあること等のために不安の感動は強くなりて持續的に鬱憂の状態を呈し甚しきは鬱憂病の症狀をあらはすに至る。多數の場合にありて氣分が何等の動機あることなくして動搖し、動機のない不機嫌の状態が數日及び數週の久しきに涉ることがあり、それに併せて智力の抑制、不眠、食慾の減弱及び體重の減却を致すことがある。一定の場合にありて此の如き状態が定期的にあらはれることがある。アシャップフェンブルグ氏の説に據ると、此の如き動機のない不機嫌の發作が短時間持續するものにありては後に癲癇を起すことがある。

時としては著しく感傷的で蠅を殺すことも出來ず、木の枝を折ることも出來ぬものがある、これは痛からうと同情に堪えない感情が強くあらはれるためである。これに反して同情の心が少しも發達することなく、極めて自己主義のものがあつた。何事を考ふるにつけてもそれが皆自己中心であるから、少しの身體の障礙でも強く感ぜられて遂に「ヒポコンドリー」性となる。これは大人の「ヒポコンドリー」に於けると同じやうに氣分が刺戟性となりて、身體の障礙に伴なふてあらはれるところの感情反應が劇しくなる。それがために、たとへばすこし咳嗽が出れば肺結核ではないかと恐れ、少し皮膚を傷つけたときでも血液中毒を起すことはないかと恐れる。

此の如き感情の障礙の甚しきものにありて、倫理的情調の發達の缺乏せる場合に、それに軽度の智力の缺陷が存するときには、精神薄弱（魯鈍及び癡愚）のものに於けると同様に所謂道德狂（Moral insanity）の状態をあらはすことがある。精神薄弱（魯鈍及び癡愚）と精神低格とは共に遺傳性の變質状態に基づくものであるから、この兩者が相結合してあらはれるといふことは決して偶然のことではない。しかしながら此の如き智力の缺陷を存するといふことが精神低格の性質として必要のものであるといふことは出來ぬ。

(三)

智力の一側的發達○特殊の早熟○注意力亢進○觀念揮散性○智力作業の定期發動○運動機能變化

精神低格にありてあらはるるところの智力の變常として必要なるはそれが一側的に發達して居るといふ點である。時日、氏名、場所等を記憶することは非常にして、記憶力は常人に超越して居りて、しかもその他の智力は甚しく常人に劣りて居るやうなものがある。殊に計數、音樂等には殆ど天才的の能力を有し、又特殊の早熟をあらはすものがある。精神低格の發揚性のものにありては注意力が病的に亢進し、これに集中作用の缺乏を兼ね、觀念が著しく揮散性となり、感動が甚しく動搖するものが多い。その日常の生活にありて、それが自己の利益に關するものであればすべてのものに興味を有し、速かにそれを會得するにも拘らず、理論的の興味には平氣で居る。精神の活潑なることは著しく目に立つほどでも勤勉に業務に従ふことは出來ず、歩一步と教育に追從して行くことは出來ず、飛躍的に何事をも會得せむことをつとむる。學校の初年級にありて讀方と書方とを學ぶことは困難でないが、それを成し遂げることが出來ないために不愉快の感情が起り、それが他の學科に放散して興味がなくなつて、兒童は全く怠惰となり愚鈍となるのである。

殊に重要なるは精神低格のものに於ける智力作業の定期的發動である。精神作業が良好であるところの時期に次ぎてこの精神作業が全く不良を呈する時期がありて、その精神作業が持久性でない。その精神作業が佳良なる時期には學校の成績は相當佳良であるが、精神作用の不良なる時期には怠惰で、忘却し易く、注意が散漫でしかも刺激性である。これはその氣分が定期性に動搖するのと同じことで、同時にその運動機能にも變化があらはれ、不器用で遲鈍となる。食物を嚙むことも遅徐となり、毎夜遺尿するやうなことがある。

(四)

想像力異常○虚言の傾向○思考の内容の障礙○妄想○強迫觀念○強迫行爲

精神低格のものにありて想像力と眞實の理解力との協和を缺ぐためにその精神作用の缺陷を致すことが尠くない。この場合にありて精神低格のものは誤解をなし、又周圍の事物をば批評してその價値を定むるといふことをせず、想像的にこれを會得するためにそれが實際と一致せず、從てその行爲に好ましからざるもの及び社會に容れられぬものが多い。殊に想像力が病的に亢進したる場合は甚だ多く、それによりて虚言の傾向が著しい、さうしてこの虚言は學校でも家庭でも常に懲罰の

源泉となり、常に親の心配の種となるものである。

想像力が病的に亢進したる場合には、嘗て目撃したることや、聞いたことや、又努力したことなどが、想像に浮び來たりてそれが眞實のものゝ區別することが出來ない状態となる。思春期になると、これに強迫觀念が加はり、又殊に女子にありては性慾的の想像が亢進して倫理的犯罪をなすに至ることがある。想像力が此の如く病的に亢進し、それによりて虚言の傾向が強くなる場合には動もすれば窃盜の惡癖に陥るものである。しかしながら虚言の全體が病的のものでないといふことは無論であるから、想像力の亢進に基づくものと思はれたる虚言者を檢するに方りては常に注意してその他の精神低格の徴候が存在するか否かを確認することを必要とする。(想像的虚言のことにつきては後章「ヒステリー」性性格の條下を参照すべし)。

精神低格のものにありて思考の内容の障礙をあらはすものもあるが、これは比較的稀である。觀念が誇大的になりて、しかもそれを病的と意識せざるもの(誇大妄想)も定期的又は間插的にあらはれることがあるが、固定したる妄想があらはれるのは固より精神病の範圍に屬する。さうしてこの妄想的觀念と想像的觀念とはその間に判然たる境界なくして移行するのである。

妄想に反して多くあらはれるものは強迫觀念である。これも同じく思考の内容の誇大となるもので

あるが、或は觀念の内容の中なる個々の觀念をば強迫的に考へ、或は強迫的に恐怖の念を起し、或は強迫的に何かを試みねばならぬといふ考を起すのである。すべて是等の強迫觀念は何れの場合でも苦痛を伴ひ、時としては甚しき不安を呈するものである。強迫觀念のために強迫行爲が起ることは當然で、それが進歩すれば、遂に強迫性神經症となるのである。

(五)

良心の強迫○内氣○羞恥○性慾性情調の早期發達○淫猥行爲○性慾の倒錯

時として精神低格のものに良心の強迫によりて苦痛の多い心配性となるものがある。言葉の上にも、又行爲の上にも、善と惡との疑問が起りて、兒童の愉快さを減却する。夜になりて寢床に入るや日中に言つたことや、爲したことを思ひ出し、それを一々母親に報告して、それが自己の良心に叶つたことを考へるときに始めて眠に就く。さうしてこの精神の状態には常に杓子定規的に瑣細なることに拘泥するやうになり、着物や書籍などに少し汚點がつきても非常にそれを氣にかけ、すべての物品をばそれ／＼その一定の位置に置くことを要し、秩序を亂すやうなことは一切禁物である。それに内氣と羞恥とが加はつて、人に對してものを言ふときにすぐに顔が赤くなり、動もすれば狼

狼し、裸體と性との前には甚しく恥かしいといふ心を起す。他の人の居るところでは決して衣服を脱することがない。ただ一人のときにのみ小便をすることが出来る。共同便所の使用は甚しい苦痛を感じる。性慾の發動の如きはこれを罪惡と做して痛くこれを排斥する。この種のもは「ヒステリー」及び強迫觀念性神經症の前驅であることが多い。

この種のものに反對して性慾性情調の發達が早期にあらはれ又それが異常に強甚なるものがある。この場合には兒童は幼若の頃からして既に手淫の惡癖に陥るもので、幼若なる兒童の手淫は常に精神低格のものに於てこれを見るとき言つても差支はない。殊に精神低格の能働性のものにありては倫理的缺陷が同時に存するによりて猥褻の言語を弄び、又は淫猥なる行爲をなし、甚しきは早期に賣笑婦の群に入ることがある。固よりこれには素因、大都市の生活、監督の不行届、不良の模範が關係するのである。

又、幼若の頃よりして既に性慾の倒錯をあらはして居ることが尠くない。又、性慾の發動と不安の觀念とが結合して居ることも精神低格のものには稀有でない。不安と期待とのために陰莖の勃起又は射精を起すやうなこともある。ストローマイエル氏は學校兒童が課題を命せられてそれが出来ぬとの不安の念が起るときに射精をするものを實驗した。又夕刻になりて不安の状態が起りて眠に

就くことが出来ぬときに手淫によつてこの不安が去るといふことが多數の精神低格の兒童に認められた。

(六)

蒐集癖○盜癖の傾向○彷彿癖○浮浪者

精神低格のものに認められるところの異常の衝動として、前記の外に、なほ蒐集癖といふものがある。蒐集癖といふのは動植物を研究するがために種種の標品を集めるといふやうな意味でなく、何の役にも立たぬものを無暗に蒐集するのである。たとへば瓦や石の小片、「マッチ」の燃え残り、紙片等の如く、これを集めても何の用をなさず、又それを何かの役に立てやうともせぬのである。この蒐集癖よりして一步を進むれば盜癖の傾向となる。しかしながらこの場合にありて兒童は他人の物品を盗むでもこれを使所の中に投げ入れたり、或はこれを街上に捨てたり又はこれを燂爐の中に入れて燃やしたりするやうなことがありて、それを自己の所有として何かしやうといふやうなことはない。全く内部より起るところの不明の衝動によるもので、兒童自身も何のためにさうしたかは知らず、たださうせねばならないのである。それ故に幾らこれに訓戒を加へても動もすればその行

爲を反復する。時としてはこの盜癖が定期的にあらはれることがある。

蒐集癖と併ぶものに彷徨癖といふものがある。これは何等の意味なしに家を出でて彷徨するものである。「ヒステリー」、癲癇及び精神薄弱のものにも同じやうにこの彷徨癖があるが、精神低格のものにありて彷徨癖があらはれるのは感動性が病的に亢進せること、不安状態の傾向によるものが多い。憤怒、恐怖、心痛等不快なる感情があらはれたるとき、すぐに家を出で、食物も取らずに彷徨をつづけるのである。又亢進したる想像力のために彷徨癖をあらはすことも稀有でない、たとへば活動寫真で見たること、又は小説にて讀みたることを實際の行動に移すによりて動もすれば彷徨するのである。第三の原因は倫理的發達の不良なる精神低格のもので、倫理的情調の缺乏せる場合にありて、仕事をするのが嫌ひになり、窮屈なることに堪えられぬために家を出でて彷徨することである。この種のものは後に至りて浮浪者の群に入るものである。

此の如く、彷徨癖のもの多數の場合にありて、それを起すところの衝動は果して如何のものであるかといふことに就ては十分の説明をなすことは出来ぬが、本來的の内的衝動が病的に變常を呈してあらはれたものであるといふことは疑を容れぬ。

(七)

身體機能の障礙○呼吸性感動痙攣○睡眠の障礙○夜驚○夢中遊行症○睡眠性「チック」○不眠○「チック」
○神經性惡習癖○遺尿

精神低格のものにありて種種の身體の機能が認められる。その中に就て、イブラヒム氏が謂ふところの呼吸性感動痙攣 (Die respiratorische Affektkrämpfe) が屢々あらはれることがある。それは神經性のもので血管運動神經の發揚が劇いものにはあらはれるもので、この種の精神低格のものが突如として發揚するとき(衝突、墜落、損傷、不快、憤怒等)に起るものである。叫泣し又は叫泣せむとするとき方に急に呼吸筋の痙攣を起し、呼吸が休止し、顔面蒼白となりて、意識を失ふのである。舌を嚙むやうなことはないが不隨意に小便を漏すことはある。數秒の後(せいせい數分の後)に至りて痙攣は自から消散し、又は精神的刺激若しくは皮膚刺激によりて消散するのが常である。この呼吸性感動痙攣は癲癇に類似して居るが固より癲癇に屬すべきものではない。神經性の卒倒にも類似して居るが、神經性卒倒是熱、疲勞、過勞、嫌惡すべき覺官的印象によりて起るに反してこの痙攣は感動の發揚によりて現はれるものである。

精神低格のものには又、睡眠の障礙があらはれる。すなはち睡眠に就くことが容易でなく、半睡のままにて長くことまつて、夢中に談話をなし若しくは笑ひ、又は齧齒をなし、時には叫喚する。さうしてすぐに醒覺することもあるが、又朦朧状態となりて周囲のものを誤認し、話をしかけても應せず、眼をぼつちり明けて、不安の顔貌を呈し、震ひながら起ち或は坐はり、泣き或は叫ぶ、しばらくして安靜となりて就眠し、朝になりては何事をも記憶して居らぬ。これは夜驚 (Pavor nocturnus) と名づけられるものである。それに又夢中遊行症もあらはれることがある。この兩者は癲癇性素質と一定の關係を有するものであるといはれて居る。

睡眠性「チック」^①といふ症状もあらはれることがある。これは強迫衝動のために律動的に起るころのもので、睡眠して爾他の精神作用が安憩するときに「チック」様不安が起るのである。この状態は一種固有で、單調の聲を發し、又は聲を發することなく寢床の上にて頭を左右に動かし、又は上半身を動かす、聲をかけて呼び醒せばこの運動は止むが、すぐに又元の通に運動する。

多數の場合になりては、不眠が精神低格の早期の徵候としてあらはれる。哺乳期にありて叫喚兒童といはれるところのものは生後第一年にありて既に病的の不眠をあらはすことが尠くない。又兒童の不眠が性慾の發揚と關聯することもある、殊に早熟性の精神低格のものにありて多くこれを見

るものである。

精神低格のものにありて多くあらはれるところの精神運動障礙には「チック」(Tic)がある(上章)身體徵候の條下を見るべし)。「チック」に併びて所謂神經性の惡習癖がある。爪を噛み、皮膚及び髪をかきむしる類がこれに屬する。遺尿もまた精神低格のものにしばしば認められる。ストローマイエル氏の說に據れば遺尿をする兒童の中には多數の常習手淫のものを發見するといふことである。それは半睡の状態のときに手淫をなし、さうして性慾の發揚の頂上に至りて遺尿する。遺尿と性慾との關係は甚だ早期の年齢にありて著しくあらはれるといふことである。

精神低格のものにありては感動が劇しくあらはれたるときに嘔吐及び下痢を起すの傾向がある。又一定の場合に對して特異素因を有することが多い。たとへば牛乳を飲みて嘔吐を起し、魚類又は「イチゴ」を食して蕁麻疹を起す等これである。殊に特異なるは卵白に對する特異素因で、その少量を食してもこれを隠して與へても中毒と認めらるべき症状すなはち嘔吐、下痢、腹痛及び熱を呈することがある。又觸接に對しての特異素因がありて他の人が坐して居つた椅子に坐することを嫌忌することがある。又時としては毛髮、頭皮及び爪甲の過敏性となるを認むる。

(八)

精神低格の種類○遺傳性のもの○獲得性のもの○持續の度による區別○能動的○受動的○實際的の區別

精神低格の最大多数のものは遺傳によりてあらはれるか、又は子宮内にてその素因を獲得せるものである。生後幾許も時日を経ざる間の個人的生活によりて精神低格の原因を成すこともあるが、これに極めて稀有である。さうして此の如く體質性に基くところの精神低格は、精神薄弱に併びて兒童期の精神異常の中にて最も多数を占むるものである。これに低格の稱呼を附するのは既に前にも言つた通り、その精神作用の價値が低いといふ意味で尋常の精神能力を十分に所有して居ないといふのである。それ故にその精神作用の一二のものに就て見るときは尋常のものを超越したものが尠なくない。又その智力の方面にありては全く尋常の標準より高く位することがある。しかるにその智力が抵抗を有すること微弱で、感情が外界よりの感作によりて劇しく左右せらるることによりて精神低格であること認められる。その詳細につきましては前段に敘べた通りであるが、此の如き精神低格はその持續の度に従ふて、(イ)不變的のもの、(ロ)前進的のもの、(ハ)退歩的のもの三種とすることが出来る(テオドル、ヘルレル氏)。この中、第一種に屬するものはそのものの精神の作用が

特異で尋常のものとは相違して居ることは明かであるが、しかしながら反社會的の行爲をなすには至らず。ただその周囲の尋常なるに對して一定の反抗をなすものである。俗に奇人といふところのものはこれに屬する。第二種に屬するものは漸次に悪化の傾向を呈し、遂に精神病となるもので、多くは早發癡病の前徴としてあらはれる。第三種に屬するものは漸次に改善せむとするの傾向を有し、これに對して適當の處置を施すとき、たとへば環境を改め、疾病を起すべき原因を去る等のごによりてその症狀の漸次に消散するものである。此の如くにして輕微の神經性異常が残るのみで、本人は平生の業務に就くことを得るのである。

又クラメール、スチール等諸氏は精神低格を能動的のもの、受動的のものとの二種とする。その受動的のものは多くは身體が薄弱で、抵抗が弱く、精神印象が過度に強く、不安が亢進し、自己意識弱くして不安定なることを特徴とする。能動的のものは強健の體質を有し感動性の淺薄、冷酷、虚言の傾向、想像力の強盛を呈するを例とする。その重劇のものにありては衝動が著しくあらはれて、汚穢と不秩序とを好み、他人の損害を見て喜び、狡猾にして、殘酷の行爲をなし、動物を虐待し、これを鞭打するも疼痛を感せず、性慾の發動盛にして反社會的及び超社會的の本能的行動をなすことが多い。

何れにしても、精神低格はその中に多數の種類を含むものであるから、これを單純・的確に分類することは困難である。ここには實際上の目的によりて、これを次の數種に區別して、その一々に就きて敘述する。

- 一、神經性精神低格、一名神經質
- 二、「ヒステリー」性精神低格、一名「ヒステリー」性性格
- 三、癲癇性精神低格、一名癲癇性性格
- 四、變質性精神低格(狹義) 一名變質性性格

各論

神經質(神經性精神低格)

(一)

神經質の定義○神經性素質○精神薄弱及び天才的素質にも現はる○個人的の神經性○神經質の持續的徵候○自制の缺乏

神經質とは神經性素因といふ意味で、その中には種種の種類があつて、全然別のものであるやうに思はれるものをも概括したる稱呼である。時としては精神の發達が著しく遅れて居るところの精神薄弱のものにありて、智力の作用の十分でないのに併びて神經性の症狀を存するものがある。又これに反して天才的の素質のものにも同じく神經性の症狀があらはれることもある。すべて兒童期にあらはるところの神經性症狀は實に多般のものでこれを網羅して概括的に敘述することは甚だ困

神經質(神經性精神低格)

難である。同じ兄弟の中でも、その性格の上に著明の差異が認められることのあるは、常識の事實であるが、この差異は全くその個人的の神経性に基づくことが多い。兒童の神経質はその精神作用のすべての反應に基づくもので、ひとり智力のみならず感情及び意思も亦共に侵されて居るのであるから、兒童の神経質につきて一定の持続的徴候を確認するといふことも容易でない。中には何等の定型的の徴候がなくて、しかも精神作用の状態が常規を離れて、高度の神経質に算入せねばならぬものもある。又教育の不良なる兒童又はその教育が誤まれたる兒童の多數にありて神経性の共通の標徴を呈する場合が認められることがある。

しかしながら神経質のものにありては、何れの場合にも共通性にはあらはれる症状も多數にあるからそれによりて神経質たることを知ることも容易である。その第一に擧ぐべきに自制の缺乏である。自制といふは精神作用の一定の均勢を得むがためにあらはれるもので、健康の精神の場合にありてはこれは著しく現はれるを常とする。それがために普通の兒童は教育に對して抵抗することがなく、秩序とか従順とか、又は義務の實行とかといふやうなことに對して比較的容易に慣れるものである。すなはち自制の作用あるがために内部と外部との教育的條件が調和的にはたらくことが出来るのである。普通の兒童にありてはこの自制の作用が強いために、たとひ教育の方法に錯誤があ

り、又十分ならざる點がある場合でも自己教育によりてそれを補充又は訂正して別に教育上の缺陷を現はさぬのである。しかるに神経質の兒童にありては自制の作用が缺乏して居るためにこの自己教育のはたらきがあらはれぬのを特殊の標徴とする。

(II)

精神作用の不調和○感受性強く、しかも速かに衰弱する○刺激性衰弱○人工的の神経質○觀念聯合の迅速
○概念的思考の容易○理解迅速

神経質の標徴として第二に擧ぐべきものは精神作用の不調和である。一定の精神作用が一側的に著しく發達せるに反して他の精神作用が甚だしく遲滞して居るのを認める。時として智力の機能が一側的に著しく發達して才能が秀でて居るのに反して感情の發達が十分でなく、又意思の薄弱なるものがある。これに對して感情の發達が著くして異常の感受性を有し。而して理解能力及び意思の發達の甚だ遲滞して居るものがあるこの場合にありては外よりの刺激に對する感受性は甚だ強いが、しかしながら速にそれが衰弱する。それ故に、これを刺激性衰弱 (Reizbare Schwäche) と名づける。又神経質の兒童にしてその意思をば絶對的に遂行せむとして周圍の事情をば一切無視して憚らざる

類のものがある。その外、精神作用の各種の範圍にありて、その發達の不調和を認むべきものが澤山にある。

此の如く、神經質のものにありて精神の作用が一側的に發達して居る點より考へて、兒童の精神が一側的に刺戟せられる場合に人工的に、神經質が起されるといふことが理解せられる。すなはち智力の發達の時期に相應せざるころの教育の方法が實施せらるるによりて智力の作用が過度に刺戟せらるるときにはその兒童は人工的に神經質にせられる。學校で過度の學科が強いられ、又それよりも家庭にありて學校の科程以外に種種の勉學が強いられることによりてこの種の人工神經質は起ることが多い。それと同じ關係にて一人子で、他に兄弟姉妹のない場合、若しくはそれが老年の祖母などに養育せられたる場合には、年齢に似合はず、成人ぶつて、ませた兒童になる。これも同じく人工的神經質の一種である。

第三に神經質のものの標徴として擧ぐべきものは觀念聯合の經過の容易なることと、概念的思考の輕快なることとである。神經質の兒童にありては精神的の作業は迅速に且つ困難を覺ゆることなしに行はれる、若し何かの精神的作業に興味が向けられるときは聯想及び統覺の過程は難なく行はれて、いかにも個個のことにつきて思考することなくして全體の統覺的結合が直ぐに出来るやうに見える。それ故に生れつき穎悟の神經質の兒童にありては理解の早いことと、思考の早いことがその特徴として常に認められる。しかしながらこれに對して神經質のものにして觀念聯合の經過が異常に迅速であるためにその理解と思考とが常に淺表的で且つ揮散的であるものがある。この場合にありてはこの場合にありて、爲すべきことの大體は知つて居りながらそれを爲すために必要な理解の力が強くなく、又その思考が揮散的に變はるによりてそのことを成し遂げることが出来ない。

(III)

思考作用揮散的○散漫(放心)○思考作業の抑制○感情に及ぼす影響○精神作用の衝突○神經性作業恐怖

神經質のものにありて思考の作用が揮散的であるために何等の痕跡を後に遺すことがない。これに加ふるに新に起りたる精神作用のために、以前の思考的作業を記憶の上に存して居つたものを抹殺することが尠なくない。それがために神經質の兒童にありては常に散漫(放心)の状態があらはれる。場合によりては神經質の兒童にありて、思考作業の抑制があらはれて、意思によりて思考を左右することが出来ぬことがある。この状態にありて思考の作用がその方向を轉換することがないために智力的の機能はこれを動かすことが出来ぬ。それ故に此の如き兒童は恰憫で、思ひ附きも良く、判

斷も正しいが、論理的に思考することを必要とする事項に對しては全然能力がない。従て學校の課程に應じて修業することが困難である。殊に思考をば系統的に他のものの上にするといふやうなことは不可能であるから、算術は出来ない。算術などをして居るときに突然として思考の連鎖が破れ、又は考へて居る中に統覺の作用に錯誤が起きて来る。又思考の間に突然、觀念聯合の作用があらはれて思考をば他の方向に轉ずるために當惑の状態があらはれる。殊に疲勞の場合にありて此の如き思考の當惑は甚だ速かにあらはれる。しかしながら場合によりては此の如き二次的の觀念を去りてその思考を續けることが出来ることもある。

この状態は神經質兒童の感情の上にも影響を及ぼすものである。すなはちそれが不愉快の感情、不機嫌、自信の缺乏、小心、不満足(不平)となりて意識にあらはれる。

内部の精神作用の均等が失はれて居るために精神作用の衝突があらはれる。さうしてそれを解決することが出来ない。意思、可能との間に於ける競争のために神經質の兒童は精神的の作業をすることが困難で、何か精神的の作業に従事しようと思ふと、すぐに恐怖の情が起り、いかにしてもこれを抑壓することが出来ない、それがために定型的の神經性作業恐怖があらはれる。

上章に説いたと同じやうな放心(散漫)がただ單に不相當の外的の影響によりて起ることも多い。こ

れは固より病理的の異常ではない。たとへていへば、不良の讀物(稗史、小説)により、又不良にして煽動的の演劇・活動寫眞を観ることによりて、當然なすべき義務のある作業を放棄して顧みないことがある。この場合には想像の作用が主に加はるによりて危険がある。すなはち感覺的印象が思考の作用を左右しそれが意識を支配してその他の精神作用をば壓排するのであるが、この想像作用の亢盛には強い愉快感情が伴はれて居る。従てこれを防ぐことをせず、注意と意思とはその方に向いて、當然爲さねばならぬ思考を尋常の如くに行ふことが出来ぬ。これは固より病理的のものではないが、しかしながらそれが長く持續して居るときは精神的「エチルギー」が遣い盡されてここに神經質を生ずるに至るものである。

(四)

注意力の不十分○意思を一定の方向に向くこと能はず○作用不能○轉向性○受働的注意力の亢進

自制の作用は前にも言つた通り、精神作用の一定の均勢を得むがためにあらはれるもので、智力の方面にありては觀念が不隨意的に發現することを禁制し、ただ當面の思考作業に關係する統覺的及び聯合的結合のみを作用せしむるものである。この場合にありてそれに相當して注意を集中し、

又目的を意識しつつ意思を轉向せしむることが必要である。しかるに神經質の兒童にありては注意の作用が尋常から離れて、概してその力が弱く、從て意識の焦點を觀念の上に止まらしめることが出來ず、又それ自身にては明瞭に意識にあらはれることのない觀念をば能働的注意の加勢によりて適當の明瞭となし、これによりて概念的思考に利用するところの能力が無い。これがために兒童が興味を覺ゆる事實のみが智力的作業の材料となり、これに反して兒童が興味を有せざるものは統覺的にあらはれることがなく、その結果、精神の作業が著しく不平衡となる。しかるに一寸、外から見ると、若し兒童が爲さむとするときは何事にも爲し得るであらうと誤解することがある。實際はその意思を一定の方向に向けることが出來ずして、それによりて諸般の方面に於て作業の不能をあらはすに至るものである。

時としては注意の作用が尋常なることがありて兒童は教へらるるままに注意を向け得ることがある。又時としては教示せらるる對象にその注意を向けることの不可能なる場合がある。此の如きときによりてその抑制を除かむとするために精神の勢力は速かに衰弱し、同一の對象につきても精神作業の強大なることがあり、又微弱なることがあり、さうしてそれが連続することがある。此の如く神經質の兒童にありては注意の作用は全く不整なるを常とすれども大體に於て注意の作用は疲労

と休養とに關係するものである。

場合によりては注意力の衰弱のために著しき轉向性を呈することがある。尋常では外來の刺戟によりて注意が轉向せらるることなきによりて精神作業が完成せらるるのであるが、神經質にありては視覺的及び聽覺的印象は些細のものでも注意を轉向せしめる。これは受働的注意が病的に亢進し、而も能働的注意が十分に發達して居らぬためである。實際にありてすべての轉向印象を排除することは不可能であるから、神經質の兒童にありては高度の散漫状態(放心)を呈するを多しとする。

(五)

感情の變常○不快の感情○氣六ヶ敷○定期性氣分變常○感動○憤怒

神經質兒童の感情の方面には異常をあらはすことが甚だ多い、その中で主要なるものは不快の感情である。さうして神經質兒童の多數にありて不快の氣分を起すべき素因があつて、尋常の兒童にありては別に興奮を致すべきことでないのに、神經質のものにありてはそれがために著しく刺戟せられる。それ故に神經質の兒童にありてはこれを懲戒する言葉も、又これを賞讃する言葉も、共に著しき反應を起して、人をしてその意外なるに驚かしむることがある。些細なる他人の言動に對して

著しく刺戟せられて不快の感情を起すことが甚しい。これに反して、何等動機の認めらるべきものが無くして不快の感情が起り、それがためにその兒童は氣六ヶ敷なり、しかもその原因が本人にもよくわからぬことが多い。時として何等關係のない人に對しても不快の氣分をあらはすことがある。又時として氣分が尋常の状態であるときでも、微細の原因によつて劇甚の不快感情をあらはすことがある。時としては神經質の兒童に定期性の氣分變常を起すことが認められる。

神經質の兒童にありて感情が著しく劇烈にあらはれて感動となることが甚だ多く、而かもそれが不快の氣分よりしてあらはれて來ることが多數である。すなはち憤怒の發作が晴天の霹靂のやうに別に著しき原因が無くして突如にあらはれるのである。この憤怒發作には癲癇に關係するものもあるが、しかしながら神經質の兒童が短氣にして立腹し易く、癲癇の強いのは抑制の作用が十分でないためである。さうして憤怒した後にそれを後悔して長い間沈鬱の状態にあることもある。しかしながら又憤怒の發見が反復して久しき間、何事にも立腹するやらかな場合がある。

此の如く、神經質の兒童は短氣にして立腹し易いがために、その両親も亦教師もその兒童の行爲が道德上の要求に背くやうなときでもそれを容認せねばならぬことが多い。又既に悔悟したる後は、その興奮したる時に存在したる祕密を排除することが出來ぬから教育者の權威はその兒童自身

のみでなく、その兄弟姉妹にも重く見られざるやうになつて教育上の効果は至て微弱なるものである。又神經質兒童に特殊とするところは、たとへば學校にありて訓練を受るときは教師及び同學のものに對して何等刺戟性をあらはすことがなくして、家庭にありてその両親及び兄弟姉妹に對して甚しく憤怒の情をあらはすことである。

(六)

恐怖の感動○臆病○羞恥○病的の不愉快の感情○「ヒポコンドリー」性

神經質の兒童にありて恐怖の感動をあらはすことがある、殊に異常の臆病が最初の徴候として幼若の時期にあらはれることが多い。尋常の兒童にありても物に怖ぢけるといふことはしばしば認められるもので、殊に虐待せられたる兒童及び不良の教養を受けたるものにこれを見ることが尠なくないが、しかしながら又、病的と認めらるべき臆病の一種がありて、この場合には動もすれば幻視又は幻聽を起し易い。他人に對して羞恥の心を起すこともまた恐怖の一種と見るべきものである。神經質の兒童の中には他人に面接することが出來ず、知らぬ人が室内に入り來たるときは、それに對して一言を發することすら出來ずして、頑強にこれに反抗するのを常とするものがある。さう

して此の如き恐怖状態は始めて幼稚園に到るとき又は始めて小學校に上りたるときに著しくあらはれる。甚しきは兩手を以てその顔を掩ひかくして面のあたり人を見ることを避けることがある。若しこれを寛假して、その兒童をば幼稚園又は小學校より退かしめるときはその神経質の症状は速かに著甚となり、その家族に對しても同じく羞恥の情をあらはすに至るものである。又この場合、恐怖の感動が強くなるときは不明瞭で且つ不著明なる侵害の觀念があらはれてそれがために親近のものに對して甚しく反抗するやうにすることがある。さうして此の如き態度が全く道徳觀念の缺陷に因由するものであるかのやうに思はれることがあるが、しかしながら事實はさうでなく、ただ苦惱の氣分を周圍に向つて投射するに過ぎぬのである。

神経質の兒童にありては特異の不愉快の感情があらはれるのが常で、多數の覺官的印象には不快の感情が伴ひ、それが速に増劇して嫌厭、憎惡、苦悶、恐怖の感動となることが多い。これは一時的の氣分によりて此の如くに生理的不快から病理的不愉快に轉するのであるが、又時としては覺官的印象に結合せる觀念からして聯想的に不快の感情を起すことがある。又此の如き不快の感情が身體の機能に關してあらはれるときは「ヒポコンドリー」性となり、すこしばがりの身體の障礙でも重大に考へてしきりにその疾患につきて苦惱するやうになる。

(七)

意思の障礙○忍耐及び持續の缺如○意思行爲の轉向○意思薄弱○不從順○拒絶症

意思の障礙は神経質の兒童にありてあらはれることが甚だ多い。既に幼若の頃よりして一定の目的を以て仕事をつづけて行くことが出來ぬのでその意思の薄弱であるといふことが知られる。意思の方向が常に一方より他方に飛び出して、いろ／＼のことが意思の方面にあらはれるが、彼れ此れと思ひ煩ふて、結局意思行爲としてあらはれるものは極めて少數なるのである。さうして此の如き意思の不定は行爲の種類にも亦著しくあらはれる。神経質の兒童にありては忍耐と持續とが缺けて、初めの間は熱心にその事に従ひ甚だ精勵するやうでも遂にその目的を達するまでに到らず。中途よりその事を廢して、更に他の事に移り、それも成功せずして已むことが多い。

神経質の兒童の意思は受働的に定められる場合が多い、偶然意識の中にあらはれたる衝動のために意思行爲がその方向を他に轉するのが常である。それ故に神経質の兒童の機嫌は常に變化して一定せず、親近のもので、兒童の本態をば十分に承知せるものでも、その兒童が果して何を愛するか、何を望むか、又如何なる傾向を有して居るかといふことを適當に言ふことが出來ぬのである。

神經質の兒童は此の如く意思薄弱であるが爲に、學校に入りてその科を進め行くことが困難である。學校が命ずるところの義務を履行するには意思行爲が正規に行はねばならぬのに、神經質の兒童にありては規律的に義務を履行することが殆んど不可能である。殊に時間を守り、秩序を保つといふことは甚だ困難である。家庭にありても規律を守ることが容易でなく、食事をなすのも、散歩をするのも、皆これを定期にすることが出来ず、訓戒を受けても、又懲罰せられてもこれを改良することは出来ない。

意思薄弱のために自から練習することが出来ず、又自から教育するといふことが出来ず。時としてはその行爲が神經質兒童の倫理の觀念に反對することがある。時としては神經質の兒童が故意に周圍に對して反抗するやうに思はれる場合でも、實際はその意思を一定の動機の方に轉することが出来ぬために反社會的の行爲をなすに至るのである。ただ獨り内部の感作のみならず、外部の影響も神經質兒童の意思には十分にその作用を致すことが出来ぬがために、不従順、頑固及び難制御などの不良性格があらはれる。又神經質の兒童の意思の障礙として拒絶症 (Negativismus) があらはれることがある。この場合には周圍の一切のものを拒絶して受け附けぬために、それに對して教育の方法を施すことは甚だ困難である。

「ヒステリー」性精神低格

(一)

「ヒステリー」性精神低格○想像の亢進○魯鈍に於ける想像作用との區別○想像が全體の精神生活に及ぼす影響○現實と非現實との混同

「ヒステリー」性精神低格の兒童にありて著しくあらはるるものは想像の亢進である。元來尋常の場合にありても兒童は想像の作用を強くあらはすものであるが、「ヒステリー」性精神低格のものにありてはそれが更に著しく亢進するのである。尋常の場合にありて想像が強くあらはれたるときは理性の活動によりてこれを評價し又考慮し得るものであるが、判断の力に乏しく推論することが十分に出来ないものによりては可能と不可能との概念が明瞭でないから、空想的の事項をも實際の事項若しくは少なくとも實際にあり得べき事項と思ふのである。それ故に想像の亢進は魯鈍のものにも

同様に強くあらはれるものである。これ魯鈍のものにありて判断力が弱いために想像の作用が容易にあらはれるからである。この場合には他に「ヒステリー」性の徴候があるか無いかによりてこれを區別すべきである。さうしてこの想像作用が發展すること、又それが全體の精神生活の上に影響を及ぼすことは個人の素質に關係するもので、若しその想像が無制限にあらはるる場合、すなはち想像が理性によりて調節せられざるときは想像の觀念は意思動機となりて他の精神作用を排退するやうになる。殊に特殊の情調がこれに加はるときはそれが更らに劇甚となる。この意味に於て、想像は既に續發機能にあらずしてこれを原發機能と認むべきものである。これによりて現實的の觀念がしばしば想像的のものに造りかへられて再現せられる。從てここに錯覺があらはれるものであるが、それは意識の中におけるところの主觀的變化ではなくして、眞に客觀的狀態に相當して起るところのものである。健康の兒童にありて戯れにその觀念を想像的のものに變化せしむることはあるが、聯想の作用によりて再びこれを現實へと復歸せしむることが出来るが、「ヒステリー」性のものにありては少なくとも一時的に現實との關涉を失ふものである。又健康の兒童にありては錯覺は感情と結合して現實感情と對立して居るのであるが、この現實感情は現實の事物の認識と觀念とに伴ふてあらはれる感情で、これによりて統覺は左右せられるものである。しかるに「ヒステリー」性の

ものにありては現實の觀念が十分にあらはれないから、現實と非現實とが混同せられ、夢幻と實際とが互に相誤まられるのである。

(II)

自我を中心とする觀念○愉快の情調○不快の情調○感情の充進○感情の轉變○氣まぐれ○矛盾掩著せる性格○疾病感情の推移

「ヒステリー」性精神低格にありて、特別の情調によりて一定の觀念が強くあらはれ、それを抑制することが出来る。同一の方向に向ひて聯想を發達せしむることがある。殊にこの方面にあつて著しくあらはれるものは自我を中心とする觀念で、この觀念には、常に愉快の情調が伴ふて居る。しかしながら又時には不愉快なる觀念がこれに伴ふてあらはれることがある。この場合には多くは自己に疾病がありはせぬかといふやうな觀念が強くて、遂には又それに續きて疾病の症狀を呈することがある。「ヒステリー」性の兒童は全く自己の中に埋れるといふべきほどに自身を内省するために全體の氣分を病的に強くし、一方にありては自己意識を強くすると同時に他方にありて若し不快の情調があるときには自己の全存在をば悲觀するやうなことになるのである。この場合、不快の

情調を有するところの觀念が意識の中にあられると、直ぐにそれに類似するところの感情が續き
てあらはれて、それによりて新にあらはれたる觀念の不快の度が強くなり、速かに強い感動となり
てあらはれるものである。それ故に尋常の兒童にありては別に何等の影響もないやうな事項でも、
「ヒステリー」性のものになりてはそれが著しく影響してそれがために或は深く喜び、或は甚しく憂
ふることが多い(感情亢進)。しかしながらこの状態は一定不變にはあらずして、時としては同一の
事項に對して或は喜ぶことがあり、或は悲しむことがあり、或は何等の影響のないことがある。それ
故に「ヒステリー」性のものは今笑ふかと思へば直ぐに泣き、今泣いたり笑つたりするかと思へば、
更に平氣ですまして居るやうなことがある(感情轉變)。實に「ヒステリー」性のものは氣まぐれであ
り、言ふことが當にならず、又不確實である。概して言へば「ヒステリー」のものはその性格が矛盾
撞著であるべきである。時としては愉快又は不愉快なる觀念が生ずるか、或は單に想像的にか
くの如き觀念が再生せらるるかに従ひて、全體の氣分が一變して、それと共に個人の精神の態度が
變化することが認められる。

「ヒステリー」性のものが周圍のものの疾病を認むるとき、その知覺をば直ちに自己自身に關係せし
めて、その觀念を不快ならしめ、その觀念を聯想的に融合して、それを自身の容體に障礙がなるや
うに強迫的に考ふるによりて他人の疾病感情をば自己のものとするのが常である。

(III)

模倣衝動○感想の倒錯○意思の轉向○精神の易動性○感動の無節制○自尊○自己中心の幻想○所謂感動
的喜劇○悖德行爲

「ヒステリー」性兒童にありて、氣分の異常のために、模倣衝動が變性的にあられることが多い。周圍
の事物にして模倣すべきものが澤山にあるものを病理的に選擇して模倣する。これはもとよりその
人の感情と氣分とによるもので普通に不快とせらるることをするのが快く感ぜられる(感情倒錯)た
めに普通なれば不快のことを模倣するのである。この場合にありて自制のはたらきは全く缺如し、偶
然の印象のために直ちに氣分が變化し、注意が轉向し、意思の方向が變ずるに至るのである。それ故に
精神の機能が著しく易動性であるといふことが目に著く。健康のものにありてその精神生活は常に
因果の關係を示すものであるが、「ヒステリー」性のものにありてはそれが無くなる。聯想と統覺との
作用は尋常に異なりて、感情の作用が個人を支配し、すべての精神装置が自動的に運動を起して不適
當の運動反應があらはれる。時としては深刻にしてその健康を傷ふべき抑制の作用があらはれる。

「ヒステリー」性のものの感動状態は無節制なるのが特徴である。それ故に「ヒステリー」性のものは丁度喜劇役者のやうな趣きがある。これは「ヒステリー」性精神低格のものの主要なる徴候の一つと見るべきものである。又「ヒステリー」性のものは與へられたる事情を超越して自己が作りたる假想の世界に住むことをつとめるために思考と感情とが他の傾向を有して自尊の心が強くあらはれる。ところがこの自己の高尙なる意見と、周囲の評價とは反對なるが故にその結果は常に誤解に了るものである。この意味に於て「ヒステリー」性のものに對する両親又は教師の懲罰はその兒童をして不都合なるものであるとの感情を起さしめる。場合によりては感情倒錯のために懲罰を受けることが却て満足の感情を起すことがある。

「ヒステリー」性のものはまた、自己中心の幻想をあらはすことがある。これがために甚しきは自己を崇拜するに至るものである。又他の場合にありては想像が他の性質を現はして所謂感覺的喜劇を演ずることがある。すなはち外部では周囲と葛藤を起すことなしには實行することの出来ないものを内部にて想像のはたらきによりて實行しやうとするのである。これによりてその感情は變性を呈して、道德に背くことがある。此の如きの兒童は偶然に接觸したる不良の作法を模倣してそれを習慣とすることが多く、又内容の不良なる小説などを愛讀してそれがために不良の影響を受くる。こ

れによりて倫理的關係を無視したる仲間によりて墮落せしめられることが尠なくない。時としては仲間との間に争闘することがありてもそれが再び結合して反社會的の行動をなすところの同類を造る。この理由よりして「ヒステリー」性の兒童はしばしば家庭の内に留まることを嫌ひて、教育ある上流の家庭の兒童でありながら實際無監視の態にあるものが尠なくない。こゝういふ状態は精神薄弱のものにも見るところであるが、實際にありては精神薄弱に於けるよりも「ヒステリー」性のものにこの種の悖德行爲をなすことが多い。

(四)

精神の分離 ○所謂想像性虚言 ○有聲考慮 ○「ヒステリー」性虚言の特徵 ○「ヒステリー」性的虚言

「ヒステリー」性のものにありて此の如き精神の變質を起すときに第一にあらはれる徴候は精神の分離で、その状態に適應せる刺激を取り入れることに努力し、それがその精神の固有の性質と融合してそのものの人格を造る。それ故に不良の讀物、談話若しくは活動寫真などの内容は自己が經驗したものの如くにはたらきて來る。この場合幻想が仲介のはたらきをなし、その人の興味に適應するやうに知覺を變して以てそれに特殊の主觀的色彩を與へる。

想像の亢進は又、「ヒステリー」性のものをして所謂想像性虚言(Pseudologia phantastica)をなさしめる。想像性虚言といふのは想像の作用が強くなりて、幻想を起すに至り、その幻想の一定の成分が強制的に發表せられねばならぬやうに強度の情調があらはれるために虚言をなすもので、まさに有聲考慮の一種と見るべきものである(テオドル・ヘルレル氏)。これの程度の軽いものは尋常の兒童にありても想像の作用の鋭敏なるものによりてしばしば見るもので、現實を誤まり信ずるによりて、この言ふところが虚構となるのである。

「ヒステリー」性虚言には性的關係があることが多い。尋常の兒童にありても輕微なる感情の動搖として早期に性慾があらはれることがあるが、「ヒステリー」性のものによりてはそれが劇甚なる衝動の欲望となりてあらはれる。このことに就てはフロイド氏の證明がありて、「ヒステリー」性のものによりて性慾が早期にあらはれることはしばしば認められる。又「ヒステリー」性虚言に特殊とするところはそのものが自からの虚言を信じて居ることである。性的虚言は兒童の生活にありて地位を占むる人物に結び付けられるもので、この人物を以て性的希望及び欲望の標的とするものである。すなはち「ヒステリー」のもの性的虚言にあらはれるものは教師、僧侶及び醫師を多しとする。時としては性的虚言が一定の人物に關係なく、いまだ嘗て見たことのない人々に對して罪を歸せむとするやうなことがある。

「ヒステリー」性のものは此の如くに病的の虚言をなすの傾向があるから、此の如き兒童をば證人として法廷に呼び出すことは全然これを禁止することが必要である。「ヒステリー」性の處女が醫師の診察を受けたる後に、強姦せられたりと想像性虚言をなしたる實例もある。

(五)

感覺的欲求による犯罪行爲○放火○他に賞讀せられむとする要求○我儘○威嚇○「ヒステリー」性感染

感覺的欲求が強くあらはれることがありて、それがために「ヒステリー」性のものが犯罪的行爲をなすことが多い。その中で最もしばしば見られるものは放火である。「ヒステリー」性のものは周圍の人人から善良とか、慈善家とかと思はれむと欲して漫りに翫具や他の物品を他に與ふことがある。この場合にはその行爲がつとめて廣く人に知られむことを欲し、自からそれを語りて揚々たることがある。かくの如き利他的と思はるる行爲もその實は誇大觀念に基づけるものが多い。

「ヒステリー」性のものは動物を愛護することにつきては特別に努力しながら、その親近のものを愛護することはしないやうなこともある。

「ヒステリー」性のものには他人に驚かれ、又賞讃せられんとする欲求が盛であるために時として精神の作用が一側的に發達することがある。すべて「ヒステリー」性のもものは早熟の徴候を有し、好むで大人と交際すれども、その我儘の甚しいために排斥せられるのが常である。又尋常の兒童との交際にありては鬭争が絶えぬ有様である。

「ヒステリー」性のものでありてすべての行爲と意思發現とは感動に結び付て居るものであるが、この感動は氣の弱い周囲のものを壓服するの力がある。「ヒステリー」性のもものが劇しい感動を起したるとき、周囲のものはそのものが好むが如くに行ひ、言ふが儘にして、それに無羈束の我儘をはたらかせるより致方がない。さうしてそれが目にあまるほどになるに至りて兩親も教師も始めてこれに反對の態度を採るやうになるのであるが、さうすると「ヒステリー」性のもものは號泣、自殺の揚言、「ヒステリー」發作等でこれを威嚇するから、周囲のものもそれに對して手の下しやうがない、ただ茫然としてその靜まるを待つのみである。

「ヒステリー」性の感染はしばしばこれを認める。すなはち「ヒステリー」の徴候が他の健全なるものに傳染することで、學校の生徒の中に「ヒステリー」性のもものが居ると、その「ヒステリー」性が他の兒童に波及するものである。尋常の兒童に對しても感染はするが、殊に甚しきは意思薄弱なる兒童に

對して及ぼすところの不良の影響である。時としては「ヒステリー」性のもものはその仲間の兒童を自己の惡計の道具に使ふことがある。「ヒステリー」性の兒童はその優越性を利用して惡計を教唆し、他人をして不良の行爲をなさしめて自からは何喰はぬ顔をして居るやうなことがある。

(六)

彷徨癖○登校嫌忌○竊盜○衝動性の竊取○自殺

「ヒステリー」性のものでありてしばしば「彷徨癖」をあらはすことがある。さうしてこれは「登校嫌忌」となりてあらはれることが多くして、僅少の場合にありては「ヒステリー」性朦朧状態に因由することもあるが、多數の場合にありてはそれが病的のものであるか、或は放浪的の徘徊であるかを區別することが困難である。「ヒステリー」性のももの彷徨癖が想像、泥棒小説、冒險談等に動かされてあらはれることのあるは事實である。又「ヒステリー」性不快状態も亦彷徨癖を起す原因となることがある。殊に「ヒステリー」性のものでありては自尊の心が強いために、氣に入らぬことがあるために家を出でて諸處を彷徨するものも尠なくないのである。

「ヒステリー」性のもので見るところの竊盜は病的のものが多し。但しこの場合に朦朧状態を認むる

ことは少ない。これに反して「ヒステリー」性のものにおいて、目撃せる物に對して起るところの感情が強くして、之に反抗する所の感情は厭退せられ、判斷力に障礙が起り、自分のものと、他人のものとの區別が出来ぬやうになり、衝動的に自分が欲望するところの物品を竊取するに至るものである。「ヒステリー」性のものが自殺を企圖することも多いが、これは多くは喜劇的のものである。その多數のものは親近者が心配するのを利用してそれによりて懲罰を免かれ、又はそれによりて却て利益を得むとするのである。しかしながら感情が極端に激昂したる結果、始めは單に威嚇の手段に過ぎなかつたものが遂に實際に決行せらるるに至ることがある。

(七)

「ヒステリー」性のものの意識の状態○暗示性○自家暗示○「ヒステリー」性暗示

「ヒステリー」性のものの意識の状態はこれを催眠術によりて眠れるものの状態に比較すべきである。兩者にありて共に暗示性が著しく充進して居る。

全體暗示 (Suggestion) といふのは外部よりして影響せられ易い状態を指すのであるが、しかしながら外部よりして影響され易いといふことのみにて暗示を説明することは出来ない。元來我々はその

理性に應じ、これを證明すべき根據を得たるときには外部の言動に影響せらるるのが常であるが、これに反してその傾向と想像とによりて壓服せられねばならぬやうな感情のあらはれることによりて外部の影響を受けることがある。これを暗示と名づける。それ故に暗示性は尋常のものにもこれあるもので、すべての人は暗示より免れることは出来ない。教育といふものもその大部分は暗示によるもので、兒童は何が故に虚言を吐いてはならぬか、人の物を盗むではならぬかといふことを疑問とせずして率直に道德の法則を採用するのである。さうしてその暗示の度は氣質、性格及びその時の氣分と、又暗示を與ふるものの作用能力によりて上下するものである。「ヒステリー」性のものにはありてはこの暗示性が強く、彼の催眠術に受けるが如くは人工的にあらずして生來、暗示性を強くするだけの素質を存するものである。

「ヒステリー」性のものが暗示を受けるはその感情と思考の方向に於て、同感の情を惹き起すべきものを主とする。それ故に「ヒステリー」性のものはすべて新奇のもの、空想的なもの、色澤の美しいもの、ならびに感情的のものに暗示されることが多い。これよりも更に劇しいのは自家暗示で、自己では意識することなくして起りたる觀念のために左右せられる、殊に「ヒポコンドリー」に於けること同じやうに自己が疾病に罹りたるかの如くに暗示を受くることが尠なくない。

癲癇性精神低格

(一)

癲癇病○癲癇の症狀○大癲癇○小癲癇○癲癇發作後の精神障礙

癲癇は兒童期にあらはるることの多い疾病である。生後第一年に既に此病を起したものがその後症狀があらはれず、六歳乃至七歳に至りて再びその症狀があらはれることがある。それから第二の發症時期は十一歳乃至十五歳で、間隔を置きて癲癇の症狀があらはれる。固より初より癲癇の症狀が引き續きて中絶することなくあらはれるものもある。

癲癇と名づけられる疾病は、誰人も知るが如く意識の消失と共に身體に痙攣を發し、口から泡を吹いて卒倒するものであるが、如何の變化が腦髓に起るによりて此の如き疾病を起すものであるかは今日いまだ十分に説明することが出來ぬ。しかしながら、いづれにしてもそれは神經中樞の異常なる

發揚状態で、發揚と制止との間の生理的の均等が妨げられるものであるといふことが出来る。その症狀にも種種ありて、その症狀が劇しくあらはれることがある。醫學上ではこれを大癲癇と名づける。時には痙攣を起すことなくして、意識の特殊の發作性變化のみを呈することがある。時としては痙攣は痕跡もなく、或は痙攣は痕跡のみを示して意識の消失のみが目著くことがある、又口邊を搐搦し、顔面をしかめ、肩を昂上し、足を高くはねるなどの限局性の一時性の痙攣が起りて意識の消失をあらはすことのない場合もある。醫學上ではこれを小癲癇と名づける。又前にも後にも痙攣を起すことなくして朦朧状態をあらはすことがある。又尋常の睡眠に就きたるものが、夜中俄かに目を覺まして大聲を發し、若しくは彷徨し、若しくは暴行を敢てするやうなことがある。

癲癇の發作が長く續きて劇しくあらはれるときはそれがために兒童は遲鈍となり、注意が散漫となり、物事を忘れ易くなる。さうして觀念聯合が遅くなり、想像が乏しく、運動が鈍くなる。感情にも變化が起り、刺戟性となり、氣分が不快になり、固執性にして憤怒し易くなる。後には遂に癡呆に陥るまでにその症狀が進行することがある。

(二)

癲癇性精神低格

癲癇性の性格○感情及び意思の異常○刺戟性○惡意○喧嘩口論○殘忍刻薄○喧嘩癖○飲酒不堪

癲癇の症状は此の如くに癡癡と意識消失とが、著しくあらはれる場合と、すこしも癡癡がなくて僅に一時性の意識障害を起すやうな場合とがある。いづれにしても癲癇と名づけられるところの疾病をあらはすだけの變化が脳髓の中に存するものと見ねばならぬ。さうしてその變化は醫學上にていふところの變性に屬するものである。從て此の如き癲癇性の變化が脳髓の中に存して癲癇の症状をあらはすべきものの性格は一種特異のものである。これを癲癇性性格と名づける。

癲癇性のものにおいて感情及び意思の異常を呈することは極めて著しく、その性格は刺戟性と惡意とを以て特徴とする。その性質は陰氣で、不機嫌で、邪推曲解し易く、猜疑の心が強くして、常に他から侮辱せられるやうに感じ、他人が何の氣なしに言つたことをも惡意に解釋し、忠告を聞いて却て自己を誹毀するものと思ひ、又常に他を誹毀するの傾向をあらはす。頑固で、自己を内省することがなく、自己中心にすべてのことを考へ、虚言を吐くことが多い。癲癇性のものの虚言は彼の精神薄弱のものが自己を防衛するために虚言を吐くことは相違して主に他を攻撃するがためである。又他と與に事をなすに方りて權謀術數を主とするのが常である。癲癇性のものの性格の異常として他の兒童と喧嘩口論をなし動もすれば腕力を振ふのが著しく目につくが、これも惡意の表現と見

るべきである。又動もすれば暴行を敢てし、殘忍刻薄で、無謀なる侵略をなし、他の物を竊盜してしかも厚顔無恥なるが常である。亂暴するときには相手を選ばずして兩親に向ても、教師に向ても又他の近親のものに向つても遠慮することが無い。

癲癇性のものにおいてその刺戟性が強劇となれるときは喧嘩癖となりて現はれ、或は暴力を用ひて他を傷け、無意味に憤怒して亂暴狼籍の振舞をする。性慾も亦容易に發揚せられて女性に對して暴力を振ふことが多い。要するに癲癇性のものは常に喧嘩腰で、復讐せねば承知が出来ぬ有様である。殊に飲酒不堪 (Alkoholintoleranz) といつて、酒類に對する抵抗力の著しく弱いのが常であるから癲癇性のものが酒を飲むと、闘争性と刺戟性とは著しく亢進して所謂醉狂の状態を呈するものである。

癲癇性のものにおいて智力が著しく侵されたる場合(癲癇性精神薄弱)にありてはその喧嘩癖、闘争性、無意味の憤怒等は更に著甚となるものである。

(III)

小癲癇の發作○軽度の意識障害○居睡の有様○癲癇性朦朧状態○半意識の状態

癲癇性精神低格

小癲癇の場合では、既に前にも言つた通り、痙攣が起ることなく、時としては軽度の意識障礙が現はれて霎時の間凝視の状態を呈して而かも本人はその發作に就て何事をも知らぬに過すことがある。その状態が丁度居睡の有様に類似して居る。その發作の持續する時間は多くは一分以内である。この症状は癲癇としては實に軽度のものであるに相違ないが、性格の異常を現はすことにありては大癲癇に於けると同様である。又時として小癲癇の場合にありても數週若しくは數月に涉りて意識の障礙をあらはすやうなこともある。

癲癇性の朦朧状態も、兒童にありては軽度にはあらはれて、「ヒステリー」に於けると同様に半意識の状態を呈することがある。その場合、周囲の人や物は明かに認めながら丁度夢のやうな状態にて何事をかする。直ぐに醒めて自分ながらその状態に驚くのである。シヨルツ、グレゴル兩氏の著書に據りて、その一例を挙げると、兒童は學課の時間に俄に坐席より起ち、衣服を脱せむとする、勿論他から見ては何の理由かわからぬが、それより前から既に退屈して精神散漫の様子が見えて居る。若し衣服を脱することが妨げられるとき驚愕したやうな體裁で再び坐席に復し、ひこりぶつくつぶやくのである。それから時を経て再び椅子より起ち、二三次飛び上り、頭を廻轉して、頸が堅くなつたと訴へ、又は最早嘔下することが出來ぬと訴へる。全級の兒童はそれを見て笑ふのでその兒童

も一處に笑ひくすれて、而かもそれが何のためであつたか自分にもわからぬ。教師がその心氣を一轉するために、計算の問題を與へると、計算は正確にする、しかしながら何時もよりは甚だ緩慢である。さうして突然自己の前に置かれたる書物を地上に投げ棄る。この場合、目は常に空を見て居る。注意して觀察するときは顔面と手腕とに迅速なる搖擗があらはれて居る。家に歸りてからもその日は大抵同様の状態で、翌朝頃よりして漸次に平常に復する。場合によりては半裸體の儘にて街上を走り、或は陰部を露はし、或は室内に放尿するやうなことがある。

(四)

氣分の迅速變換○悲哀性○心配性○憤怒性○身體の異常○行儀正しく○嚴格○鄭重○我意強く○頑冥不靈○迷信

癲癇性のもものにありては氣分が迅速に變換することが善く知られて居る。實際に昨日は愛嬌があつて深切であつたものが、今日は悪意があり、不平で、強情なるものとなるやうなことがある。さうして此の如く氣分が變換することに就て別段に認むべき原因がない。

癲癇性のももの氣分の變常に、悲哀性になるものと、心配性になるものと、憤怒性になるものとの

種類がある。その悲哀性のものは鬱憂病イランコリに似て、常に沉鬱の状態を呈するものであるが、これが兒童にあらはれることは稀有である。これに反して心配性になるものと、憤怒性になるものと、及びこの兩種の混交したるものは癲癇性の兒童にしばしばあらはれる。前夜は快活に寝に就きたる兒童が翌朝は不精不精に起きて、小言をいひ、従順ならず、これに對して叱責をなすときは劇しく憤怒して周圍のものに反抗する。普通の兒童にありては一寸した口論位で済むものが癲癇性のものにはりては無意味の劇怒となりてあらはれる。時としては癲癇性のものが何等の目的なく又何等の意味なく、内部の苦惱に壓迫せられて彷徨ウロウロをすることがある。

此の如き癲癇性のものの氣分の變常は、他の場合に於けるに異なりて、始と終とが明かに限劃せられて居る。又普通の場合に於けるに異なりてその原因が明瞭でない。又この場合にありて外部の原因はただ興奮状態を起す副因として見るべきもので、これを除き去りたりとてこれによりてその氣分の變常を治することは出来ない。又此の如き氣分の變常は脈搏を早くし、顔面を赤く又は蒼白にして、頭重、眼華閃發、軽度の眩暈、催眠等の身體症狀を起し、而かもその精神の興奮が甚しからざることがある。

又癲癇性のものは行儀が正しく、嚴格で、事物の整理をよくし、言語應接が鄭寧であるがために、

學校では操行善良と評せられるのが常である。しかしながら自我が強く、自分を衒ひ、頑冥不靈にして、面従腹非の行が多く、中には宗教的の迷信に陥るものも尠からず。又蒐集癖があらはれて、いろいろの無用なる物品を集めることに快感を有するものがある。